立山町文化財調査報告書第６冊

浦田遺跡

――第２次発掘調査報告――

1988年

立山町教育委員会

序

立山町は霊峰立山を望む新川平野に位置し、県内有数の穀倉地帯として、産業面や経済面において重要な役割を担ってきました。しかし、この穀倉地帯も祖先の営々たる努力によって成ったものであり、その歴史を子孫に伝えて行くことはたいへん意義深いことであり、また我々の義務であるとも言えましょう。

このたび調査の行われた浦田遺跡は、東大寺文書に記されている荘園「大藪荘」の中に所在していたと考えられ、穀倉地帯としての立山町のいわば揺籃の地であります。しかし、これまでは「大藪荘」の存在は知られていても、実態は全く不明でありました。

この報告書においては、昨年の調査成果もあわせて報告してあり、「大藪荘」の一端を窺い知ることができます。そしてまた、これは新川郡の古代史の解明にも貴重な手がかりとなるものであります。本書が地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際しご援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査にご協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝いたします。

1988年３月

立山町教育委員会

教育長　　坂井市郎

例　　言

1．本書は、昭和62年度に立山町教育委員会が国庫補助金及び県費補助金をうけて実施した、富山県立山町浦田遺跡第２次緊急発掘調査の報告である。

2．調査期間は、昭和62年８月３日から同９月11日までの延24日である。発掘面積は約300㎡である。

3．調査は、立山町教育委員会社会教育課主事森秀典が担当した。調査事務局は立山町教育委員会におき、森が事務を担当、社会教育課長松井哲男が総括した。

4．調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。また、調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して謝意を表したい。

　秋山進午（富山大学人文学部教授）、宇野隆夫（同助教授）、岸本雅敏・池野正男・酒井重洋・宮田進一（以上富山県埋蔵文化財センター）　　（順不同・敬称略）

5．遺物整理、実測、製図は森・北川美佐子（立山町教育委員会臨時調査員）が中心となり、小田木治太郎・田島富慈美（以上富山大学学生）が参加した。

6．本文は、Ⅲ－３－（３）・（４）とⅥを北川が、その他を森が分担して執筆した。

凡　例

1．遺物実測図中のスクリーントーンは、次のことをあらわす。

　赤彩

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
Ⅱ　調査の経過……1
Ⅲ　調査の概要……5
　1．立地と層序……5
　2．遺　構……5
　　(1)　弥生時代後期の遺構……5
　　(2)　平安時代の遺構……6
　3．遺　物……12
　　(1)　縄文時代の遺物……12
　　(2)　弥生時代後期の遺物……13
　　(3)　平安時代の遺物……15
　　(4)　中・近世の遺物……17
Ⅳ　まとめ……18
Ⅴ　考　察……20
　1．弥生時代後期の遺構について……20
　2．古代の掘立柱建物について……23
　註
　写真図版

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第2図　地形と区割図……3
第3図　遺構全体図……4
第4図　遺構実測図……5
第5図　遺構実測図……7
第6図　遺構実測図……9
第7図　遺構実測図……11
第8図　遺物実測図……12
第9図　遺物実測図……14
第10図　遺物実測図……16
第11図　遺物実測図……17
第1表　昭和62年度検出堀立柱建物……19
第12図　第1・2次発掘調査区遺構全体図……21
第13図　畝田の一例……22
第2表　昭和61年度検出掘立柱建物……23
第14図　遺構実測図……24
第3表　富山・石川両県の古代掘立柱建物の平面プラン……26
第15図　a・b類建物小群配置図……27
第4表　2間×2間建物の構造と面積別分布……28
第16図　1～4類建物小群配置図……29
第17図　地域区分図……31
第5表　梁行2間以上建物の面積別梁行総長の傾向……31
第18図　昭和61年度調査区出土遺物実測図……35
第19図　昭和61年度調査区出土遺物実測図……36
第20図　昭和61年度調査区出土遺物実測図……37
第21図　昭和61年度調査区出土遺物拓影・実測図……38
第22図　昭和61年度調査区出土遺物実測図……39
第23図　昭和61年度調査区出土遺物実測図……40
第6表①　昭和62・61年度出土弥生土器・古式土師器観察表……41
第6表②　昭和61年度出土弥生土器・古式土師器観察表……42
第6表③　昭和61年度出土弥生土器・古式土師器観察表……43

I　遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県に接し、東西約43㎞、南北約21㎞、面積は308㎢を測る。

地勢は、三角洲や扇状地・河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらに山岳高地におよぶ多様な地形が、標高約10ｍから3,000ｍにかけて展開している。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく４区分できる。[1)]

標高400ｍ以下は、暖温帯の照葉樹林帯に属し、かって重要な食料資源であったカシ類が多い。

これに続いて標高600～700ｍまでは、暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食料資源であるクリ・コナラ・クヌギ類の生育帯で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物が育つ場でもある。

さらに標高1,500ｍまでは、ブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500ｍ以上は亜寒帯針葉樹林帯となっている。

今回調査を行った浦田遺跡の所在する町北部地域は、常願寺川扇状地末端部の湧水地帯にあたり、栃津川や白岩川等の中小河川が流入して、三角洲・小支谷・自然堤防などによる複雑な地形を呈している。

この様な地形の中で、遺跡は栃津川左岸の微高地上に立地している。また、遺跡の西側には小支谷があり、今回の調査区はこの小支谷に隣接した部分にあたる。

周辺には、縄文時代から中・近世に至る多数の遺跡が存在するが、特に弥生時代以降その数が増す。

これらの遺跡の中で、今回調査を行った浦田遺跡に関連があるものとしては、江上Ａ・Ｂ遺跡(弥生中期～古墳)、東江上遺跡（飛鳥・奈良）、中小泉遺跡（弥生中・後期）、正印新遺跡（弥生中期～古墳）、日中源兵衛腰遺跡（弥生後期～古墳前期）、辻遺跡（弥生後期～古墳前期・中世）、利田仕入遺跡（弥生中期）、塚越遺跡（弥生後期～古墳）、鉾ノ木遺跡（弥生後期～古墳）、稚児塚古墳、塚越古墳、藤塚古墳、利田横枕遺跡（平安前・中期）などがあげられる。また、若干南に離れてはいるが、須恵器生産地である上末古窯跡群も、関連遺跡として重要である。

II　調査の経過

浦田遺跡の発見は、昭和47年家屋新築に際して弥生土器が出土したことを契機としている。しかし、遺物包含状況など遺跡の性格は近年まで一切不明であった。『立山町史[1)]』には浦田靄気(あいのき)遺跡と記されている。

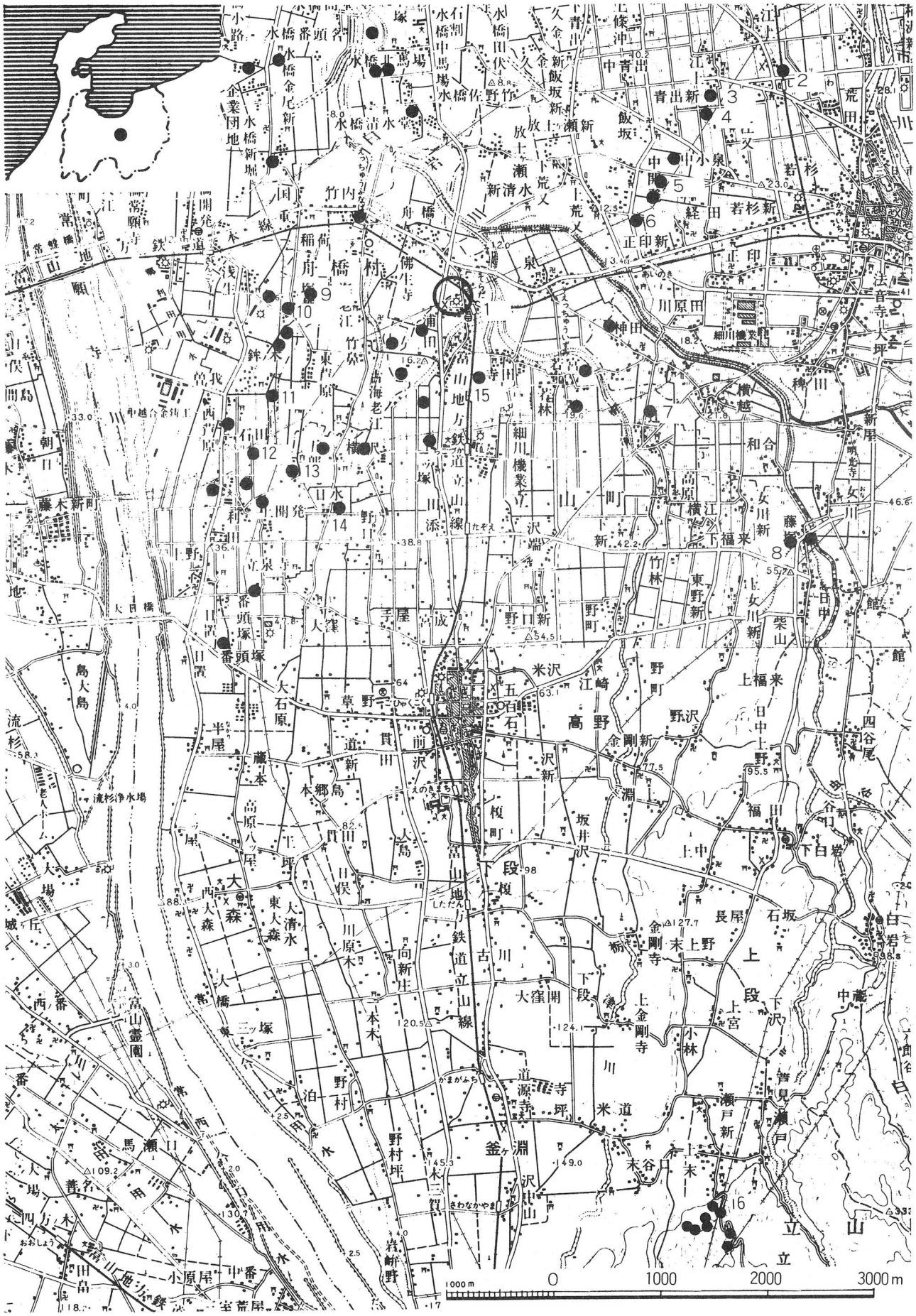
昭和61年１月、宅地造成の申請を受けて立山町教育委員会が試掘調査を行い、弥生時代の遺構・遺物を多数検出した。このため、同年７月から９月にかけて本調査が行われ、同遺跡が弥生時代中・後期および平安時代の複合遺跡であることが判明した。なお、この調査区は本年度調査区の北側隣接地にあたり、調査結果は『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』において報告している。

昭和62年度調査

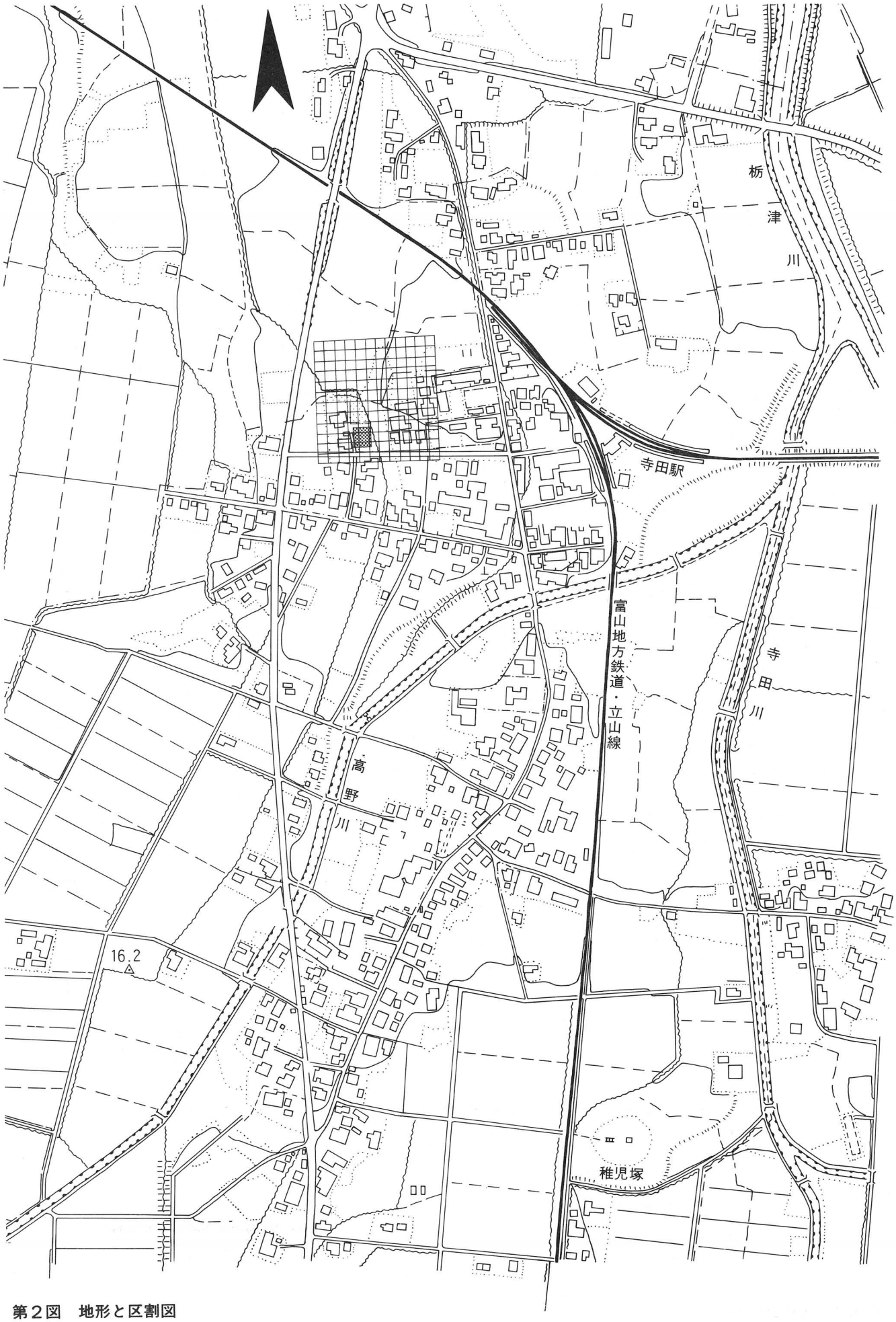
昭和61年12月、家屋新築に伴う宅地造成の申請が提出された。これを受け、立山町教育委員会は昭和62年１月21日の１日間試掘調査を実施し、溝・穴などの遺構と数多くの遺物を検出した。

この結果をふまえ、富山県教育委員会・立山町教育委員会・工事主体者の三者により協議・調整が行われ、立山町教育委員会が調査主体となり、国庫補助をうけて記録保存調査を実施することとなった。

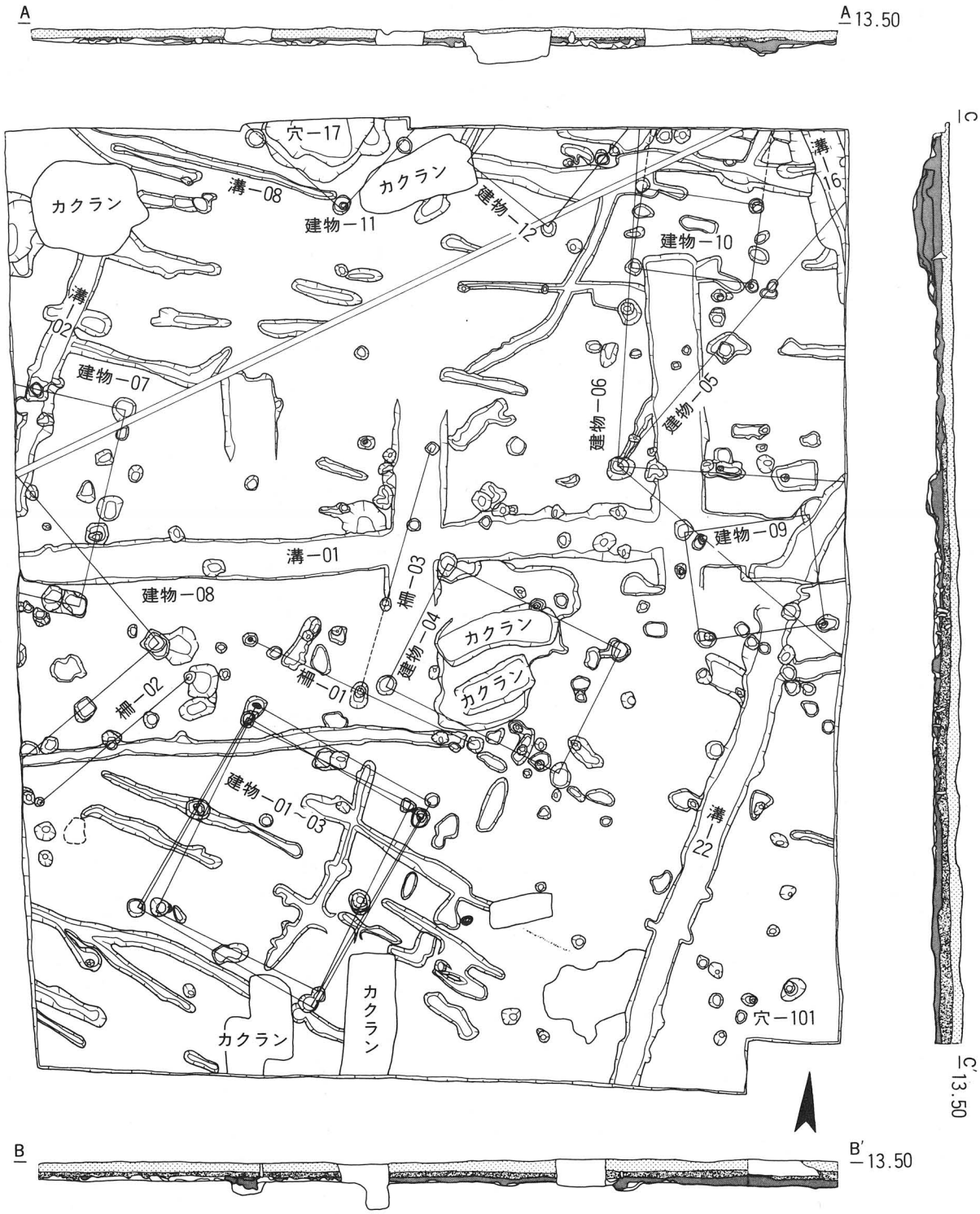
発掘調査は８月３日～９月11日の延24日間にわたって実施した。発掘面積は約300㎡である。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡　1.浦田遺跡　2.東江上遺跡　3.江上Ｂ遺跡　4.江上Ａ遺跡　5.中小泉遺跡　6.正印新遺跡　7.辻遺跡　8.日中源兵衛腰遺跡　9.塚越Ｉ遺跡　10.塚越古墳　11.鉾ノ木Ｉ遺跡　12.利田横枕遺跡　13.五郎丸遺跡　14.日水遺跡　15.稚児塚　16.上末窯跡群



第２図　地形と区割図



第２層・茶褐色土層

第３層・漸移層

第４層・黒褐色土層

0　5m

第３図　遺構全体図

Ⅲ　調査の概要

1　立地と層序（第２・３図）

浦田遺跡は、富山地方鉄道寺田駅の西約200ｍ、立山町浦田字八郎に所在する。このあたりは常願寺川扇状地扇端部の湧水帯にあたり、栃津川に寺田川・高野川という小河川が合流する地点の西岸に近い。周囲は、かつては水田が広がる純農村地帯であったが、現在は宅地化が進んでいる。

遺跡は、前記小河川及びその小支谷によって開析された微高地上に立地する。この微高地は、南北約１㎞、東西約500ｍの広がりをもち、舌状を呈している。遺跡の範囲は、周囲の宅地化がかなり進んでいるため明確ではないが、この微高地の北半を占めているものと推測できる。標高は、12.5～13ｍを測る。

層序は、第１層・耕作土、第２層・茶褐色土層、第３層・漸移層、第４層・黒褐色土層、第５層・黄褐色砂質土層の順で堆積している。茶褐色土層は平均20㎝、漸移層は５～15㎝で南側ほど厚く、黒褐色土層は10～20㎝の厚さで堆積している。

遺物包含層は第２～４層であり、遺構内の堆積土も基本的には黒褐色土である。

2　遺構

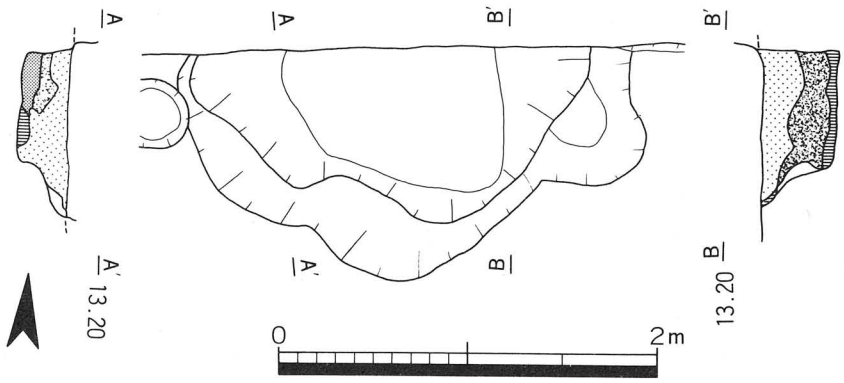
（1）弥生時代後期の遺構

穴―17（第３・４図）

調査区の北端、Ｄ２区で穴の南半部が検出された。平面形態は不整円形をなし、直径は約2.4ｍ前後と推測される。南から南西側にかけて段をもち、最深部の深さは42㎝を測る。

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・黄褐色土ブロック混り黒褐色土、第３層・黄褐色土混り黒褐色土、第４層・黒褐色土混り黄褐色土の順で堆積している。第２層は穴の東側ほど厚く、第３層は穴の西側にのみ堆積している。第２～４層が遺物包含層になっている。

遺物は、甕（第９図３・９）・高杯（第９図13）が、穴の西側からまとまって出土している。



第４図　遺構実測図　穴－17

溝—16（第３・12図）

調査区の北東隅で検出された。北西から南東に向ってまっすぐ走っており、さらに調査区外へと延びている。幅は約１ｍ、断面形態は舟底状をなし、深さは36～46cmを測る。

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・黄褐色土混り黒褐色土の順で堆積している。

なお、溝の方向及び堆積土より、昭和61年度調査区の溝—08の続きと考えられる。

溝—18（第３図）

調査区の北西隅で検出された。南東から北西に向って走っており、さらに調査区外へと延びている。幅は20cm前後を測る。断面形態は「Ｕ」字状をなし、覆土は黒褐色土の単層である。

遺物は、外面にススの付着した、ハケメ調整の胴部破片が出土している。

溝—22（第３図）

調査区の南東で検出された。北東から南西に向ってまっすぐ走っており、さらに調査区外へと延びている。幅は65～70cmを測る。底面は平坦で広く、深さは10～15cmを測り、北へ行くに従ってやや深くなる。

覆土は、第１層・黒褐色土、第２層・黄褐色土混り黒褐色土の順で堆積している。

また、北側で溝—01と切り合っているが、覆土の状況より、溝—22が古くなる。

遺物は、底面及び第２層から深鉢（第８図１）・甕（第９図８）・高杯（第９図20）が、第１層から須恵器杯（第10図12・26・29）が出土している。

（２）平安時代の遺構

建物—01（第３・５図）

調査区南半で検出された、２間（4.0ｍ）×２間（3.5ｍ）の南北棟掘立柱建物である。建物—02・03と重複しており、柱穴の切り合い関係より見て、３棟の中で最も古いと考えられる。建物方位は、南北柱列でとるとＮ—22°—Ｅをさす。柱間寸法は、桁行が2.0ｍの等間、梁行は東から1.8ｍ・1.7ｍを測る。柱穴掘方は、不揃いである。深さは15～30cmを測る。なお、P_2は長径70cmの楕円形、P_6は長径50cmの楕円形と、他の柱穴に比べて大きく、掘方もしっかりしているが、これはP_2・P_6が建物—01～03を通して使用されているためであり、特にP_2は深さも45cmと、他の柱穴に比べて深く、途中に段をもっている。

建物—02（第３・５図）

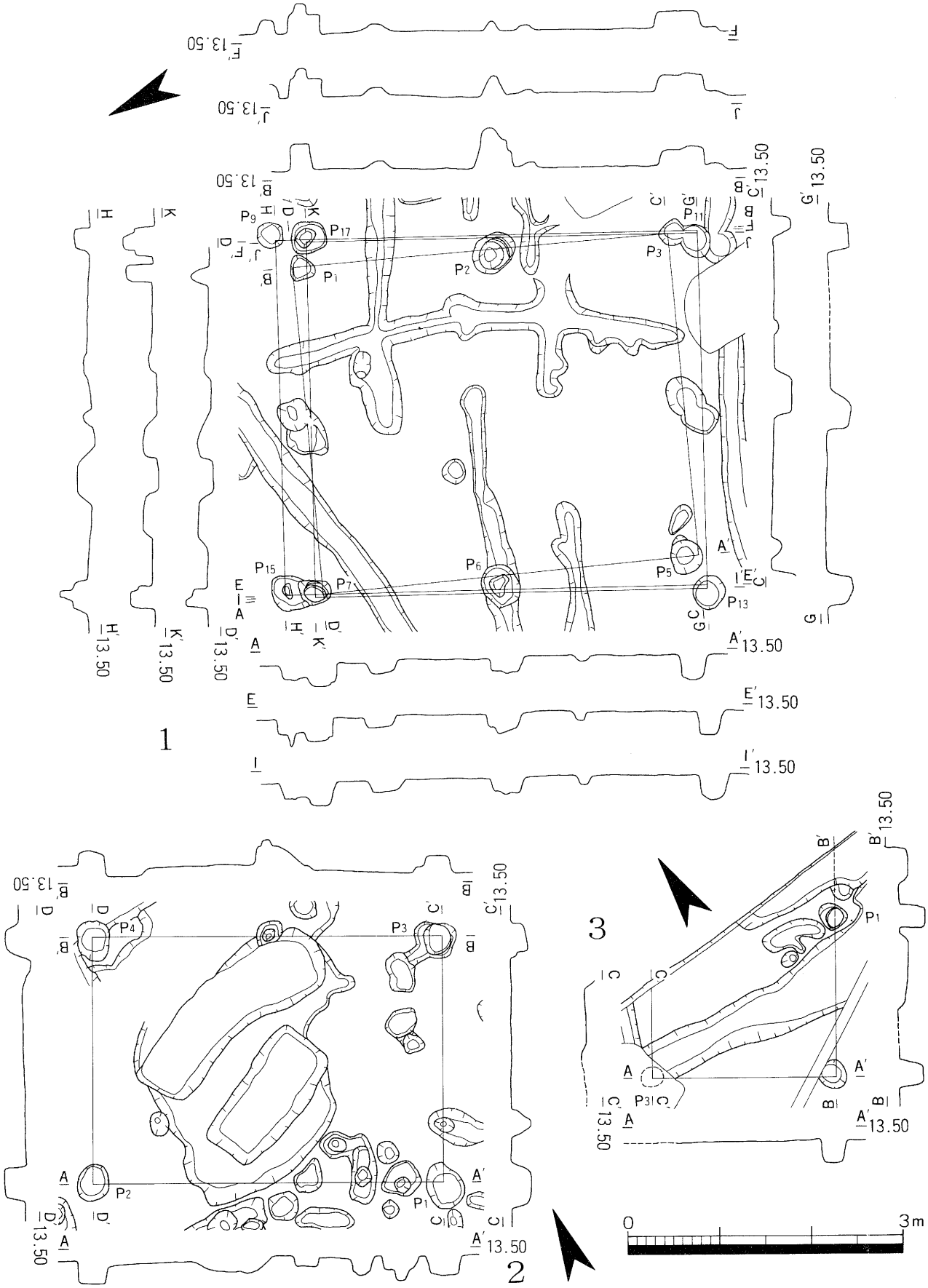
調査区南半で検出された、２間（4.6ｍ）×２間（3.9ｍ）の南北棟掘立柱建物である。建物—01・03と重複しており、柱穴の切り合い関係より見て、建物—01より新しく、建物—03に先行すると考えられる。また、P_2・P_6を建物—01と共用しており、特にP_2は東側柱列からはずれて位置している。建物方位は、南北柱列でとるとＮ—26°—Ｅをさす。柱間寸法は、桁行が2.3ｍの等間、梁行は東から2.0ｍ・1.9ｍを測る。柱穴掘方は、長さ（径）30～40cmの隅円方形・円形・楕円形と不揃いである。深さも15～40cmと不揃いである。

遺物は、P_{15}とP_{16}から内面ロクロナデ調整のある土師器甕の破片が出土している。

建物—03（第３・５図）

調査区南半で検出された、２間（4.3ｍ）×２間（3.9ｍ）の南北棟掘立柱建物である。建物—01・02と重複しており、柱穴の切り合い関係より見て、３棟の中で最も新しいと考えられる。また、P_2・P_6は建物—01・02と、P_7・P_8は建物—01と、P_{11}・P_{12}・P_{13}は建物—02と共用しており、独自の柱穴はP_{17}だけである。建物方位は、建物—02と同じくＮ—26°—Ｅをさす。柱間寸法は、桁行が北から2.0ｍ・2.3ｍ、梁行は東から2.0ｍ・1.9ｍである。柱穴掘方は、建物—02同様不揃いであるが、P_{17}は長径40cm、段をもつしっかりした掘方である。深さは15～30cmを測る。

建物—04（第３・５図）



第５図　遺構実測図　1.建物－01～03　2.建物－04　3.建物－12

調査区中央やや南で検出された、2間（3.8ｍ）×1間（2.5ｍ）の東西棟掘立柱建物である。建物方位は、南北柱列でとるとN－26°－Eをさす。柱間寸法は、桁行が1.9ｍの等間、梁行は2.5ｍを測る。柱穴掘方は、径40～50cmの不整円形である。深さは15～30cmを測る。なお、南側桁行中央の柱穴は撹乱によって失われている。

遺物は、P_2から土師器破片が出土しているが、小片のため時期は不明である。

建物－05（第3・6図）

調査区東側で検出された、2間以上（4.4ｍ以上）×2間以上（6.2ｍ以上）の南北棟掘立柱建物である。建物－06・09と重複しており、P_2を建物－06と共用している。建物方位は、南北柱列でとるとN－37°－Eをさす。柱間寸法は、桁行（P_1・P_2間）が3.1ｍ、梁行（P_2・P_3間、P_3・P_4間）は2.2ｍの等間である。柱穴掘方は、長さ（径）40～50cmの隅円方形・円形であるが、P_3のみは長さ30cmの隅円方形とひとまわり小さい。深さは25～30cmと揃っている。

建物－06（第3・7図）

調査区北東で検出された、2間以上（6.6ｍ以上）×3間以上（7.8ｍ以上）の南北棟掘立柱建物である。建物－05・10と重複しており、P_2を建物－05と、P_4を建物－10と共用している。建物方位は、南北柱列でとるとN－1°－Eをさす。柱間寸法は、桁行が南から3.0ｍ・2.4ｍ、梁行は3.3ｍを測る。柱穴掘方は、長さ（径）30～50cmの隅円方形・円形で、しっかりした掘方である。深さは20～40cmを測る。

建物－07（第3・6図）

調査区西側中央で検出された、2間（4.0ｍ）×2間以上（3.6ｍ以上）の東西棟掘立柱建物である。建物－08と重複している。建物方位は、南北柱列でとるとN－10°－Eをさす。柱間寸法は、桁行が1.8ｍの等間（推定）、梁行は北から2.6ｍ・1.4ｍを測る。柱穴掘方は、長さ（径）40～50cmの隅円方形・円形で、しっかりした掘方である。深さは25～50cmを測る。

この建物は、南側1間が廂になると考えられ、身舎1間・廂1間の特異な構造をとる。県内には類例はなく、石川県鶴来町安養寺遺跡[2)]の柴木A地点に同様な構造の建物が見られる。安養寺遺跡の場合には、身舎と廂の柱穴掘方にはっきりとした違いが認められ、身舎・廂とも3.0ｍの等間である点に、当遺跡の場合との違いが認められる。

なお、遺物は、P_1から平安時代の土師器甕（第9図32）が、P_3から土師器甕（第9図36）が出土している。

建物－08（第3・6図）

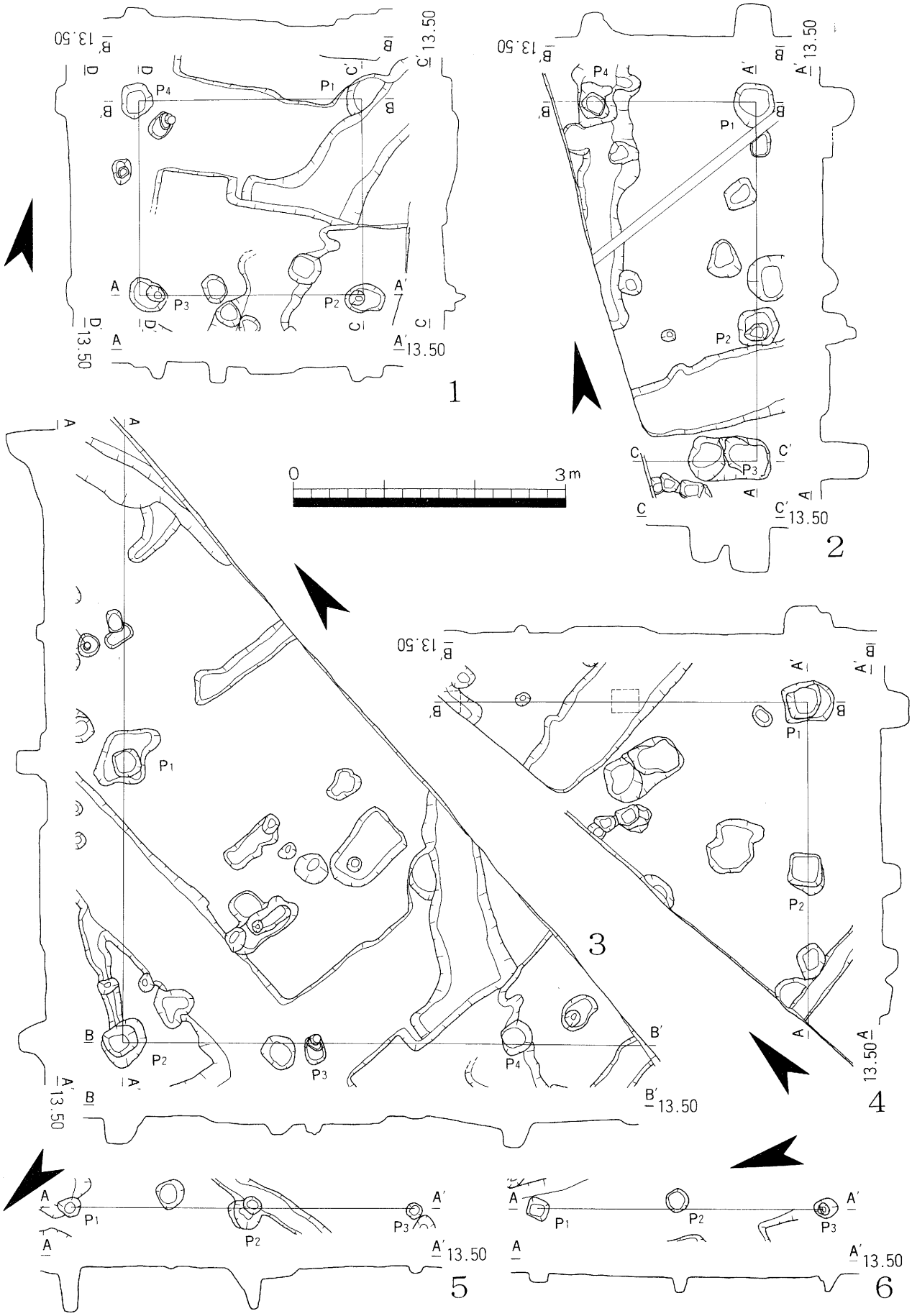
調査区西側で検出された、2間以上（4.0ｍ以上）×2間以上（3.6ｍ以上）の掘立柱建物である。建物－07と重複している。建物方位は、南北柱列でとるとN－43°－Eをさす。柱間寸法は、南北柱列（P_1・P_2間）が1.8ｍを測り東西柱列は2.0～2.2ｍと推定される。柱穴掘方は、長さ35～40cmの隅円方形である。深さはP_1が30cm、P_2が20cmを測る。

建物－09（第3・6図）

調査区東側中央で検出された、1間（2.2ｍ）×1間（2.0ｍ）の東西棟掘立柱建物である。建物－05と重複している。建物方位は、南北柱列でとるとN－12°－Wをさす。柱間寸法は、桁行2.2ｍ、梁行2.0ｍを測る。柱穴掘方は長径40～50cmの不整楕円形で、深さは10～25cmを測る。

建物－10（第3・7・12図）

調査区北東で検出された、1間（2.3ｍ）×1間以上（推定4間＝6.9ｍ）の南北棟掘立柱建物であり、北側妻列とみられる柱穴が、昭和61年度調査区の南端で検出されている。建物－06と重複している。建物方位は、南北柱列でとるとN－3°－Eをさす。柱間寸法は、桁行（P_1・P_2間、P_3・P_4間）が1.6ｍ、梁行は2.3ｍを測る。柱穴掘方は、径30cm前後の円形で、深さは、南側のP_2・P_3が15～20cm、北側のP_1・P_4が40cm、昭和61年度調査区の柱穴が約30cm前後を測る。



第6図　遺構実測図　1.建物－09　2.建物－07　3.建物－05　4.建物－08　5.柵－02　6.柵－03

建物—11（第３・７図）

調査区北側で検出された、１間以上（2.2ｍ以上）×１間以上（1.7ｍ以上）の掘立柱建物である。昭和61年度調査区との関係から、１間×１間又は２間×１間になると推定できる。建物方位は、梁行（P_1・P_2）でとるとＮ—39°—Ｅをさす。柱間寸法は、桁行（P_2・P_3間）が2.2ｍ、梁行（P_1・P_2間）は1.7ｍを測る。柱穴掘方は、径40cm前後の円形・楕円形で、深さは15～30cmを測る。

建物—12（第３・５図）

調査区北側で検出された、１間以上（推定2.0～2.1ｍ以上）×１間以上（1.8ｍ以上）の掘立柱建物である。昭和61年度調査区との関係から、１間×１間又は２間×１間になると推定できる。建物方位は、梁行（P_1・P_2）でとるとＮ—33°—Ｅをさす。柱穴掘方は、径30cm前後の円形で、深さは25cm前後を測る。

柵—01（第３・７図）

建物—01～03と建物—04の間、建物—04に隣接して検出された柱穴列である。柱列方位はＮ—64°—Ｗをさし、建物—02・03の梁行及び建物—04の桁行と方位を同じくする。柱穴掘方は、P_1・P_3が径30cm前後の円形、P_2は長径50cmの楕円形である。深さは、P_1・P_3が25cm前後、P_2が30cmを測る。柱間寸法は、2.4ｍの等間である。

なお、柵—01と建物—04は、方位を同じくするものの、その距離が約30cmと接近しすぎており、両者が同時に存在したとは考えにくい。

柵—02（第３・６図）

建物—08の東南側に、建物とほぼ平行な形で検出された柱穴列である。柱列方位はＮ—46°—Ｅをさし、建物—08との距離は約90cmを測る、柱穴掘方は、径20cm前後と小さい円形である。深さは、P_1・P_2が45～50cmであるのに対してP_3は６cmと極端に浅い。柱間寸法は、P_1・P_2間が2.0ｍ、P_2・P_3間が1.8ｍを測る。

なお、柵—02と建物—08は、方位に若干の違い（約3°）があり、柱間寸法も10cm前後違っているが、あるいは柵—02は建物—08の廂柱穴列であるかもしれない。

柵—03（第３・６図）

建物—04の北東側で検出された柱穴列である。柱列方位はＮ—15°—Ｅをさし、建物—04の南北柱列とは11°のずれがある。建物—04からの距離は、最も近いP_3で約60cmを測る。柱穴掘方は、P_1が一辺20cmの方形、P_2・P_3が径20cm前後の円形である。深さは10～15cmを測る。柱間寸法は、1.6ｍと等間である。

なお、柵—03の延長線上に柵—01のP_2（P_4と仮称する）が存在し、柵—03がP_4までという可能性も考えられる。この場合、P_3・P_4間が1.8ｍ、P_1～P_3各間が1.6ｍと柱間寸法が若干違っているのが気になる。しかし、柵—03と建物—04の方位差（11°）よりも、建物—01との方位差（7°）が小さいこと、柵—03、柵—01各々の柱穴の中でP_4（柵—01 P_2）の掘方だけが大きく、２次以上の使用が考えられること、等から、柵—03がP_4まで延びていた可能性も否定できない。参考までに、建物—01とP_4間の距離は、約1.2ｍを測る。

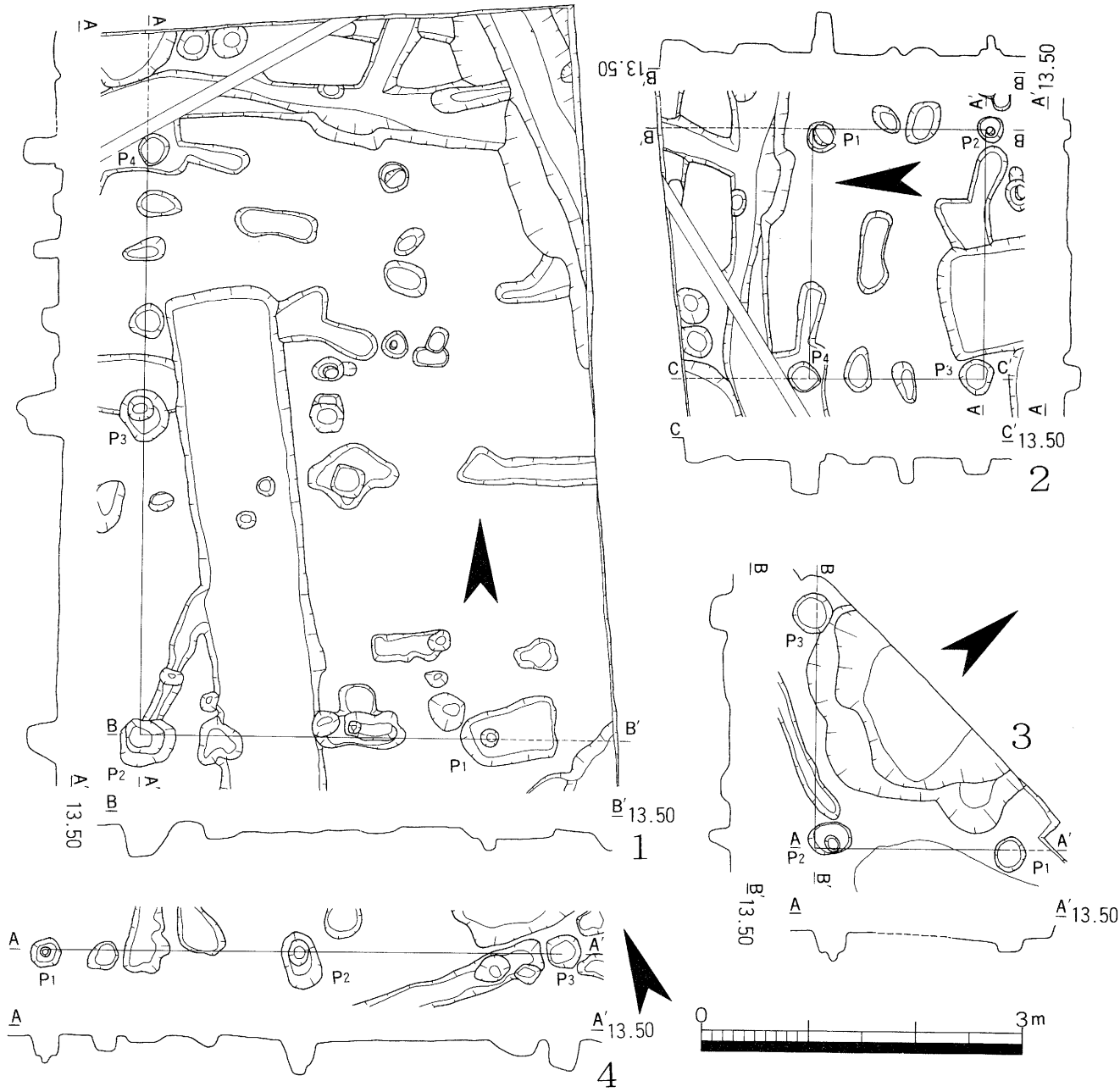
溝—01（第３図）

調査区の北半で検出された。調査区中央やや北を東西にまっすぐ走っており、さらに調査区外へと延びている。幅は80～100cmを測り、大部分は90cm前後である。底面は平坦で広く、深さは５cm前後ときわめて浅い。

覆土は黒褐色土の単層よりなる。

また、東側で溝—22と切り合っているが、覆土の状況から、溝—01が新しくなる。

遺物は、平安時代の土師器甕（第９図28・30）・須恵器杯（第10図33）・壺の脚台部（第10図35）等が出土している。なお、溝—22の第１層出土とした須恵器杯（第10図12・26・29）は、この溝—01と切り合っている箇所から出土したものであり、溝—01に伴うものとも考えられる。



第7図　遺構実測図　1.建物－06　2.建物－10　3.建物－11　4.柵－01

3　遺物

（1）縄文時代の遺物（第８図）

A　後期の遺物（第８図３・４・８～10）

８は深鉢の胴上部であり、幅広の浅い沈線を１条横走させ、上部にはＲＬの縄文を施している。胎土は砂粒が少ない。

９・10は精製深鉢の胴上部であり、同一個体と考えられる。幅広の浅い沈線を１条横走させ、上下に横位の綾杉文を施している。綾杉文は、上下を沈線にはさまれた区画文帯に充塡されていたものであろう。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。本江・広野新遺跡[3]に同様なものが見られる[4]。

４は粗製深鉢で、口縁部に狭い無文帯を残し、その下はＬＲの縄文を施している。胎土は大粒の砂粒を多量に含む。

３は深鉢底部で、表面は風化が著しいが、縦位の縄文の痕跡が見られる。

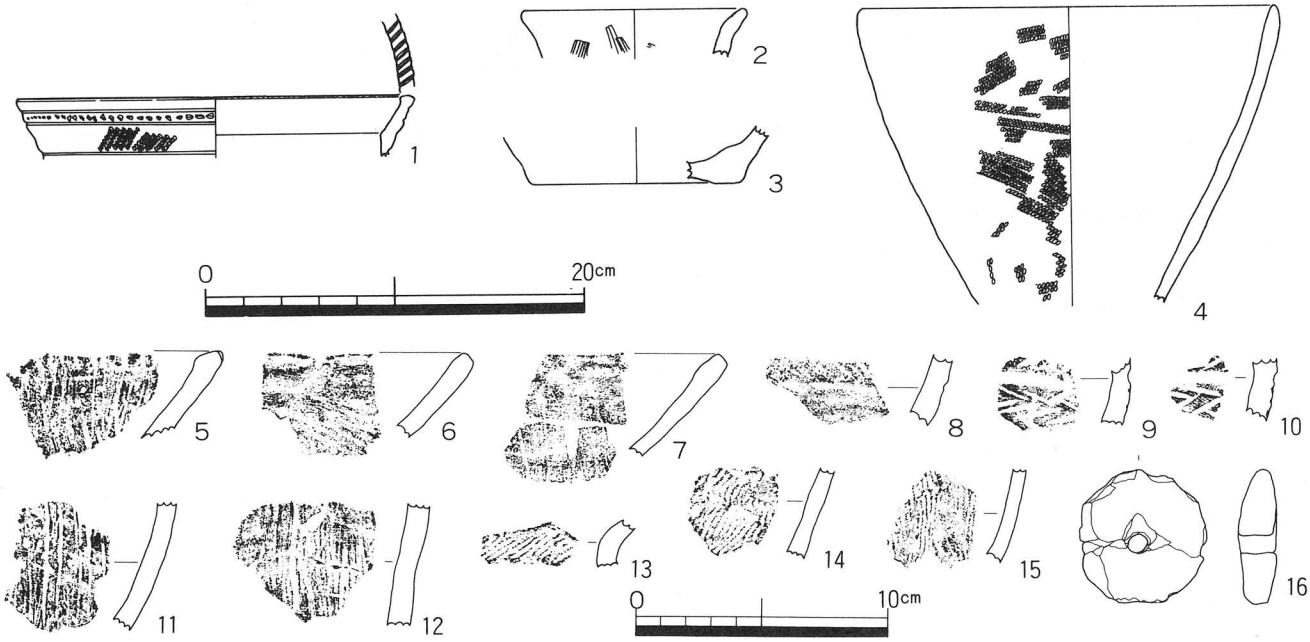
B　晩期の遺物（第８図１・２・５～７・11～15）

５～７・11・12は、中屋式前後の粗製深鉢であり、５～７は口縁部、11・12は胴部破片である。５は口縁内側をやや肥厚させて、指撫でによって若干凹んだ面を、斜め内側上方に向けて取っている。口縁外面端は条痕原体によって連続刻みが施されており、条痕は植物の茎によるものと考えられ狭く深い。６は口縁端内外に浅い沈線を１条施しており、端には指撫でにより面をとっている。口縁外面はよく磨いており、その下に浅い条痕を斜めに施している。７は口縁端内側に浅い沈線を１条施しており、端には指撫でにより面をとっている。口縁外面はやはりよく磨いており、その下に浅い条痕を縦に施している。11・12はやや幅広の条痕を縦に施している。胎土は、５・11が大きめの砂粒を多く含み、６・７・12は細かめの砂粒を少量含む。

１・13～15は、晩期末又は弥生時代の天王山式に属すると考えられる。１は内彎して開く精製深鉢の口縁部で、口縁端に連続刻みを施し、２条の沈線間を棒状具により連続刺突し、その下に幅広の縄文帯をとって下に沈線を１条引く。胎土には大きめの砂粒を多く含む。13～15は同一個体の頸部から胴部であり、細かなＲＬの縄文を施している。胎土は砂粒が少なく、繊維を含む。

C　土製品（第８図16）

有孔の、中央部が厚い円盤状土製品で、紡錘車である。焼成前に穿孔を行っている。



第８図　遺物実測図　1.溝－22　5.穴－101　その他.包含層

（2）弥生時代後期の遺物

弥生時代後期の遺物は、穴―17及び溝―22に伴って出土したものと、包含層から出土したものとがある。包含層からの出土遺物は、調査区北側からの出土量が多く、南へ行くに従って少なくなる。

穴―17出土遺物（第9図3・9・13）

3は無文の有段口縁甕で、口径23.0cmを測る。有段部分外面の屈曲稜が明瞭でなく、内面にも段が無い。口縁全体が頸部から斜めに開き、端部は丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整。9は「く」の字口縁甕で、口径18.0cmを測る。頸部内面は丸味を持って折れ、外反する。端部は面をなす。口縁部内外面ともハケメ調整。13は体部が小さく浅めで口縁部が大きく外反して開く高杯で、口径22.8cmを測る。内外面ともヘラミガキ調整の後、赤彩する。

溝―22出土遺物（第9図8・20）

8は「く」の字口縁甕で、張りが弱く最大径が下半にある胴部に、短く外傾する口縁部がつく。胴部は全体的に厚作りで、口縁部はやや薄手。口縁端は角ばるが、面はとらない。口径19.8cm。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はハケメ調整。なお、8は溝中央から押しつぶされた状態で出土したが、底部は出土していない。20は高杯の脚部で直線的に開き、裾はわずかに弧を描いて開くものと考えられる。内部は中空で、外面に赤彩を施している。

包含層出土遺物（第9図1・2・4～7・10～12・14～19・21）

1は細頸長頸壺で、口径9.5cm。端部内面を若干肥厚させている。端部外面はヨコナデ、他はハケメ調整。

2は擬凹線を施した有段口縁甕で、口径18.0cm。有段部分外面の屈曲稜が明瞭でなく、外反して端部を尖り気味におさめる。口縁部内面はヨコナデ調整。

4～6は無文の有段口縁甕である。4は口径16.2cm、外面に明確な稜をもち、直立気味に外反して端部は丸くおさめる。5は口径16.2cm、外面の屈曲稜は明瞭でないが、頸部内面に鋭い稜をもつ。直線的に外傾して端部は丸くおさめる。6は口径16.2cm、有段部外面を弱く張り出させ、直立気味に外反して端部は丸くおさめる。なお、4～6とも口縁部内面はヨコナデ調整。

7は受口状口縁甕で、口径20.1cm。口縁外面をクシ状具で連続刺突している。口縁部内面はヨコナデ調整。なお、外面に多量のススが付着する。

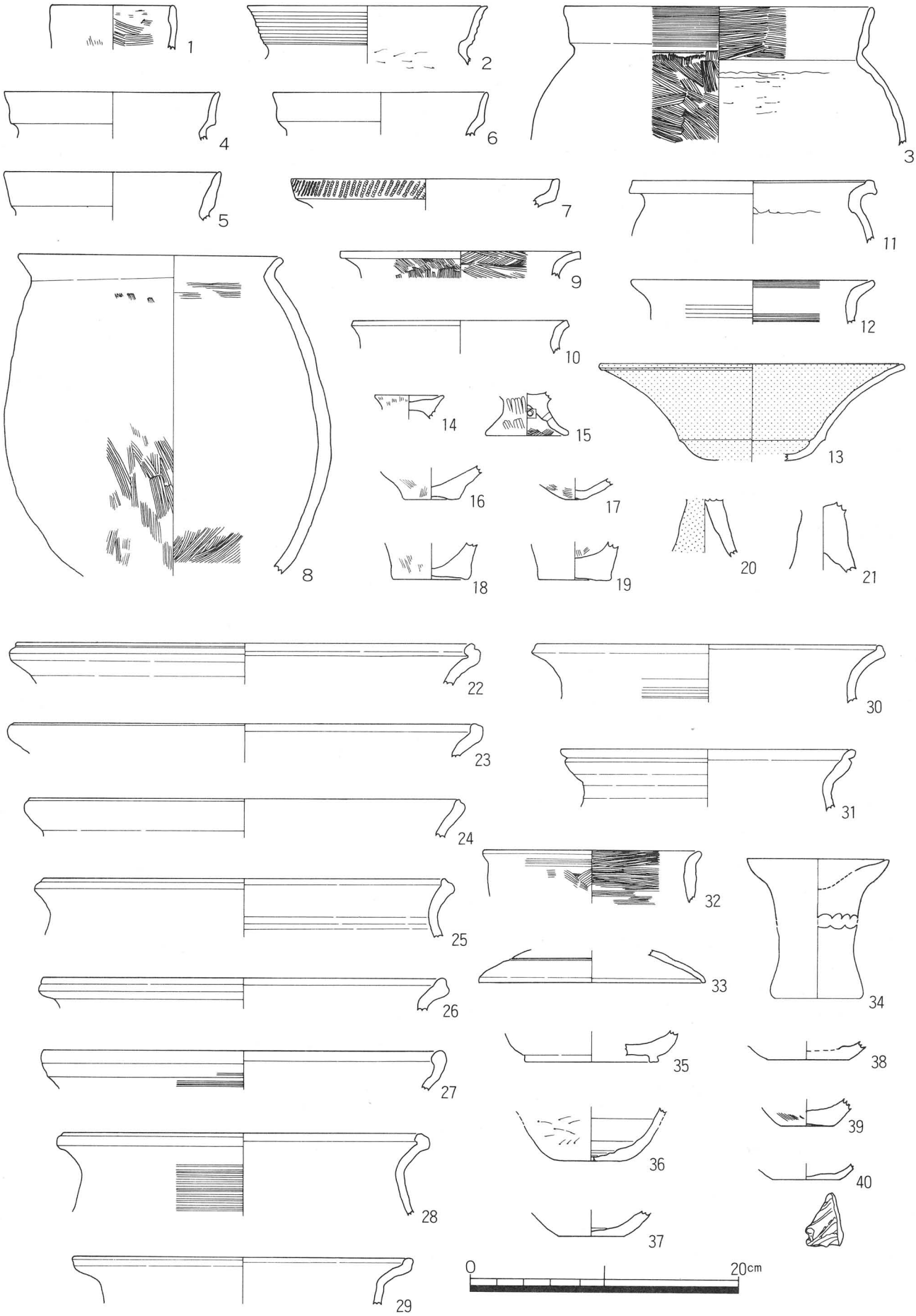
10～12は「く」の字口縁甕である。10は口径16.3cm、頸部内面が丸味をもって折れ、途中で外傾度が変わる。端部はヨコナデしてわずかに凹ませ、面をとる。口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ調整。11は口径20.0cm、頸部で急激に外反し、短い口縁部が水平に近く開く。端部は上下につまんでやや幅広の面をなし、つまみ上げた部分をもう一度ナデて上に向いた面を作っている。胴部と頸部以上の接合痕が、外面にはかすかに、内面にははっきりと残っている。口縁部内外面はヨコナデ、胴上部内外面はナデ調整。12は口径18.2cm、直線的な胴上部からゆるやかに外反し、斜め上方に直線的に口縁部が広く、端部は丸くおさめる。口縁部外面及び頸部内外面はヨコナデ、胴上部内外面はナデ調整。なお、口縁部内面及び胴上部内外面に、ハケ原体によるものと考えられる擬凹線風の文様を施している。あるいは、ハケメ調整を意識的に残したものとも考えられる。

14は蓋のつまみで、径5.2cmとかなり大きい。頂部を広く凹ませ、端部を斜め上方につまみ出している。外反して伸びる体部がつくものと思われ、甕の蓋と考えられる。

15は台付壺又は台付鉢の脚台部で、脚端部径6.2cm。偏った位置に2小孔を穿っているが、内面に貫通していない1小孔があり、3孔を穿つつもりであったらしい。脚外面及び体部内面はヘラミガキ、脚内面はケズリとハケメ調整。

16～19は底部で、いずれもやや上げ底状を呈する。

21は高杯の脚部で、脚内は充塡されている。外面はナデ調整。（森）



第9図　遺物実測図　32.建物－07・P1　3・9・13.穴－17　36.建物－07・P3　28・30.溝－01　8・20.溝－22　その他.包含層

（3）平安時代の遺物

平安時代の遺跡には須恵器と土師器がある。調査区全体の遺物包含層である第２～４層から出土している。遺構内からの出土点数は少なく、一括として取り扱う。

須恵器（第10図）

須恵器は杯Ｂ蓋・杯Ａ・杯Ｂ・壺・瓶・横瓶・甕などの破片がある。小破片が多く、全形を知り得る個体は少ない。

杯Ｂ蓋　第１次調査報告書においては４群に大別されている。[5] 本年度調査においては、Ⅲ群―つまみが付かず、頂部切り離しが糸切り技法のもの、Ⅳ群―つまみが付かず、頂部切り離しがヘラ切りによるもの、に属する個体は見られなかった。遺物は、Ⅰ・Ⅱ群に属する個体と、若干のそれ以前の時期の個体に分けられる。

Ⅰ群（２～４・６・10・11）つまみが付き、頂部切り離しに糸切り技法を用い、頂部全面又は肩にロクロ削りを施すものを含む。頂部は平坦で肩が張って斜め下方にのび、縁部近くで小さく屈曲する。縁端部は丸味をもって折れるもの、稜を明瞭に残すもの（２・３）があり、端部は垂下するもの、やや外方にのびるものがある。６は頂部中央までロクロ削りを行い、肩には１条の沈線が巡る。頂部内面はロクロナデ調整。口径は11.8～16.0cmのものがある。口径によって、11.8～12.0cm（10・11）、13.4cm（６）、16.0cm（２・３・４）の３種に分類されよう。

Ⅱ群（５・７～９）つまみが付き、頂部はヘラ切り技法によって切り離し、ロクロナデ調整し、ロクロ削りを用いないものを含む。全形を知り得るものは８のみで、他はつまみが付くものと想定してこの群に入れた。８は口径11.8cm、高さ2.3cm。平坦な頂部には、中央部がやや高くなる小さなつまみが付く。つまみの最大径は2.2cm。頂部内面は中央までロクロナデ調整。９は口径11.6cm、頂部は丸味をもってゆるやかに縁端部に到る。端部は巻き込む形態。頂部内外面には不定方向の仕上げナデが施されている。口径は11.6～14.0cmのものがある。

Ⅰ群土器は上末窯跡群の法光寺谷１号窯の遺物と推定されている[5]が、本年度Ⅰ群土器は上末窯跡群の製品と推定されつつも、窯跡名までは特定できないと考えられる。Ⅰ・Ⅱ群土器は併行関係にあり、９世紀中頃を中心とする年代と推定されている。

１は、口径約18cm、頂部はほぼ平坦でゆるやかに縁端部にのびる。端部は折れまがる形態。頂部外面は浅いロクロ削り調整で、中心には最大径4.0cmの中央が窪むボタン形のつまみがつく。頂部内面は一定方向のナデ仕上げ。この蓋は、上末窯跡群とは別の窯の製品で、Ⅰ・Ⅱ群に先行して、８世紀前半の頃の遺物と推定されている。[6]

杯Ａ（12～20）口縁部が直線的に外傾するもの、端部で外傾度が増すものがある。底部外面はヘラ切り後、軽いナデ付調整。内面は中心部までロクロナデをするもの、仕上げナデを施すもの（18）がある。口径は11.0～13.0cm。

杯Ｂ（21～34）口縁部は直線的に外傾し、端部近くで外傾度が増す。高台は細くて低く、外端部は平坦なもの、わずかに上がるものなどがある。底部内面は仕上げナデを施すもの（28～30）がある。21は口径15.1cm、高さ6.4cm。底部はヘラ切り後ナデ調整。高台周辺はロクロナデ調整。29は高台が強くふんばる形。底部外面ヘラ切り後ナデ付け、内面は一方向のナデ調整。８世紀前半頃のものと考えられる。

壺（35・36・39）35は高台が付く壺の底部。高台は強くふんばった形で、端部は垂下する。底部は丸底風で、内面ナデ調整。36は壺の体部。外面に自然釉がかかる。39はゆるやかに外反する口頸部。口径12.0cm。

瓶（37）長頸瓶の頸部。外面に２条の沈線が巡る。

横瓶（38）口径11.9cmの横瓶の口頸部。体部と考えられる破片の調整は、内外面叩き締めの後、ロクロナデ。

甕（40）口縁端部は水平にのび、内面に段をもつ。端部直下には突帯が巡り、その下に櫛描波状文帯が巡る。稜角的に仕上げられ、古い様相をもつが、櫛描波状文の形態から、８世紀前半以降のものと考えられる。

土師器（第９図22～40、第11図２・４）

土師器は杯Ａ・杯Ｂ蓋・杯Ｂ・椀・皿・甕・堝がある。小破片がほとんどで、全形を知り得る個体はない。

杯A（40）底部片。外面は糸切り未調整。内面には漆が付着している。

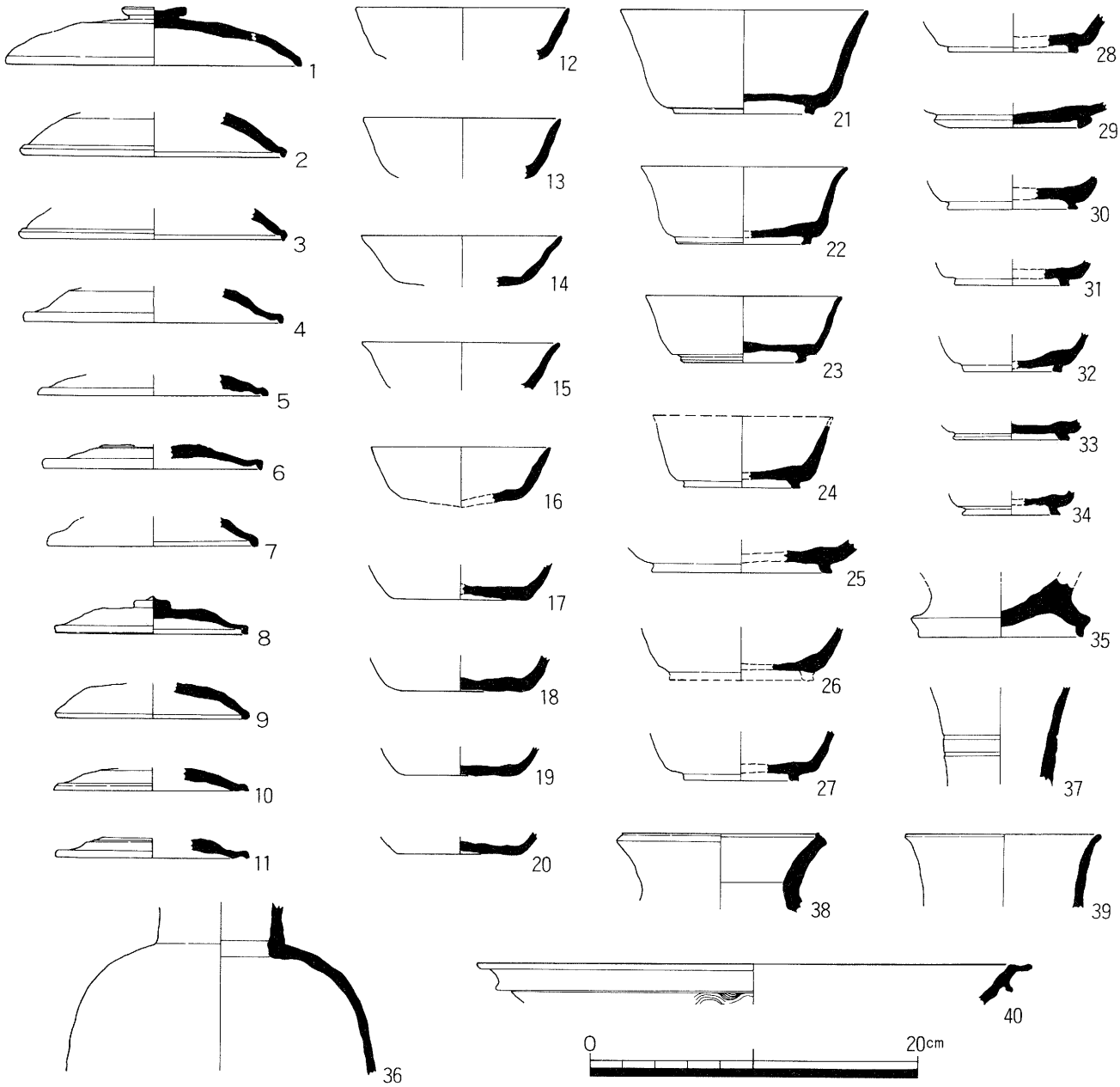
杯B蓋（33）内外面ロクロナデ調整。外面には二条の沈線が巡る。内外面赤彩。

杯B（35）ややふんばった高台が付く杯。内外面赤彩され、33とセット関係の可能性がある。

椀（2）口径10.0cm。口縁端部は端部付近で外傾度が変わり、端部内面はやや肥厚気味。皿と共に平安時代末。

皿（4）口径9.0cm。内外面ロクロナデ調整。口縁端部はゆるやかに外反し、端部は外面に面を取る。内外面赤彩。

甕（22～26・28～32・36～38）大部分が口縁部小破片。口径16.0～34.7cmのものがあり、21.6cm、25.0～26.5cm、30.0～34.7cmに分けられる。口縁部形態は多様で、第1次調査報告書に従って分類する。A(30)縁端部をつまみ上げて断面三角形の小さな口縁帯を作るもの。C_1（22・28・31）縁端部近くで内屈し、端部を肥厚させたもの。C_2（24・25）内端部を小さくつまみ出したもの。D_1（26・29）縁端部内面を肥厚気味に仕上げたもの。D_2（23）縁端部を内側に折り返して肥厚させたもの。28の体部上半内外面はカキメ調整。32は口縁端部外面がやや肥厚する甕。体部外面はハケメ調整で古い様相を示すがとりあえずこの項で述べた。36～38は小甕の底部。36は内面ロクロナデ、底部・体部外面にはケズリを施す。38の底部は糸切り未調整。27は塙。口径30.0cm。口縁端部は巻き込んで肥厚する。



第10図　遺物実測図　33・35.溝－01　12・26・29.溝－22　その他.包含層

（4）**中・近世の遺物**（第11図１・３・５～30）

中・近世の遺物には、土師質小皿・中国製磁器・珠洲・瀬戸・伊万里・越中瀬戸がある。第２層からの出土が多い。

土師質小皿（１・３）口縁部小破片。１は乳白色を呈し、口径約11.0cm、３は淡肌色を呈し、口径約10.0cm。口縁端部はヨコナデによって薄く尖った形状となる。中世後半の頃のものと考えられる。

中国製磁器（25）青磁の碗の体部小破片。淡緑色を呈し、内面には堅彫りで文様を施す。

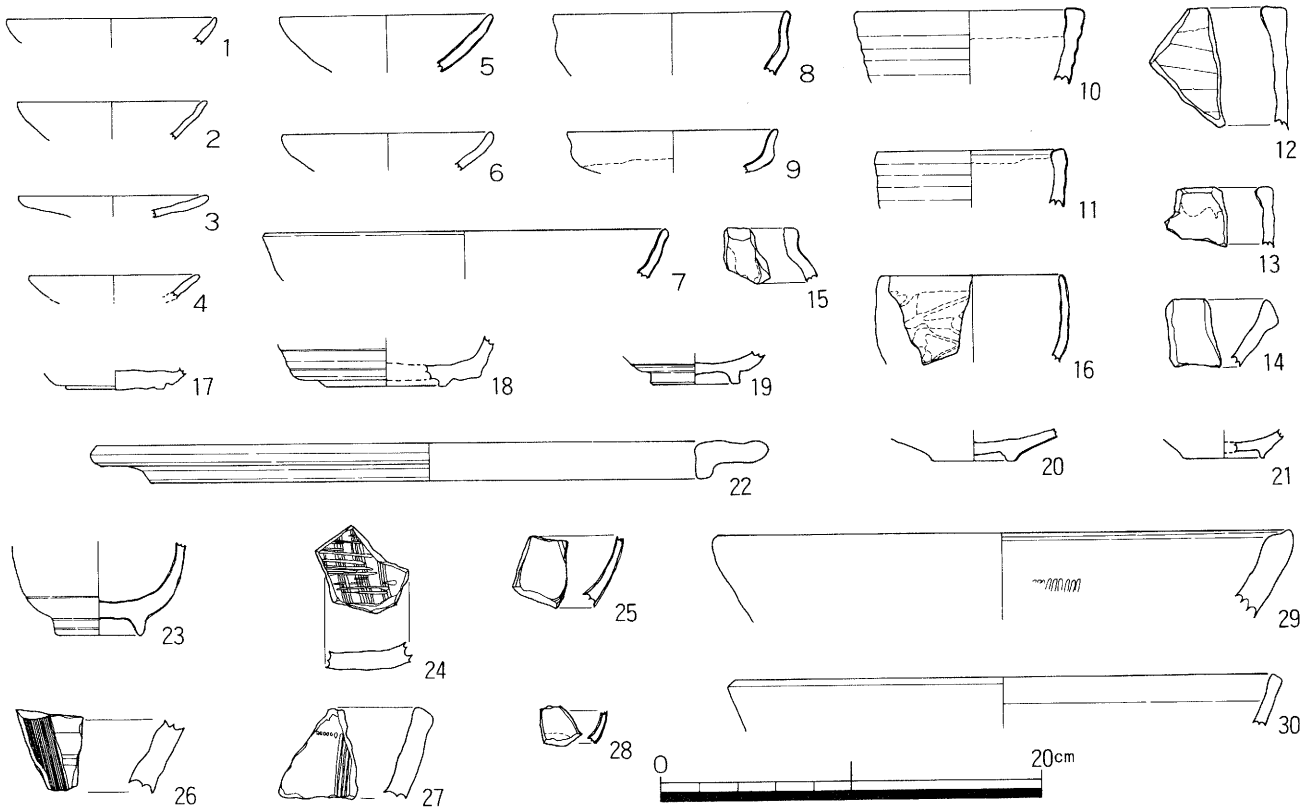
珠洲（26・27・29・30）珠洲焼の鉢。26は内面のロクロ痕が明瞭で、細かい11本以上のオロシメを施している。27は体部が直線的に外傾し、端部外面で面を取る。内面には10本以上のオロシメ。29は口縁端部がやや内彎気味で、内面に面を取る。オロシメは13本。30はやや薄手の体部が直線的に外傾し、口縁端部は外面に面を取る。26・27・29は13世紀後半～14世紀代。30はやや古く、13世紀前半頃と考えられる。

瀬戸（24）オロシ皿の底部片。灰白色を呈し、内面には縦横に荒いオロシメ、外面削り調整。

伊万里（23）内外面淡青色を呈する碗の底部。外面には、高台に２本、体部に１本の青い横線が巡る。時期は、17世紀後半～18世紀代と考えられる。

越中瀬戸（５～21・28）越中瀬戸には皿・鉢・丸碗・小壺がある。５～９・20・21は皿。５～６は口縁部が内彎気味にのびる丸皿で口径は共に11.2cm。５は内外面黒褐色、６は茶褐色。８は口縁部中央に弱い稜を有し、端部が外傾する。口径は12.4cm。９は底径６cmの削り出し高台の皿と判明している。口縁部は水平から大きく上方へ向けてのび、端部で外傾する。口縁部には内外面茶褐色の鉄釉を施す。７は口径約21cmの大きめの皿で、内外面に鉄釉を施す。26は断面四角形、21は三角形の削り出し高台。20の内面には重ね焼の跡が輪状に残る。10～14は鉢。10・11・13は外面に明瞭なロクロ痕を残し、口縁端部は平坦で内面がやや肥厚する。外面と口縁端部内面に施釉される。14は擂鉢の口縁部片。16は丸碗。内面、口縁端部外面に施釉し、削り仕上げの体部にはアメ状の釉を流しかける。17～19は鉢・又は碗の底部。17・19は削り出し高台。18は体部外面に淡緑色の釉がかかる。

その他（22）残存率1/12。断面、水平にのびる端部下面にスス付着。七輪などの練炭を固定する道具か。



第11図　遺物実測図　13.建物－04・P２　その他.包含層

Ⅳ　まとめ

浦田遺跡は、昨年に引き続いて２回の発掘調査を行った。そこで、昨年の調査成果を振り返りながら、本年度の調査成果と合わせて、これまでその実体について明らかになった点を簡単にまとめてみる。

１．遺跡は、弥生時代中・後期、平安時代の集落跡と考えられる。

２．１次調査区北側から、弥生時代中期の穴・溝が検出され、比較的多くの同時代の土器が出土した。

県内では弥生時代中期の遺跡は少なく、土器がある程度一括して出土している遺跡としては、高岡市石塚遺跡・滑川市魚躬遺跡・小杉流通業務団地内No.21遺跡・上市町中小泉遺跡などが挙げられるにすぎない。その不備を補う上でも良好かつ重要な資料であると言える。

遺物の器種には、壺・甕・鉢・高杯・蓋などがあり、石塚Ⅱ期[7]のものと考えられる。

弥生時代中期の遺構は、調査区北側のみで、遺物も２次調査では検出されなかった。当該期の遺構は調査区北側がその南端を示し、範囲は北へ向かってのびているものと考えられる。

３．１次調査区南側からは、主に弥生時代後期の溝が検出された。同時期の遺物はその周辺から出土している。

器種には、壺・甕・高杯・鉢・蓋がある。甕は、在地系の有段口縁甕と畿内系の「く」の字口縁甕、山陰系の甕がある。高杯・蓋には赤彩する個体が多い。時期は、立山町辻遺跡第１群土器と第２群土器の間に入る遺物が大部分。

２次調査では、同期に所属すると考えられる遺構は穴１・溝３にすぎない。遺物も小破片が多く、少ない。

器種には、壺・甕・高杯・蓋がある。高杯は、内外面赤彩したものが出土している。

４．１次調査で、遺物包含層から、古墳時代後期の土師器（甕）・須恵器（高杯・杯蓋）が出土している。出土量は非常に少なく、７世紀末頃のものであろう。

５．平安時代の遺構は、１次調査では、３間×２間が１棟、２間×２間が２棟、１間×１間が１棟、５間×３間が１棟の計５棟が検出されている。２間×２間の２棟の建物は、平面積が一般の２間×２間の建物より広いこと、完数尺を用いる点など若干の特殊性が見られた。

２次調査では、２間×２間３棟、２間×１間１棟、２間以上×２間以上２棟、２間以上×３間以上１棟、２間×２間以上１棟、１間×１間１棟、１間×１間以上１棟、１間以上×１間以上２棟の計12棟の建物、柵３、溝１が検出された。大部分の建物が、発掘区内の部分的検出であり、周囲への広がりが予測される。

６．平安時代の遺物は、遺構内からの出土は少なく、遺構周辺の第２～４層遺物包含層からの出土が大部分である。遺物には、須恵器・土師器がある。

須恵器は、杯Ｂ蓋・杯Ｂ・杯Ａ・皿Ａ・瓶・横瓶・甕・壺・壺蓋などの破片がある。大別して、上末窯跡群の製品とその他の窯跡の製品に分けられ、時期は９世紀中～末頃と推定される。

２次調査では、数片の８世紀前半の須恵器杯Ｂ蓋、杯Ｂ、甕の出土が見られた。

土師器は、口縁部形態が多様な甕が主体をなし、他に杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・椀・皿・堝の破片がある。

１次調査では、内外面赤彩した杯Ａ、少量の内面黒色の杯・杯Ｂが見られた。

土師器の時期は、明確ではないが、須恵器と同年代のものであろう。

７．中・近世の遺物は、主に第２層遺物包含層から出土している。中世末の土師質小皿、13～14世紀の珠洲焼鉢、青磁、瀬戸のオロシ皿、17世紀後半～18世紀代の伊万里、越中瀬戸の皿・椀・鉢・小壺などがある。

８．遺跡の所在する浦田地区周辺は、「東大寺領大薮荘」に比定されている[8]。荘園の存続期間は、文献から８世紀中頃～10世紀末と考えられており[9]、当遺跡の営まれた時期もその中に含まれる。大薮荘と当遺跡、及び周辺の遺跡との関係の解明が、引き続いての今後の課題である。

（北川）

遺構名	棟方向	柱間数	規模 桁×梁(尺)	柱間寸法m(尺) 桁	梁	平面積 (m²)	方位	備考
建物01	南北棟	2×2	4.0×3.5 (13.3)(11.7)	2.0 (6.7)	1.7,1.8 (5.7)(6)	14.0	N−22°−E	
建物02	南北棟	2×2	4.6×3.9 (15.3)(13)	2.3 (7.7)	1.9,2.0 (6.3)(6.7)	17.9	N−26°−E	
建物03	南北棟	2×2	4.3×3.9 (14.3)(13)	2.0,2.3 (6.7)(7.7)	1.9,2.0 (6.3)(6.7)	16.8	N−26°−E	
建物04	東西棟	2×1	3.8×2.5 (12.7)(8.3)	1.9 (6.3)	2.5 (8.3)	9.5	N−26°−E (南北柱列)	
建物05	南北棟?	2以上×2以上	6.2~×4.4~ (20.7)(14.7)	3.1 (10.3)	2.2 (7.3)	27.3 以上	N−37°−E	
建物06	南北棟	3以上×2以上	7.8~×6.6~ (26)(22)	3.1 (10.3)	2.2 (7.3)	51.5 以上	N−1°−E	
建物07	東西棟	2以上×2	3.6~×4.0 (12)(13.3)	1.8 (6)	2.6,1.4 (8.7)(4.7)	14.4 以上	N−10°−E (南北柱列)	南廂付
建物08	東西棟?	2以上×2以上	3.6~×4.2~ (12)(14)	1.8 (6)	2.1 (7)	15.1 以上	N−43°−E (南北柱列)	南廂付
建物09	東西棟	1×1	2.2×2.0 (7.3)×(6.7)	2.2 (7.3)	2.0 (6.7)	4.4	N−12°−W (南北柱列)	
建物10	南北棟	4?×1	6.9×2.3 (23)(7.7)	1.6~1.8,1.6 (5.3~6)(5.3)	2.3 (7.7)	15.9	N−3°−E	
建物11		1以上×1以上	2.2~×1.7~ (7.3)(5.7)	2.2 (7.3)	1.7 (5.7)	3.7 以上	N−39°−E (南北柱列)	
建物12		1以上×1以上	2.1~×1.8~ (7)(6)	2.1 (7)	1.8 (6)	3.8 以上	N−33°−E (南北柱列)	

第1表　浦田遺跡昭和62年度検出掘立柱建物

V　考察

浦田遺跡から２次にわたる調査によって出土した遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代及び中・近世のものである。このうち、縄文時代、古墳時代、中・近世のものは少量で、弥生時代、平安時代のものが大半を占める。遺構は、弥生時代中期の穴、溝、同後期の穴、溝、平安時代の掘立柱建物が検出されている。

以上の中で、本章では今年度の調査に関連した、弥生時代後期と平安時代の遺構について考察を行う。

なお、昭和61年度調査区の遺構全体図、遺物実測図及び弥生土器観察表を参考のため載せておく。

1　弥生時代後期の遺構について（第３・12・13図）

第１次・２次調査を通して検出された遺構は、穴２、溝５条である。これらは、出土遺物より時期の判明したものであり、他に第２次調査区で多数検出された平行な小溝がある。

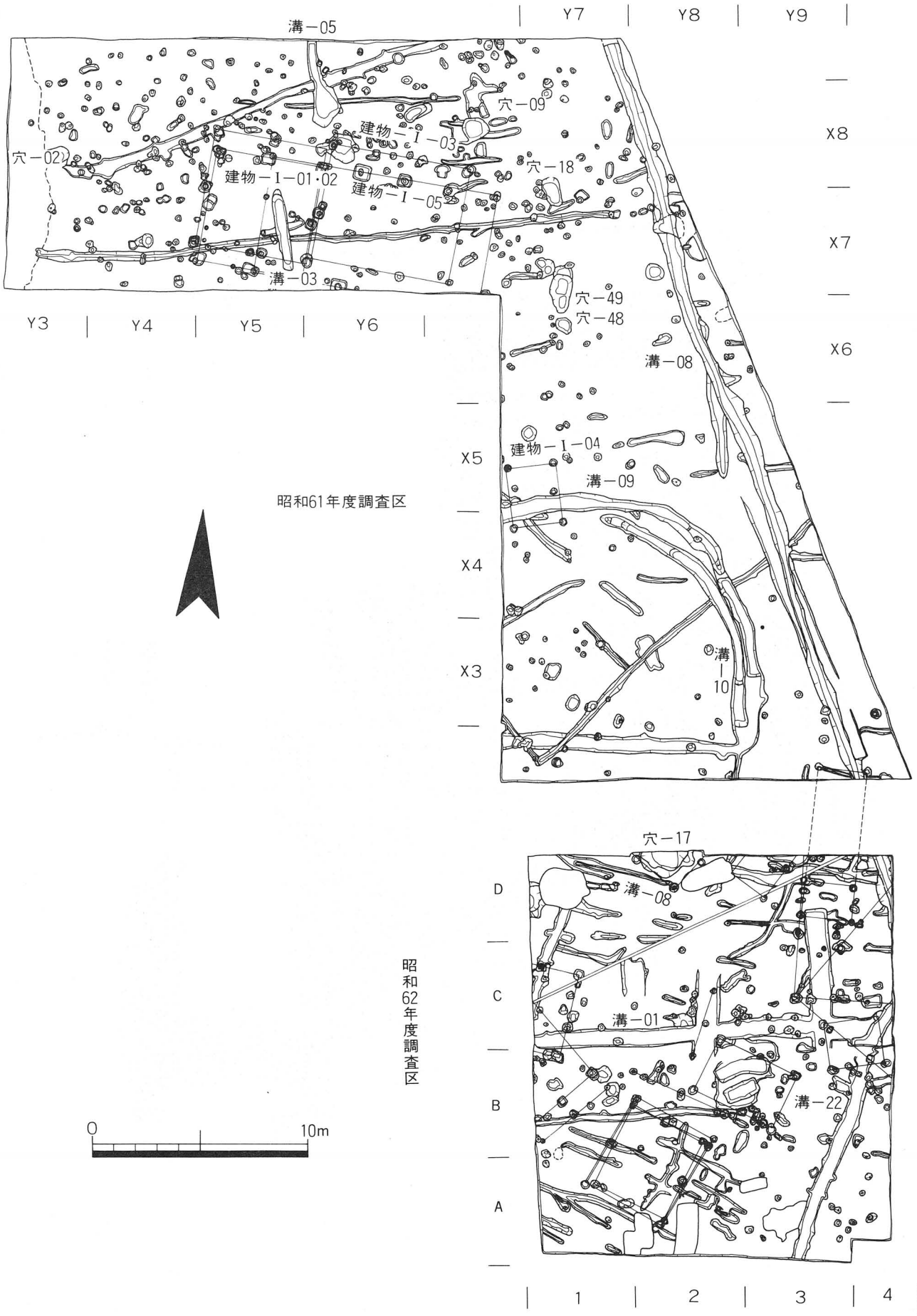
このうち、第１次調査区の溝―08（以下、溝－Ⅰ―08と記述する。）と第２次調査区の溝―22（以下、溝－Ⅱ―22と記述する。）については、排水用の溝と考えられる。そもそも、当遺跡は水位がかなり高く、15cmも掘ると水が湧いてくる状態である。このため、居住地として利用するなら、まず第一に水はけを良くすることが必要になる。同様な理由から、溝－Ⅰ―09・10についても、居住域の区切りの意味を含めた排水溝と考えられる。

ここで問題になるのが、平行な小溝である。これらはいずれも、幅20～30cm、深さ10cmを測り、溝－Ⅱ―22に対して直交する形態をとって掘られている。これは、溝－Ⅱ―22と小溝群が何らかの意図をもって規画的に掘られたと考える根拠となろう。また、これら平行する小溝群北端近くに位置する溝－Ⅱ―08からは、ハケメ調整を施した弥生土器片が出土しており、このことも小溝群の時期を知る手がかりとなろう。

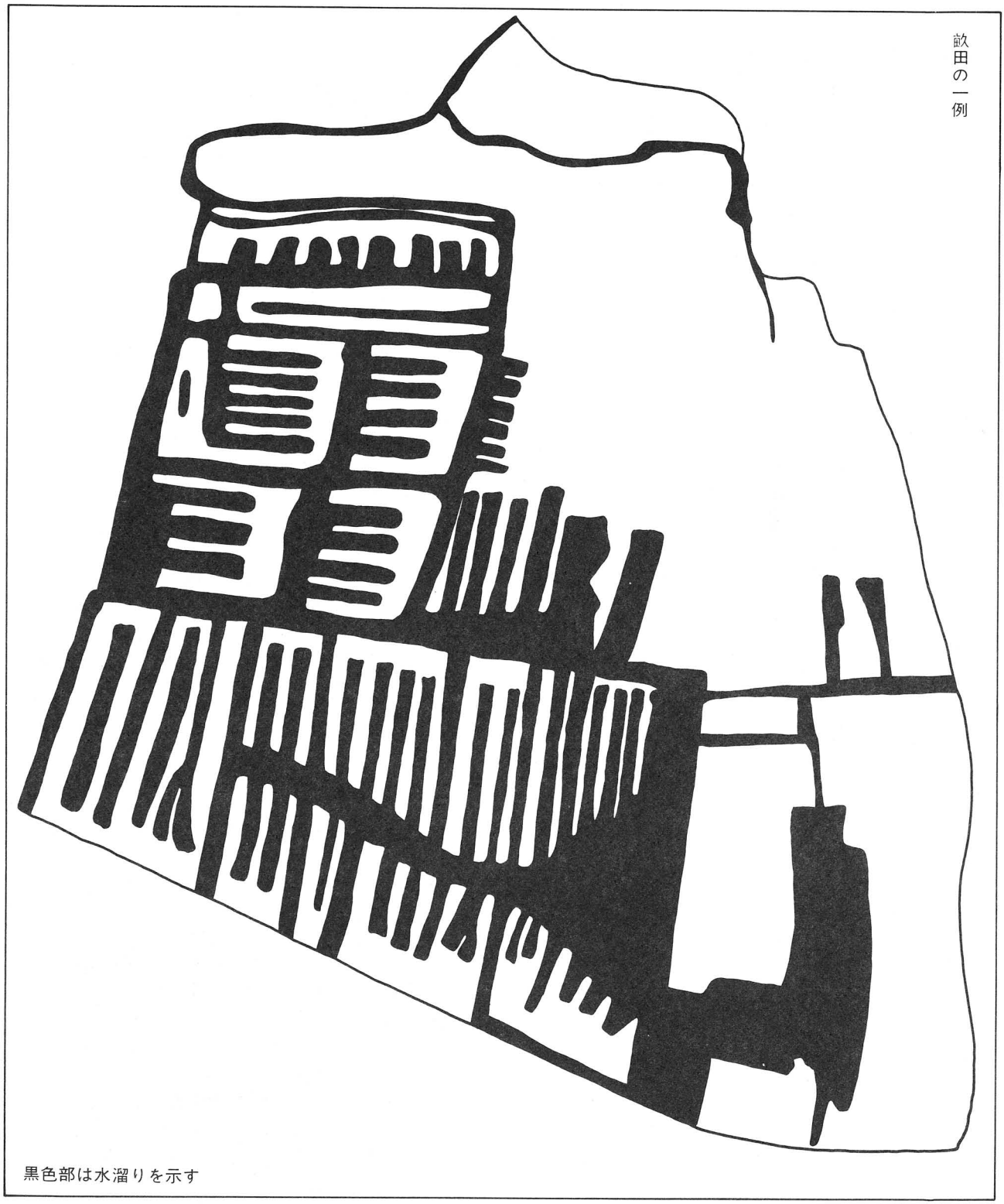
次に、この小溝群の性格であるが、石川県鹿島町徳前Ｃ遺跡[10]において同様な小溝群が検出されており、湯尻修平氏によって興味ある考察が行われている。この中で氏は、これらの小溝群を水田排水用の溝としており、その根拠として『石川県羽咋郡旧福野潟周辺総合調査報告書』「旧福野潟及びその周辺の地形[11]」の畝田の記述を引用している。少々長くなるが引用すると「現在、福野潟地は甚しく低湿であるが、殆んど水田に開拓せられている。しかしこの沼田の底を浅くするため周囲の土を掘り上げたのでその跡は殆んど水田面積に等しい水溜りができた。これは…（中略）…一般に畝田と称せられる。…（中略）…櫛の歯形に竝んだ水溜りが光ってみえる…。」とあり、第13図が載せてある。湯尻氏は、徳前Ｃ遺跡が地下水位の高い地形に立地している点から、湿田の一形態である畝田の例を出されているが、当浦田遺跡も地下水位がかなり高く（15cm程度掘ると湧水し、雨が１日降ると調査区は池になった。）、畝田の例があてはまるであろう。

県内においては、この様な小溝群の例を寡聞にして知らないが、石川県において溝の幅・間隔ともに浦田遺跡に近い例を求めると、金沢市千木ヤシキダ遺跡[12]があげられる。この遺跡は沖積平野の低湿地帯に立地し、浦田遺跡が扇状地扇端部に立地しているのとは、立地に若干の違いがあるが、ともに排水不良地にある点では一致している。小溝群の性格について報告書には「形状は最近、群馬県で検出された畠跡と類似していることから、遺構も畠の痕跡かと思われる。」と記されている。群馬県の遺跡というのは熊野堂遺跡[13]のことと思われるが、同報告書には「花粉分析からは、イネ科植物が検出され、同様のプラント・オパール分析からはイネが検出されている。」とあり、陸稲の畠であった事をうかがわせている。

以上の事例から考えるに、当遺跡で検出された平行する小溝群は、農耕おそらくは稲作（水稲耕作であったか陸稲耕作であったかは別にして）のための排水溝であろうと推定されるのである。



第12図　第１次・２次発掘調査区遺構全体図



第13図　畝田の一例　（「石川県羽咋郡旧福野潟周辺総合調査報告」1955より転載）

2　古代の掘立柱建物について

浦田遺跡の調査面積は合計約850m²にすぎない。この狭い地区において、平安時代の掘立柱建物が17棟検出されており、その密度はかなり高いといえる。また建物の内容も、25m²を超える大型の２間×２間建物、身舎梁行１間の廂付建物、５間×３間の大型建物（後述）と問題点を含んだものが多い。

掘立柱建物及び集落構造に関する論文・考察は近年多数出されており、建物個々の構造（平面プラン等）から、また集落全体の構成から、古代集落の性格・内容にせまっている。

当遺跡では調査面積が小さいため、集落の全体構造を把握するには至っておらず、ここでは建物個々の構造・規格について、富山・石川両県の掘立柱建物との比較を通して、当遺跡の性格を考えてみたい。

また、筆者の手落ちにより、昭和61年度調査区検出の建物１棟を報告できなかった。まずこの建物について報告し、その後に考察を行う。

なお、第１・２次の調査で番号の重複する建物があるので、以後は建物番号の前にローマ数字で調査年次を入れた記述（例：建物―Ⅰ―01）を使う。

建物―Ⅰ―05（第12・14図）

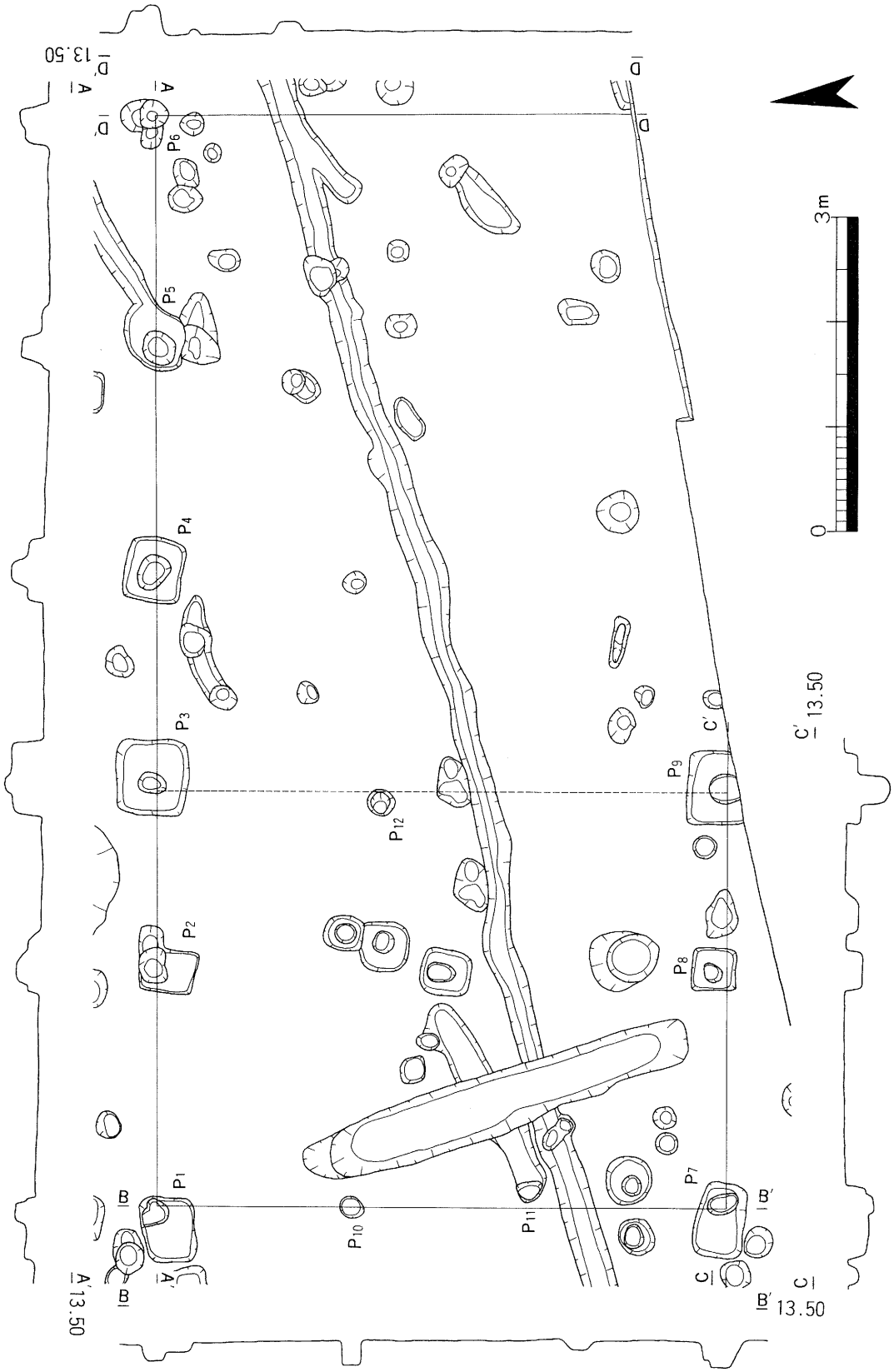
昭和61年度調査区北半で検出された、５間（10.65m）×３間（5.4m）の東西棟大型掘立柱建物である。建物―Ⅰ―01～03と重複しており、P_1・P_2・P_7・P_8を建物―Ⅰ―01と共用している。建物方位は、南北柱列でとるとN―11°―Eをさす。柱間寸法は、桁行が東から2.2m・2.2m・2.0m・1.8m・2.4m、梁行は1.8mの等間である。柱穴掘方は、P_6が径30cmの円形、P_{10}・P_{11}が径20cmの円形、P_2・P_8が一辺40cm前後の隅円方形、他は一辺60～70cmの隅丸方形である。深さは18～41cmと、掘方に関係なく不揃いである。また、P_6の掘方は他の桁行列の柱掘方と著しく異なっており、この建物は東妻廂をもつと考えられる。

なお、P_2・P_8の柱穴掘方が他の柱穴に比して若干小さく、P_1・P_2間とP_2・P_3間の柱間寸法が不揃いであることから桁行３間の可能性も考えられ、この場合は身舎の桁行柱間寸法は4.2mの等間となる。しかしそうなると、この建物は桁行３間（5.4m）×梁行３間（10.65m）の廂付ということになり、構造的にかなり特異なものとなってしまう。ここはやはり、５間×３間の建物とみたほうがよいであろう。

なお、参考までに、第１次調査で検出した建物の一覧を載せておく。

遺構名	棟方向	柱間数	規模	柱間寸法 m(尺)		平面積 (m²)	方位	備考
			桁×梁（尺）	桁	梁			
建物０１	?	２×２	5.4×5.4 (18)(18)	２.７ (９)	２.７ (９)	２９.２	N－11°－E (南北柱列)	
建物０２	南北棟	２×２	5.4×4.8 (18)(16)	２.３，２.５ (7.7)(8.3)	２.７ (９)	２５.９	N－11°－E	
建物０３	東西棟	３×２	6.6×5.4 (22)(18)	2.3,2.3,2.0 (7.7)(7.7)(6.7) 2.3,2.0,2,3 (7.7)(6.7)(7.7)	２.７ (９)	３５.６	N－11°－E (南北柱列)	
建物０４	南北棟	１×１	2.8×2.2 (9.3)(7.3)	２.８ (9.3)	２.２ (7.3)	６.２	N－11°－W	
建物０５	東西棟	５×３	10.65×5.4 (35.5)(18)	2.4,1.8,2.0,2.2,2.2 (8)(6)(6.7)(7.3)(7.3) 2.2,1.8 (7.3)(6)	１.８ (6)	５７.５	N－11°－E (南北柱列)	東妻廂付

第２表　浦田遺跡昭和61年度検出掘立柱建物



第14図　遺構実測図　建物－Ⅰ－05

（1）掘立柱建物の種類と集落の類別（第３表）

富山・石川両県の古代掘立柱建物（ここでは概略７～11世紀のものを対象とする。）は、筆者の知る限りでは、43遺跡から443棟が検出されている。これは平面プランが明確なものだけの数であり、部分的に検出された建物は含んでいない。第３表は、それらを平面プラン別に集成したものである。

掘立柱建物の類別には、平面プラン（柱間数）によるもの、構造（総柱か否か、有廂か無廂か）によるもの、平面積によるもの等多種あるが、ここではまず平面プランによって類別し、他の方法は随時必要に応じて用いてゆく。

掘立柱建物の平面プランは、１間×１間から10間×３間まで21種類あり、多種多様である。しかし、種類別に検出数をみると、３間×２間が134棟（検出総数の30.2%）、２間×２間が82棟（同18.5%）と格段に多く、この２種で216棟と検出総数の実に半数を占めている。また、ほとんどの遺跡からこの２種のいずれかが検出されており、半数近い遺跡からは２種共に検出されている。このことから、現在通念となっていることではあるが、３間×２間と２間×２間の建物が古代における一般的な掘立柱建物であったと知られる。ここで注目したいのが４間×３間と４間×２間の建物で、合計83棟（同18.7%）検出されており、前述の２種同様に、古代における一般的な建物と考えられる。

一方、特殊な建物としては、まず桁行５間以上の大型建物があげられる。検出数は48棟（同10.7%）である。大型建物に関する考察は、最近では新町II遺跡[14]、千木ヤシキダ遺跡[15]で行われており、集落の性格にまで言及したものには、横江庄遺跡の考察[16]がある。いずれにおいても、大型建物の特殊性・類別・性格等について考察がなされているが、詳細は別項で述べることとする。

いま一つ特殊な建物として、３間×３間の建物があげられる。検出数も17棟（同3.8%）と少ないが、むしろ特定の遺跡から集中的に検出されている点が注目される。この建物の上屋構造を想定した場合、いかに考えても棟持柱が必要となり、他の建物に比してより高度な技術が必要とされる。これは遺跡の性格とも関連してくると考えられ、今後着目していくべき建物と言えよう。

集落の性格に関しては、構成する建物から検討したもの[17]と、建物グループから検討したもの[18]とがある。この考察においては、両者の方法を必要に応じて使い分ける。なお、湯尻氏は石川県内に限定して古代集落を分類しているが、これは富山県にも適応しうるものと考える。参考までに、氏の分類の自分なりの解釈を記しておく。

Ⅰ類　桁行５間以上で、平面積100m²を超え、一辺１ｍ以上の方形掘方をもつ大型建物を主屋とする集落。（官衙ないし官衙的性格を有する集落。）

Ⅱ類　桁行５間以上で、平面積100m²前後の建物を主屋とする集落。（庄家等の荘園集落、寺院に関係する集落。）

Ⅲ類　廂をもつ建物はなく、平面積50～30m²の建物群のみで構成され、建物の配置に規則性の見られる集落。（中核集落＝公的性格はさほど強くない、地域の中心となる集落。）

Ⅳ類　平面積30m²前後の建物で構成され、建物の配置に明らかな規則性の見られない集落。（一般集落。）

Ⅴ類　竪穴住居で構成される集落（一般集落。）

また、田嶋氏の建物グループによる検討は、構造の特質、階層性の現われ方、変遷の基本的な方向にまで論の及ぶ総合的なものであるが、ここでは建物小群の構造に限定して引用・参考とした。

さて、以後建物の種類別検討を行うのだが、その前に明確にしておきたい問題がある。それは、建物を建てるに際して、桁行及び梁行総長と柱間寸法の何れを主にして規格が為されたか、という問題である。これについては、『延喜式』に「建物を建てる際には、四隅の柱穴を決定し、その穴から掘り始めるのが通有である」旨の記載があることなどから、前者が主であったと考えられる。よって以後、前者を主、後者を従とする観点で考察を進める。

	柱間数 / 遺跡名	1×1	2×1	2×2	3×1	3×2	3×3	4×1	4×2	4×3	4×4	5×2	5×3	5×4	6×2	6×3	6×4	7×1	7×2	7×3	8×4	9×2	10×3
富山県	じょうべのま遺跡(A・B地区)	2	1	2	1	5			1	1		2	3										1
	高瀬遺跡(石仏地区)													2					?				
	高瀬遺跡(穴田地区)					2			2														
	佐伯遺跡	2		4		14			1														
	桜町遺跡(産田地区)		2	5		13			2	8			1										
	東江上遺跡			2		3			2														
	新町II遺跡	1						1	1			1											
	浦田遺跡	2	1	5		1		1					1										
	長岡杉林遺跡			3		3																	
	安田・寺町遺跡					1																	
	黒川尺目遺跡			2																			
	小杉流通業務団地内No.7遺跡	1	1	2					1	1			1										
	小杉流通業務団地内No.16遺跡			1	1																		
	小杉流通業務団地内No.18遺跡		1	1																			
	計 (117棟)	8	6	27	1	42		1	10	10		3	6	2									1
石川県	柳田シャコデ遺跡	1				1				3			1				1						
	美麻那比古神社前遺跡			2																			
	宮地廃寺													1									
	北川尻ホシバ山遺跡			1		1																	
	徳前C遺跡	1	2						1	2													
	八幡昔谷遺跡	1		1		9			1	1													
	横江庄庄家跡		1			1			3				1										
	藤江A遺跡			1												1							
	御経塚B遺跡			2		2			2	1													
	西島遺跡								4														
	寺家遺跡 (砂田地区2下層)					3					1	1											
	寺家遺跡 (砂田地区4層)	4	3	10		19	5		2	2												2	
	津波倉遺跡		1			2			1														
	大野木タキシロ遺跡			1																			
	法仏遺跡B地区		2	1		3	1		1	2													
	〃 B′地区				1	1	2		2	1													
	〃 C・D地区		4	2		2	2		4			1			1	1							
	〃 I地区		3			1	1																
	〃 O地区		2		1		1		1	1													
	〃 L地区			1					2	1													
	安原工業団地遺跡														1								
	安養寺遺跡		1	1		1													1				
	末松廃寺									1							1						
	戸水C遺跡		2	2		6		1	2			1				1			2				
	佐々木ノテウラ遺跡			3		2				1													
	中村畑遺跡		2	1		4																	
	古府タブノキダ遺跡			1		3				4			1			1							
	三井小泉遺跡			3		3	1			1			1										
	近岡ナカシマ遺跡																		1				
	千木ヤシキダ遺跡			4		2				2		1	1		1						1		
	畝田・無量寺遺跡			2								1								1			
	篠原シンゴウ遺跡			1	1				1														
	永町ガマノマガリ遺跡(C・D群)		1	8	1	4			1	6			3			1							
	上二口					1													1				
	漆町チュウデン地区		5	2	3	4	1	2															
	〃 フルミヤ地区		6	3	6	13	3	1	1	2								1					
	〃 ヘゴジマ地区		1	1	1			1															
	篠原遺跡			1		3			1	2													
	計 (326棟)	7	36	55	14	92	17	5	31	32	1	6	8	1	3	6	2	1	5	1	1	2	
	総計 (総計443棟)	15	42	82	15	134	17	6	41	42	1	9	14	3	3	6	2	1	5	1	1	2	1

第 3 表　富山・石川両県の古代掘立柱建物の平面プラン

(横江庄遺跡[16]，「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡」[18]，新町II遺跡[14]に加筆)

（2）梁行１間の建物について（第15図）

梁行１間の建物には、桁行１間・２間・３間・４間・７間の５種がある。この中で、７間×１間のものは漆町遺跡[19]フルミヤ地区の１例のみで、報告書にも「柱間寸法が不揃いであることから、東より２～３間、２間、１間の建物に分割して理解した方が良いかもしれない。」とあり、かなり特殊なものである。４間×１間と３間×１間の建物は検出遺跡が限られており（第３表）特異性が感じられるが、規格・配置についての規則性は見い出せなかった。よって、ここでは配置に規則性のみられる２間×１間建物について述べる。

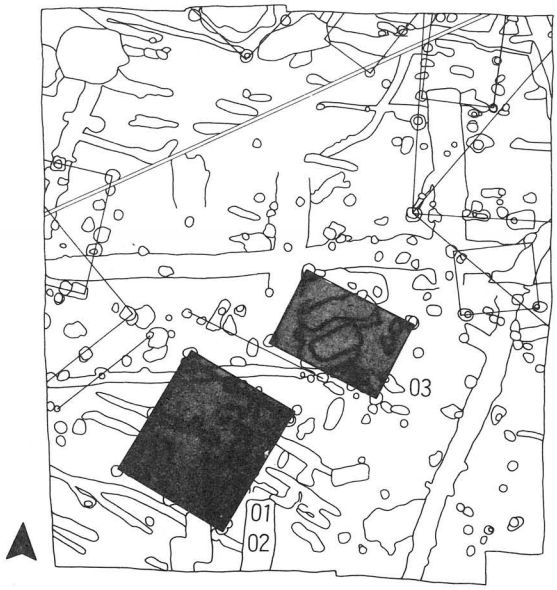
２間×１間建物

２間×１間建物は納屋及び類以施設と考えられており、検出数42棟とごく一般的な建物である。

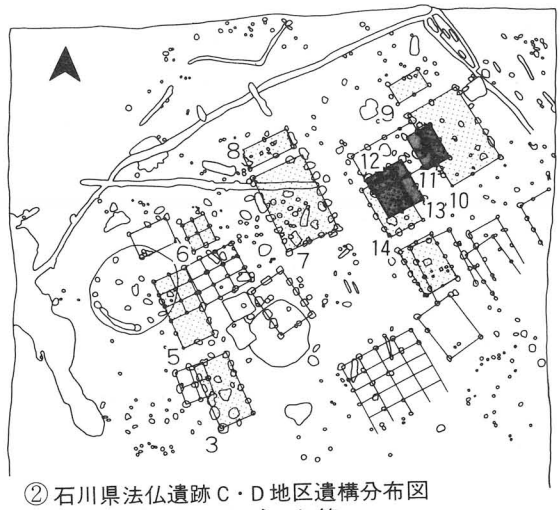
この中で注目されているのは、法仏遺跡Ｃ・Ｄ地区[20]の８・９号建物で、建物小群の中心となる大型建物桁行柱筋に揃えて付設されている。同様な例は新町Ⅱ遺跡[21]においてもみられ、報告書には「…大型の建物が構築された遺跡では、それに接して小型の建物が付属することを示すものであろう。」とある。今、仮にこれをａ類とする（第15図②）。

これに対して、当遺跡で検出した例は、２間×２間建物（建物―Ⅱ―02・17.9㎡、Ⅱ―03・16.8㎡）に２間×１間建物（建物―Ⅱ―04）が付設しており、前記のものとは若干内容が異なる。同様な例としては、法仏遺跡Ｃ・Ｄ地区13号建物（３間×３間、27.9㎡）と11号建物（２間×１間、15.4㎡）、寺家遺跡[22]砂田地区ＳＢ38（３間×２間、34.0㎡）とＳＢ39（２間×１間、12.6㎡）等がある。ただ、法仏・寺家両遺跡の建物（13号建物・ＳＢ38）が平面積30㎡前後の平均的住居であるのに対して、浦田遺跡のそれは倉庫に多い平面積20㎡以下の２間×２間建物である点が特殊である。しかし、倉庫に納屋が付設していると考えるより、住居に納屋が付設していると考える方がやはり自然であろう。これをｂ類とする（第15図①）。

では、ａ類とｂ類の相違は何に由来するのであろうか。これを考える鍵となるのは法仏遺跡Ｃ・Ｄ地区の例で、９・10号建物を含む建物小群と11・13号建物とが重複しており、両者はさらに12号建物と重複している。これは３者の構築時期に差があることを示しており、ａ類とｂ類の相違は時期差によるものと考えられる。なお、法仏遺跡は報告書が未刊行であるため、両者（及び３者）の構築順序は不明である。ただし、９～13号建物の柱穴掘方は全て円形と同一であり、方位も似通っていることから、大きな時期差はないと考えられる。



① 富山県浦田遺跡遺構分布図



② 石川県法仏遺跡Ｃ・Ｄ地区遺構分布図
〔田嶋　1983〕に加筆

0　5m

a類
b類

0　20m

第15図　a・b類建物小群配置図

（3）2間×2間建物について（第16図、第4表）

2間×2間建物は、3間×2間建物に次いで普遍的に見出される建物である。構造面から、束柱を持つ総柱のものと普通構造のものに分けられる。これを面積・構造別に分けて傾向をみたのが**第4表である**。なお傾向をみるに際しては、地域のまとまりを考慮して、富山県を呉東、呉西に、石川県を中・奥能登、口能登、加賀に小区分して行った。

総柱構造の建物

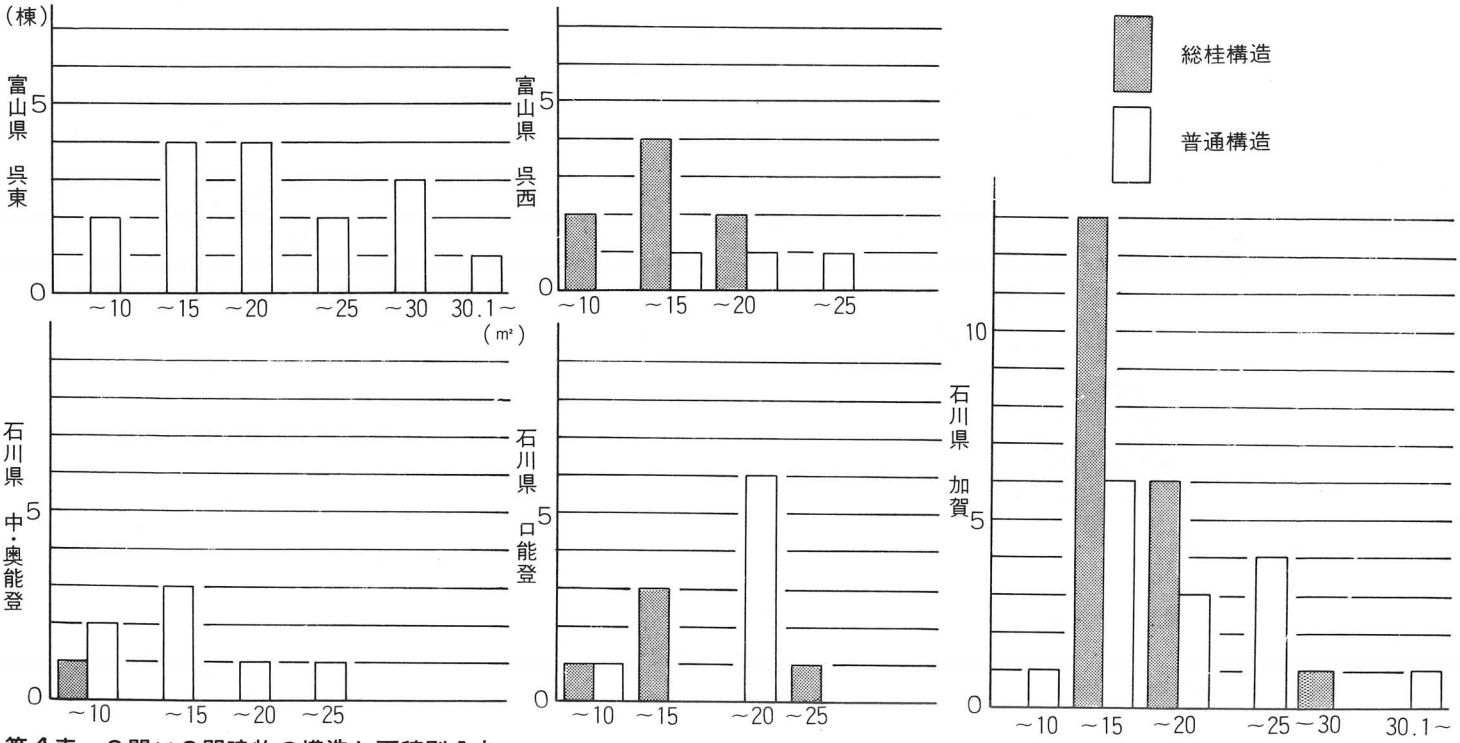
総柱建物は34棟が検出されており、平面積20㎡以下のものが32棟と大部分を占める。束柱の存在は荷重対策とされ、一般に倉庫と考えられている。加賀においては、①29棟（82.9%）が面積20㎡以下、②20棟（57.1%）が総柱建物と、この見解を裏付ける傾向がみられる。また、呉西では①・②両傾向が、能登では①の傾向がみられ、加賀と同様のことが言えよう。ここで問題になるのが呉東で、総柱建物は1棟もみられない。しかし、呉東に2間×2間建物の倉庫が全く存在しなかったとは考えられず、総柱以外の方法で荷重対策を行っていたと考えられる。

普通（無束柱）構造の建物

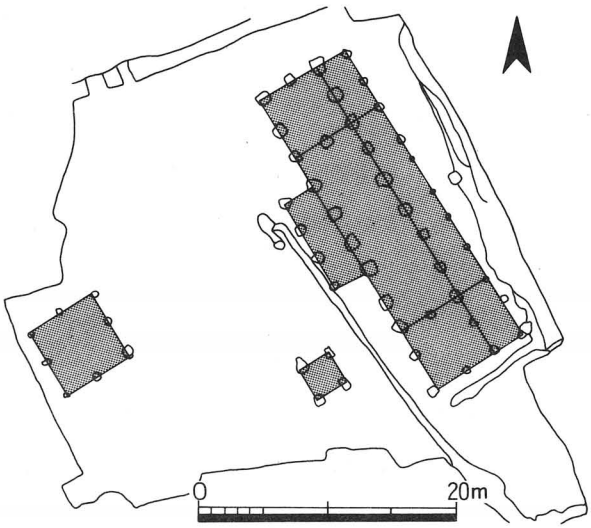
現在48棟が検出されており、以下の理由から、平面積20㎡を境に性格が変化すると考えられる。第一は、20㎡を境に2間×2間建物全体の中での構造別比率が大きく変わることである。すなわち、平面積20㎡以下では総柱建物が32棟（47.8%）と約半数であるのに対して、20㎡超では2棟（14.3%）と激減するのである。これは、20㎡超のものが倉庫以外の住居などであったか、特殊な役割の倉庫であったかのいずれかを意味しているといえよう。第二は、20㎡超の建物を検出した9遺跡の内、6遺跡から大型建物が検出されていることである。そして、全14棟中の7棟が、大型建物に伴って建物小群を構成しており、一層の特殊性を感じさせる。よって以後、個々の例についてみていくこととする。

大型建物に伴って建物小群を構成するものは、前記のとおり7棟あるが、これらは伴う大型建物の種類と建物の配置から1～4類に分類される。

1類は、じょうべのま遺跡[23]B期の建物小群を標式とする（第16図①）。平面積100㎡以上の廂付建物を主屋とし、主屋後方の広場を囲む形で、2間×2間をはじめとした建物を配置する。なお、当類に属するものとして戸水C遺跡[24]F区があげられる（第16図②）。この遺跡の2間×2間建物は総柱構造であるが、面積は25.8㎡と例外的に大きく、やはり大型建物を主屋として、主屋後方の広場を囲む形で、2間×2間以下の建物を配置している。

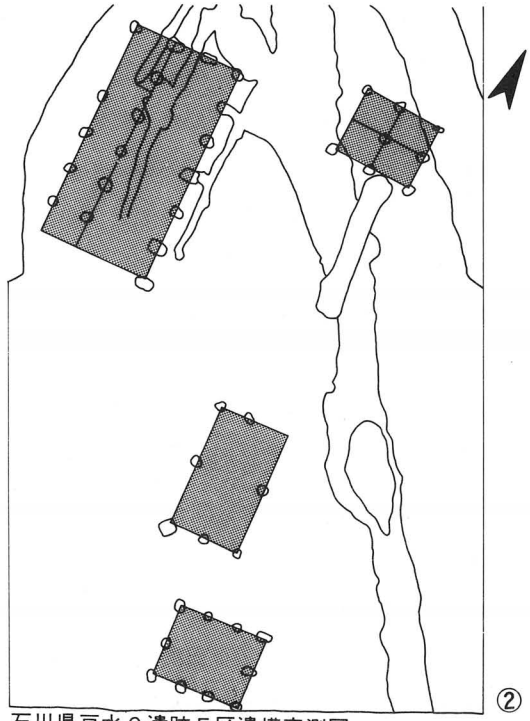


第4表　2間×2間建物の構造と面積別分布



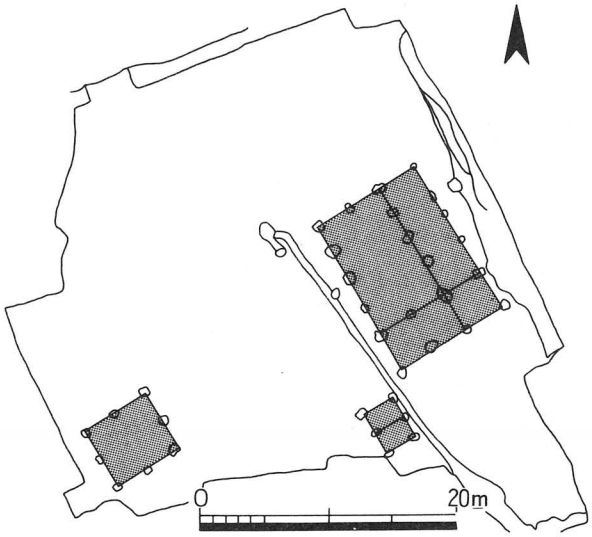
①

富山県じょうべのま遺跡A地区遺構実測図
〔高島他　1974〕より作成



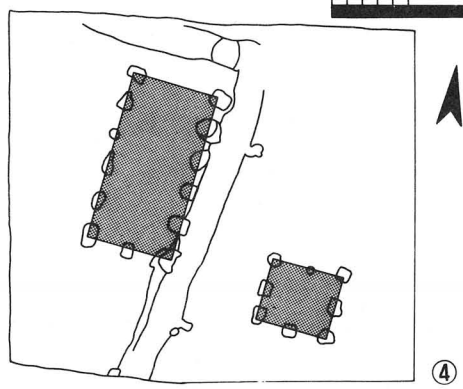
②

石川県戸水C遺跡F区遺構実測図
〔戸潤　1986〕より作成



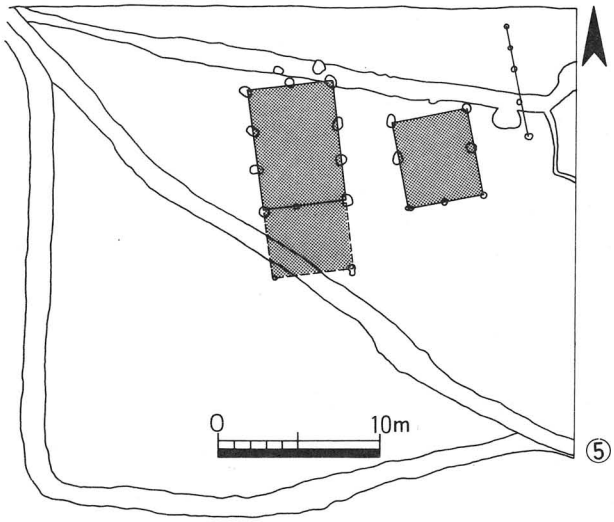
③

富山県じょうべのま遺跡A・U地区遺構実測図
〔高島他　1974〕より作成



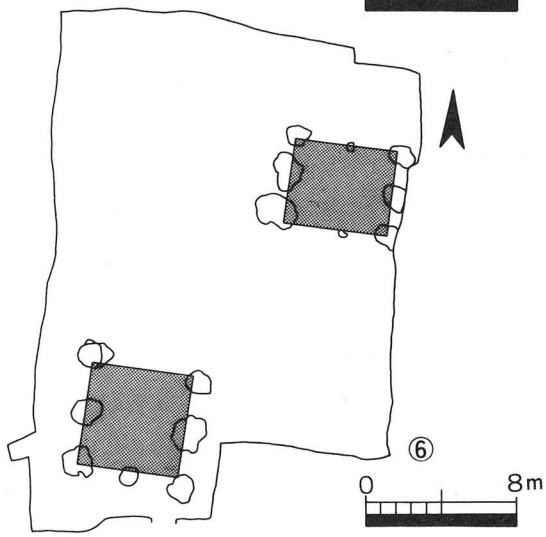
④

石川県干木ヤシキダ遺跡A区全体図
〔楠　1987〕より作成



⑤

石川県佐々木ノテウラ遺跡遺構全体図
〔北野　1986〕より作成



⑥

石川県干木ヤシキダ遺跡F区全体図
〔楠　1987〕より作成

第16図　1～4類建物小群配置図

２類は、じょうべのま遺跡Ｃ期の建物小群を標式とする（第16図③）。建物の配置は１類と同じであるが、主屋の平面プランはむしろ３類に近いため、別類とした。現在、類例は見出せない。

３類は、千木ヤシキダ遺跡[25]Ａ区の建物小群を標式とする（第16図④）。平面積50m²以上の建物を主屋として、後方（前方か？）の広場を囲む形で、２間×２間以下の建物を配置している。なお、同遺跡Ｆ区では２間×２間建物が２棟しか検出されていないが（第16図⑥）、矩形の配置から広場を想定してここに加えた。

４類は、佐々木ノテウラ遺跡[26]Ⅲ期の建物小群を標式とする（第16図⑤）。主屋は平面積39.0m²とやや小さく、２間×２間建物が隣接していて広場は無い。主屋が大型建物ではないが、比較のため設定した。

以上の分類を湯尻氏の集落類型にあてはめると、１～４類は各々Ⅰ～Ⅳ類集落に対応するであろう。Ⅰ～Ⅲ類集落は、程度の差はあれいずれも公的性格を帯びた集落であり、そのような集落の主屋を中心とした建物小群に属するということは、この種の２間×２間建物も、公的性格の一端を担っていたと考えられる。

次に面積20m²以下のものについてみると、配置の面からは、２間×１間建物の項で述べた住居と考えられるもの、東江上遺跡[27]の２棟併設した倉庫と考えられるものなどさまざまであり、建物自体からも規格や規則性は見出せなかった。現時点では、集落内での位置関係から性格を推測すべきであろう。

（４）梁行２間以上建物の寸法規格について（第５表）

梁行２間以上の建物には２間×２間から10間×３間まで16種あるが、ここでは居住の用に供したと考えられる３間×２間から10間×３間までの建物を対象とし、用途の異なる２間×２間建物は除外する。ところで、対象となる建物を平面プランからみると、長方形プラン（梁行と桁行の柱間数が異なるもの）と正方形プラン（梁行と桁行の柱間数が同じもの）に２分類され、別の規格が存在したかとも受け取れる。しかし、正方形プラン建物（３間×３間と４間×４間がある）の平面形態をみると、正方形に類するものは18棟中３棟にすぎず、長方形プランに準じていると考えて一括して扱った。

さて、最初に述べたように、寸法規格は梁行及び桁行の総長を主として為されていたと推定される。また、建物の平面積の増減は桁行柱間数・総長を変えて行われており、梁行は必要最小限の変化に止めている傾向がある。すなわち梁行総長には、少しの面積変化には左右されない規格の存在が想定されるのである。よってここでは、建物の梁行総長について、建物の性格が変わると考えられる平面積25m²未満、25m²以上50m²未満、50m²以上100m²未満、100m²以上の４種に分けてみていくこととする。なお、記述の煩雑さを避けるため、ここでは平面積25m²未満のものを小型建物、25m²以上50m²未満のものを一般建物、50m²以上100m²未満のものを大型建物、100m²以上のものを超大型建物と呼称する。

平面積別と地域別の傾向（第５表）

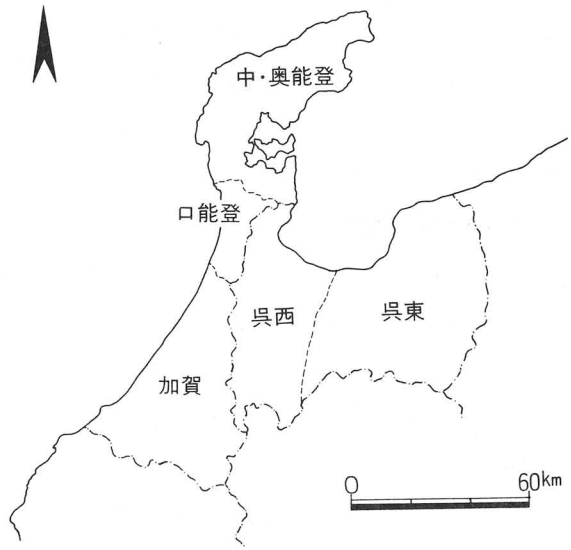
寸法規格の傾向をみるに際しては、地域のまとまりを考慮して、富山県を呉東、呉西に、石川県を中・奥能登、口能登、加賀に小区分して行った。また、梁行柱間数の異なるものについては、検討は別個に行ったが、煩雑となるため表には表わさず、必要な場合は随時記述する。

小型建物においては、呉東と呉西では13尺、中・奥能登では12尺という最高頻度を示す寸法が存在し、これが各地域の基準となる寸法（以下、基準寸法と記す）であったと考えられる。加賀では11尺～14尺まで一様に高い頻度を示しているが、隣接する口能登の傾向から、14尺が基準寸法であったと推測される。その口能登では最高頻度を示す寸法が２種あるが、隣接地域との比較により、13尺は呉西の、14尺は加賀の影響を受けたものと考えられる。

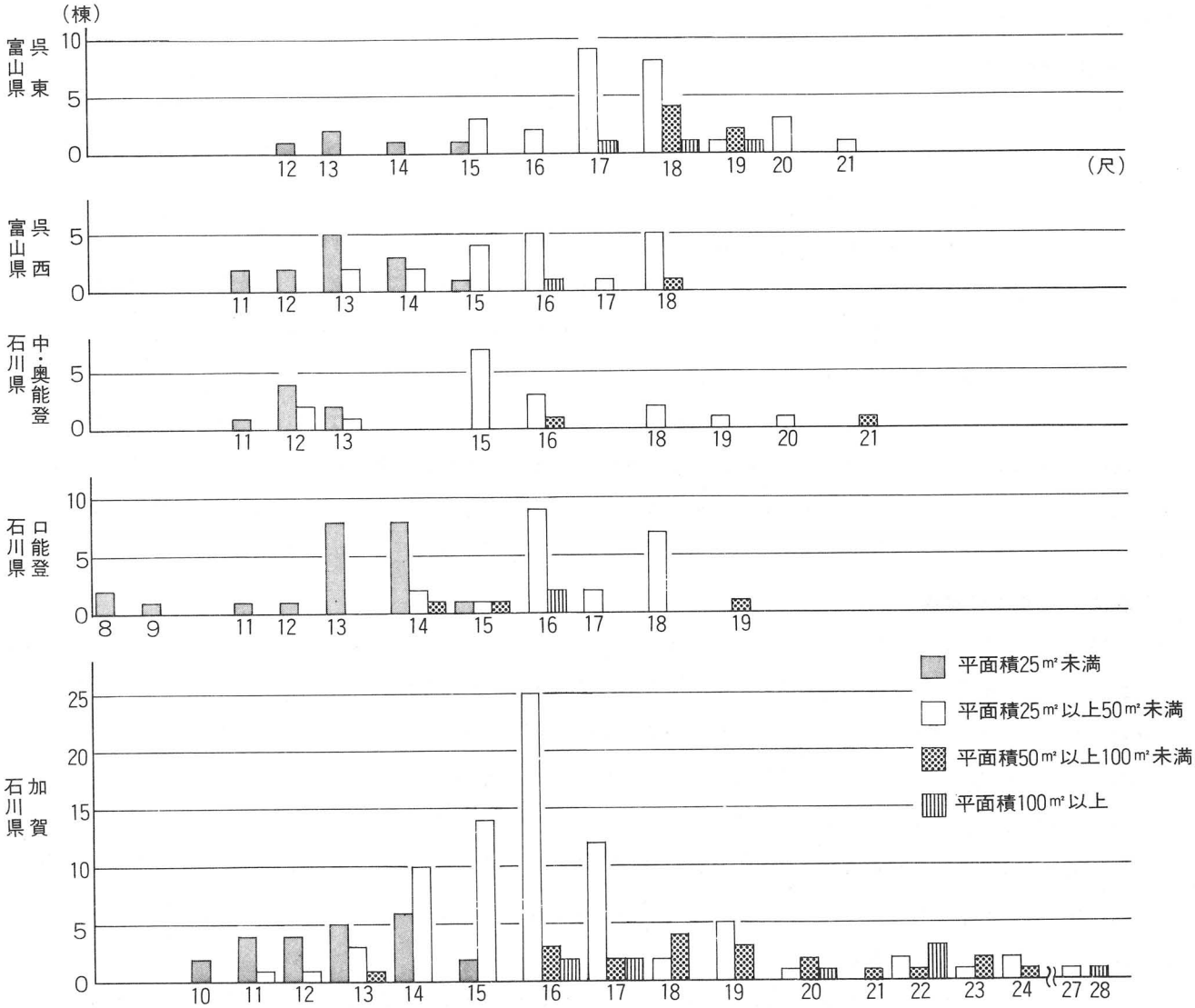
一般建物においては、最も特徴的かつ興味深い傾向が出ている。加賀では16尺、中・奥能登では15尺という図抜けた頻度を示す寸法が存在し、基準寸法の存在を示している。呉東においては、17尺と18尺の２種が図抜けているが、隣接する呉西の傾向から18尺が基準寸法であろうと推察される。なお、口能登と呉西は、その地理的要因（第17図）

からか、隣接地域の影響が濃い。すなわち、口能登では16尺と18尺の頻度が高いが、16尺は加賀の、18尺は呉東の影響とみることができる。また、呉西では16尺と18尺に加えて15尺も頻度が高く、中・奥能登の影響とみられる。ここ呉西ではさらに、梁行３間のものは18尺、２間のものは16尺という、寸法の使い分けを行っている点も注目される。これは、同様に２種の基準寸法と柱間数を用いている口能登ではみられない傾向であり、たいへん興味深い。

大型建物においては、他地区では検出数の少ないこともあってか、呉東と加賀にしか傾向を見出せなかった。呉東では規格が18尺と19尺に限られており、中でも一般建物と同じ18尺の頻度が高く、同一基準寸法の使用を窺わせている。加賀では13尺から24尺まで多種の規格が存在するが、中でも16尺・18尺・19尺の頻度が高い。なお16尺は一般建物では主流を占めていたが、大型建物に



第17図　地域区分図



第５表　梁行２間以上建物の面積別梁行総長の傾向

おいては主流はむしろ18尺と19尺にあるとみられる。

超大型建物においては、規格は16尺から28尺まで多岐にわたり、加賀で22尺が頻度の高いこと以外は傾向を見出せなかった。これは絶対数がないことも理由の一つであり、以下は推測になるが、地域的な規格よりむしろ集落の性格による規格の存在した可能性が強い。

寸法規格と地域性

以上の検討からまず気付くことは、地域別に寸法規格が存在し、それが他地域へも影響を及ぼしている点である。独自の規格を持っているのは、呉東、中・奥能登、加賀の３地域であり、呉西と口能登は前記３地域からの影響を強く受けている。これは単に建物の規格についてだけとは考えられず、文化的・政治的影響の下地に立脚してのことであろうと推測される。また、口能登に存在しない15尺の規格が呉西において存在するなど、各地域間の交流の疎密とも関連があると考えられる。

次に注目されるのは、規格の性質の違いである。前述した地域性をもつ規格は小型・一般建物にみられるもので、大型建物では、呉東と加賀の規格が共に18尺と19尺に集中しているように、地域性を超えた規格の存在を窺わせている。また超大型建物においては、規格の集中が見られず、戸水Ｃ遺跡の９号建物と12号建物のように、同一集落内にあっても規格の異なっているもの（方向性は揃えている）があり、建物自体の性格によって規格を使い分けていた可能性も考えられる。

（５）大型建物について

ここでいう大型建物とは、桁行５間以上、平面積50m²以上の建物をさす。この大型建物は、平面積100m²を境に有廂の比率が激増するなど性格が変わるので、平面積100m²以上と未満に分けて検討を行う。なお、宮地廃寺[28]と末松廃寺[29]の建物に関しては、寺院に関する特殊例として除外した。

さて、大型建物の規格類別に関する最近の論考としては、千木ヤシキダ遺跡の報告書の考察[30]があり、梁行と桁行の比率から分類が試みられている。これによると、C_1群（比率２：１）は初期荘園庄家の主屋級建物、Ｅ群（比率４：１）は国家的祭祀施設の中心建物とされまとまっているが、Ｄ群（比率３：１）には荘園の主屋と付属棟及び官衙関連施設など多種の建物が属しており、また荘園の主屋とされているじょうべのま遺跡ＳＢ０１０は単独でＦ群（比率４以上：１）に属しているなど、完全な類別には至っていないようである。前項で行った梁行総長の比較においても、平面積100m²以上の建物については傾向が出ず、建物単体による比較では規格は出て来そうにない。よってここでは、平面積100m²以上の建物については、まず建物小群の配置によって分類し、その分類に従って性格や規格の検討を行う方法をとる。

平面積100m²以上の建物

この種の建物を含む建物小群は、次の３種に分類される。

Ａ類---主屋と脇屋及び付属棟で構成され、主屋前方の広場を囲んで配置される。

Ｂ類---配置はＡ類とほぼ同じだが、主屋に比して脇屋が小さく、前方の広場も完全にとり囲まれている。

Ｃ類---Ａ類の構成に倉庫が加わり、主屋後方の広場を囲んで配置される。

以上の分類により、以後各類に属する建物について検討する。

Ａ類に属するものには、高瀬遺跡[31]ＳＢ010（を含む建物小群。以下同じ。）、横江庄遺跡[32]庄家跡ＳＢ01がある。両者は共に初期荘園の庄家主屋と考えられており、先の楠氏の分類においても共にC_1群に属している。建物配置を含めて、初期荘園庄家の典型と考えられる。

Ｂ類に属するものには、寺家遺跡[33]ＳＢ01Ａ・Ｂがある。この建物は国家的祭祀施設の中心建物と考えられており、中央に廂のある特異な平面プランも、他の構成建物に比して格段に大きい主屋も、現在の神社（大社級）を思えば納

得されるであろう。

問題になるのがＣ類で、Ｃ類に属するものには、じょうべのま遺跡ＳＢ010・016・017、戸水Ｃ遺跡12号建物がある。第１の問題点は、建物の構成・配置を同じくしながら、じょうべのま遺跡は荘園の庄家、戸水Ｃ遺跡は官衙関連施設と異なった性格が与えられている点である。第２は、主屋本体の規格にも、身舎梁行総長が5.0m（16.7尺）という共通点のみられることである。さらに、両者に付設している倉庫にも、先述（２間×２間建物の項参照）したとおり共通点がみられる。これだけ共通点を持ちながら、両者の性格が異なっているとは何如なることであろうか。これを考えるには建物からばかりではなく、遺物や立地なども総合的にみる必要があり、一朝一夕に解決できる問題ではないので、ここでは問題提起として止める。なお参考までに、この両者と梁行総長を同じくするものとして、荘園の庄家とされている藤江Ａ遺跡[34]ＳＢ01がある。

このように、Ｃ類の性格付けには問題点が残るが、Ａ類・Ｂ類に関しては建物小群としての構成・配置を含めて、各々類型を認めることができると考える。なお、Ａ類の建物小群に倉庫が見られない点については、倉庫群として存在し、その立地は当時の主たる輸送手段であった水運の便を考えてなされたと考えられる。

平面積100㎡未満の建物

この種の建物には、建物小群の主屋、平面積100㎡以上の建物の付属棟の２種がある。前者の中で注目されるのは納屋を付設した建物であるが、これについては２間×１間建物の項で述べてある。後者については、特別の規則性を見出すには至らなかった。

（６）妻廂を持つ建物について

現在のところ検出されている妻廂付き建物は僅か７棟（総検出数の1.6%）であり、極めて特異な平面プランと言える。平面積はまちまちで、最小のものは寺家遺跡ＳＢ06で13.0㎡、最大のものは当浦田遺跡の建物―Ｉ―05で57.5㎡とかなりの開きがある。

この建物で注目されるのは、平面積100㎡以上の建物に付設されているものが、じょうべのま遺跡ＳＢ028、横江庄遺跡庄家跡ＳＢ04、寺家遺跡ＳＢ06と３棟ある点である。７棟中の３棟ではさして特殊性は感じられないが、他の建物の状況をみるとこれが浮上してくる。すなわち、浦田遺跡建物―Ｉ―05、佐々木ノテウラ遺跡６号建物は調査区の端に位置しており、周囲の状況が明確ではない。また法仏遺跡Ｂ'地区は総柱建物が多く、中世建物への移行期と考えられており、１号建物も総柱（あるいは両廂）の可能性がある。このように見てくると、確実に単独で存在しているのは法仏遺跡Ｏ地区の４号建物ただ１棟となり、前記の特殊性が一層可能性をもつと言えよう。

（７）浦田遺跡の性格について

当遺跡の性格については、調査面積がごく狭いこともあり、集落構造面からの言及は不可能に近い。よって、遺構・遺物に加えて文献の面からそれぞれ検討し、しかる後に総合的に判断することとする。

まず遺構は、部分的に確認されたものを含めて17棟検出されており、これらの建物の中で注目すべきものとして、①５間×３間の妻廂付大型建物、②平面積25㎡を超える２間×２間建物２棟、③廂付建物の存在があげられる。①・②は平面積100㎡以上の大型建物の存在を窺わせるものであり、③の存在も考えると、湯尻氏の分類のII類集落とIII類集落の中間に位置するといえよう。

次に遺物面からみると、当遺跡には緑釉・灰釉等の陶器類は全く無く、墨書土器すら一点も出土していない。また、出土遺物をみても、供膳形態は須恵器、煮沸形態は土師器と、該期の一般農村と全く同じであり、遺構の特徴と比較した場合、理解に苦しむものである。なお遺物が最も多いのは９世紀代である。

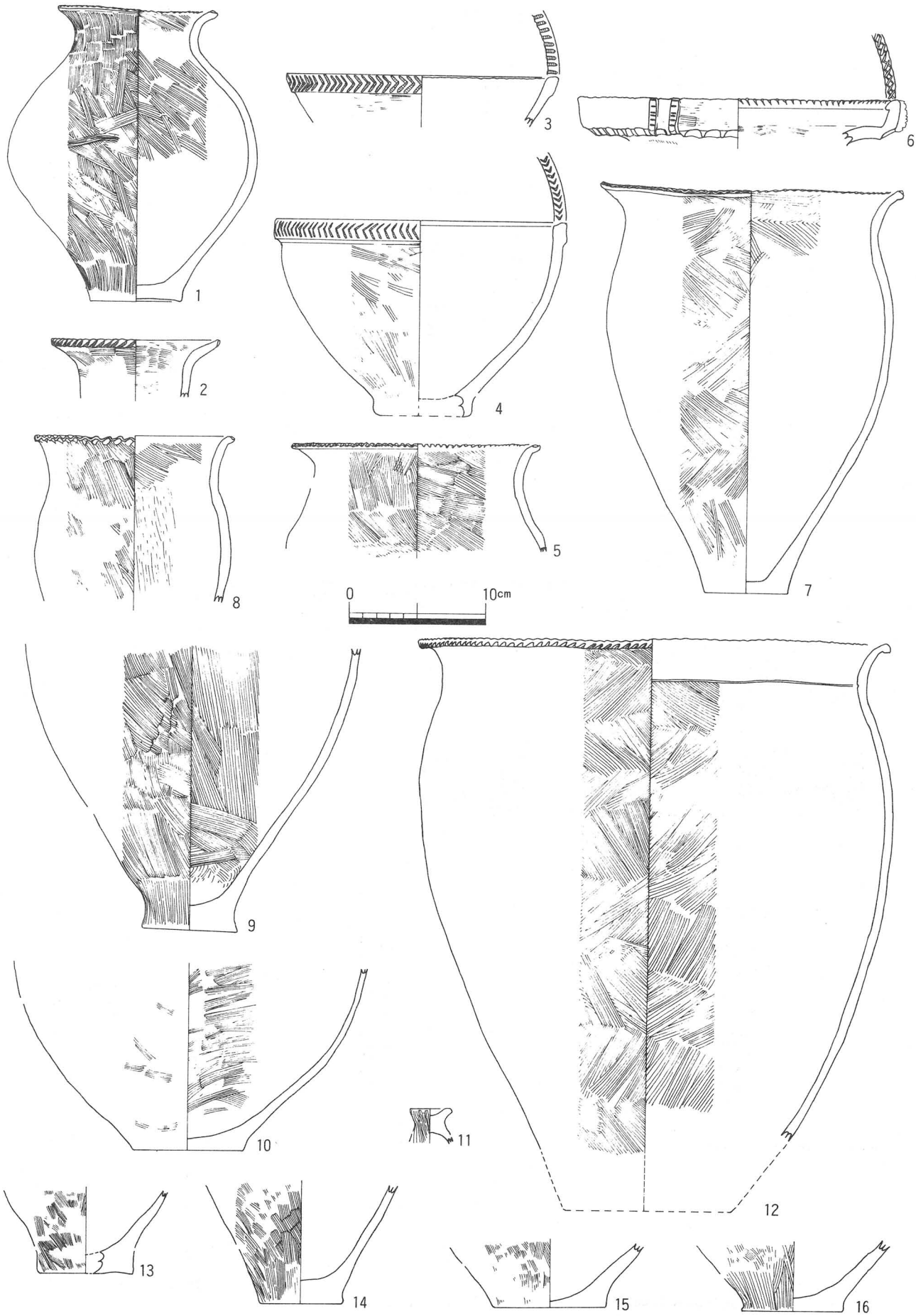
文献学上からは、当遺跡の所在する浦田地区周辺は「東大寺領大藪（おおやぶ）荘」に比定されており[35]、存続期間は８世紀中頃から10世紀末と考えられている[36]。

以上から考えると、当浦田遺跡が荘園内の一画を占めていたことは間違いないであろう。そしてその性格については、遺物から庄家域と考えるのは無理であり、特殊な建物の存在から、荘園管理の一端を担っていた集落と考えておきたい。その役割が何であったかは、周辺地域の調査や古代条理制の復原を通して、「大藪荘」の全景復原と共に解決すべき問題であろう。

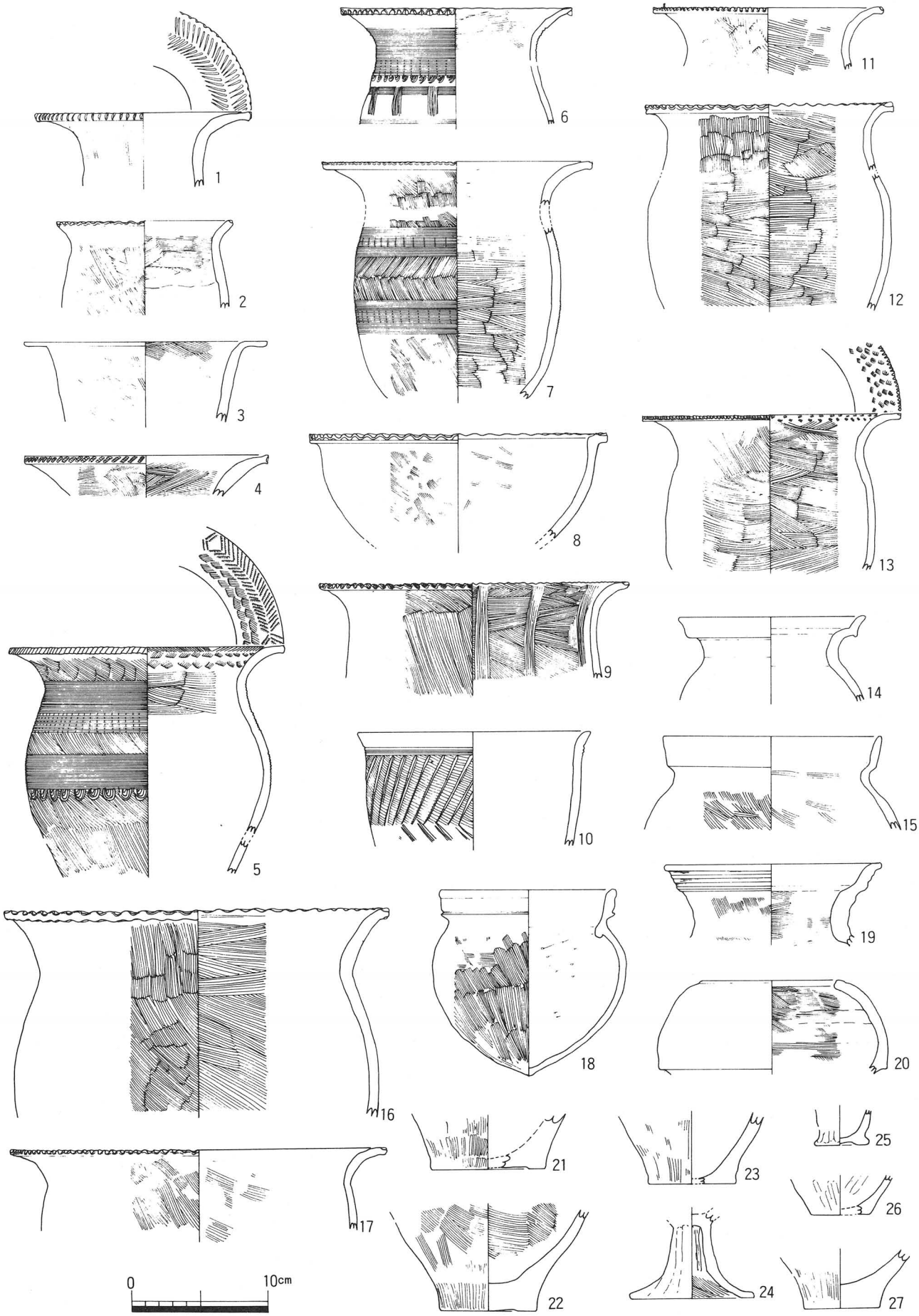
（森）

註

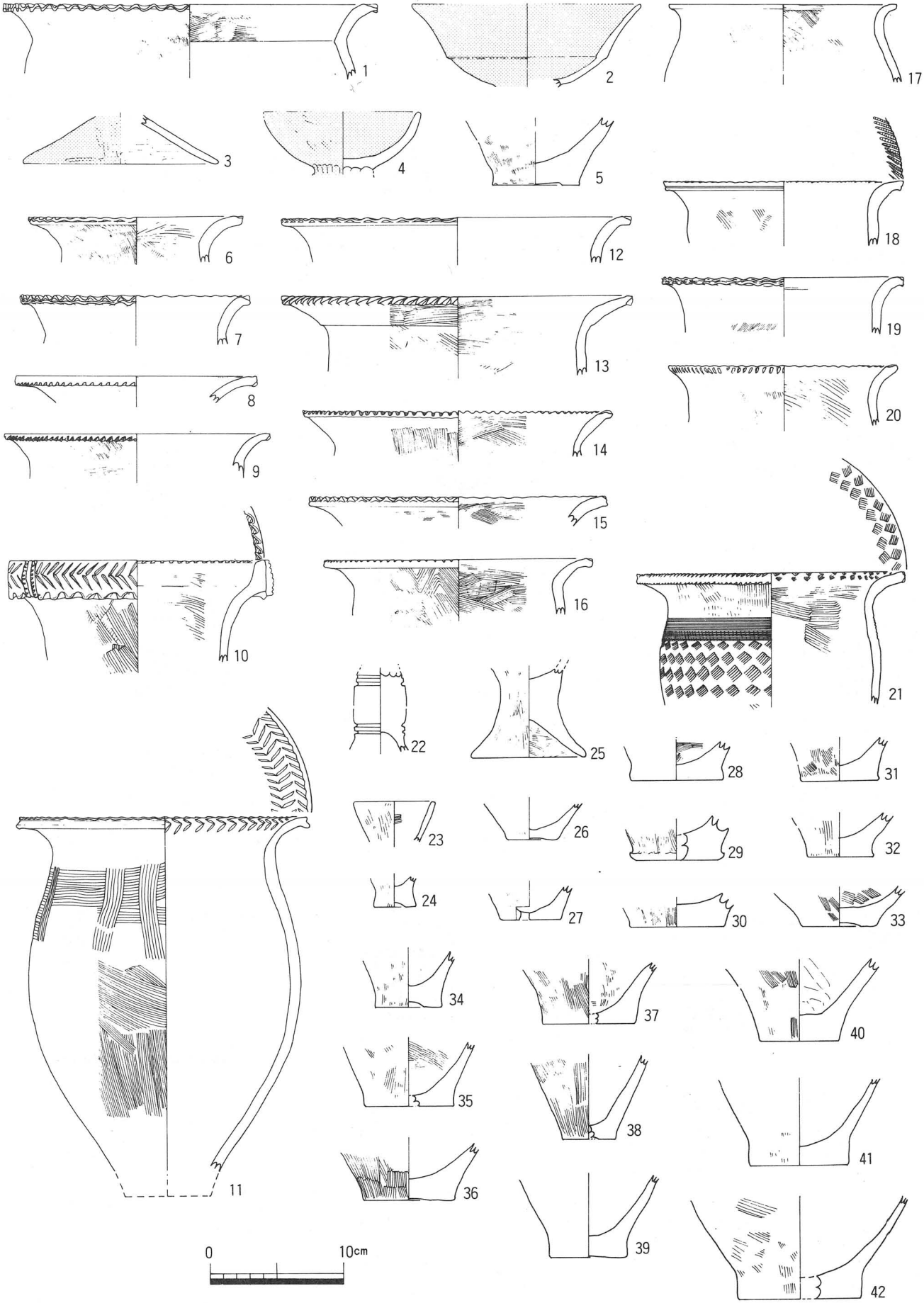
1）安田良栄　1977　「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻
2）中島俊一・梶幸夫　1975　『安養寺遺跡群発掘調査概報（安養寺・柴木・部入道地区）』石川県教育委員会
3）小島俊彰　1972　『富山県滑川市・上市町　本江・広野新遺跡調査概報』富山県教育委員会・滑川市教育委員会・上市町教育委員会
4）以下、縄文時代の遺物については酒井重洋氏に御教示を得た。
5）池野正男　1987　「２．浦田遺跡(８)平安時代の遺物」『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』立山町教育委員会
6）以下、平安時代の遺物については宇野隆夫氏、池野正男氏に、中・近世の遺物については宮田進一氏に御教示を得た。
7）上野　章　1972　「６弥生時代附古式土師器」『富山県史』考古編
8）石原与作　1977　「古代の荘園と条理」『立山町史』上巻
9）奥田淳爾　1976　「東大寺の墾田地」『富山県史』通史編Ⅰ原始・古代
10）湯尻修平　1978　「Ⅲ遺跡の状態と遺構、Ⅴまとめ」『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告(Ⅰ)』石川県教育委員会
11）斎藤外二　1955　「旧福野潟及びその周辺の地形」『石川県羽咋郡旧福野潟周辺総合調査報告書』石川県考古学研究会々誌第７号　石川県考古学研究会
12）楠　正勝　1987　「第３章遺構、第５章まとめ第１節遺構」『金沢市千木ヤシキダ遺跡』金沢市教育委員会
13）飯塚卓二・井川達雄・女屋和志雄　1984　「第Ⅱ章検出された遺構と遺物第６節畠址」『熊野堂遺跡(１)』群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
14）岸本雅敏　1986　「Ⅴ新町Ⅱ遺跡の古代掘立柱建物群の性格」『新町Ⅱ遺跡の調査』婦中町教育委員会
15）註12）に同じ
16）湯尻修平　1983　「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江荘遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
17）註16）に同じ
18）田嶋明人　1983　「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡―加賀・能登の掘立柱建物群を中心とした覚え書―」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号　石川考古学研究会
19）田嶋明人・越坂一也・山本直人・田中考典・横山そのみ　1986「Ⅲ遺構・遺物」「漆町遺跡Ⅰ」石川県立埋蔵文化財センター
20）註18）に同じ
21）註14）に同じ
22）小嶋芳孝　1986　「Ⅶ砂田地区の遺構」『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
23）高島忠平・狩野久・山中正敏・橋本正・舟崎久雄　1974　「じょうべのま遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』富山県教育委員会
24）戸澗幹夫　1986　「第３章第７節主な遺構と遺物」『金沢市戸水Ｃ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
25）註12）に同じ
26）北野博司　1986　「第４節Ⅲ期の遺構と遺物」『佐々木ノテウラ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
27）岸本雅敏　1981　「８東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町遺構編―』上市町教育委員会
28）小森秀三　1977　『宮地廃寺範囲確認発掘調査報告』加賀市教育委員会
29）河原純之・吉岡康暢　1976　『史跡末松廃寺』野々市町教育委員会、1968『末松廃寺跡（第２次発掘調査概要）』文化財保護委員会・石川県教育委員会・野々市町教育委員会
30）註12）に同じ
31）阿部義平・狩野久・橋本正・舟崎久雄　1974　「高瀬遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』富山県教育委員会
32）吉岡康暢・金山顕光・西野秀和・滋井真　1983　「第一部調査編」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
33）註22）に同じ
34）四柳嘉章　1971
係埋蔵文化財調査団
35）註８）に同じ
36）註９）に同じ



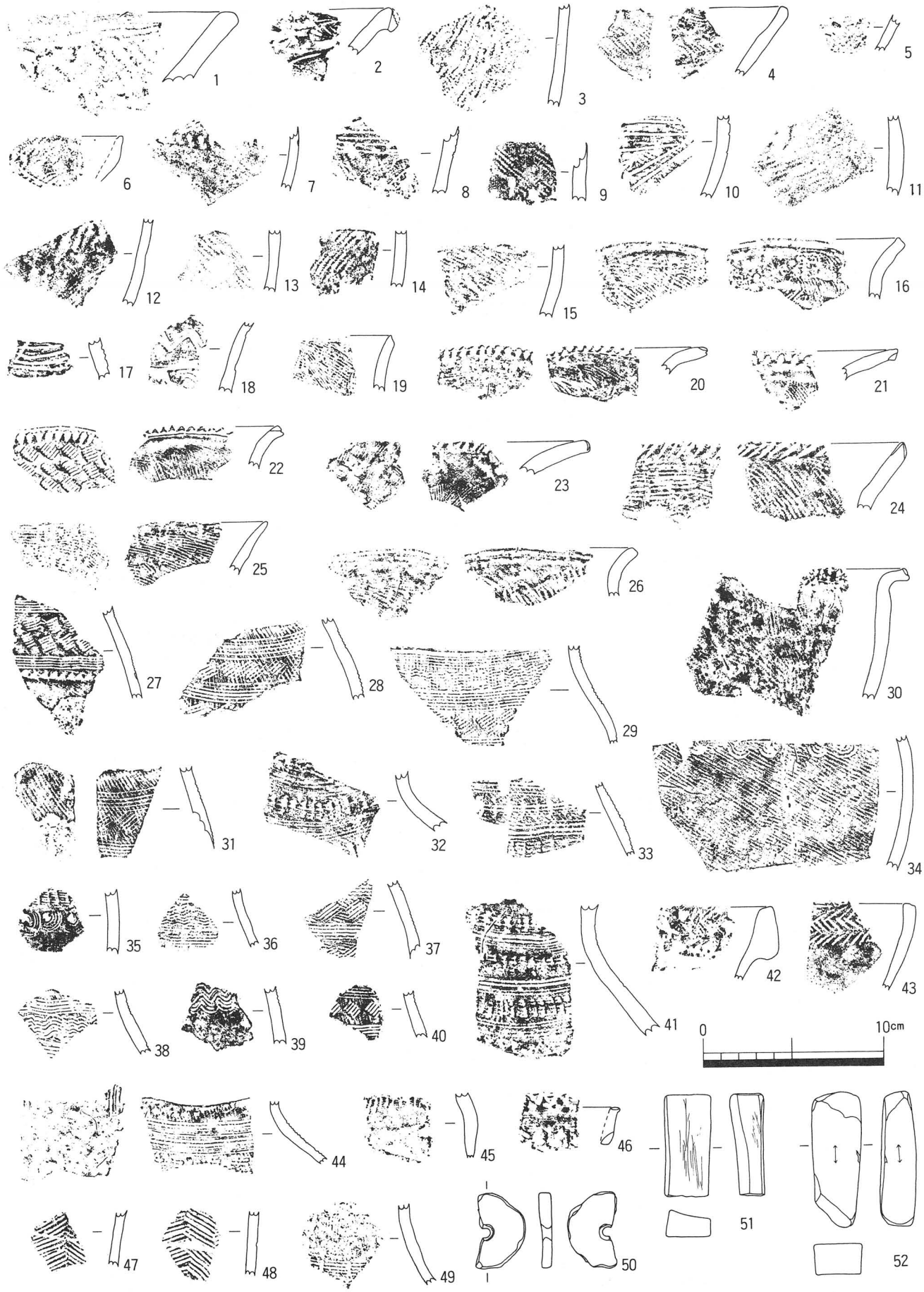
第18図　昭和61年度調査区出土遺物実測図　8・9.溝－03　1～7・10～16.溝－05



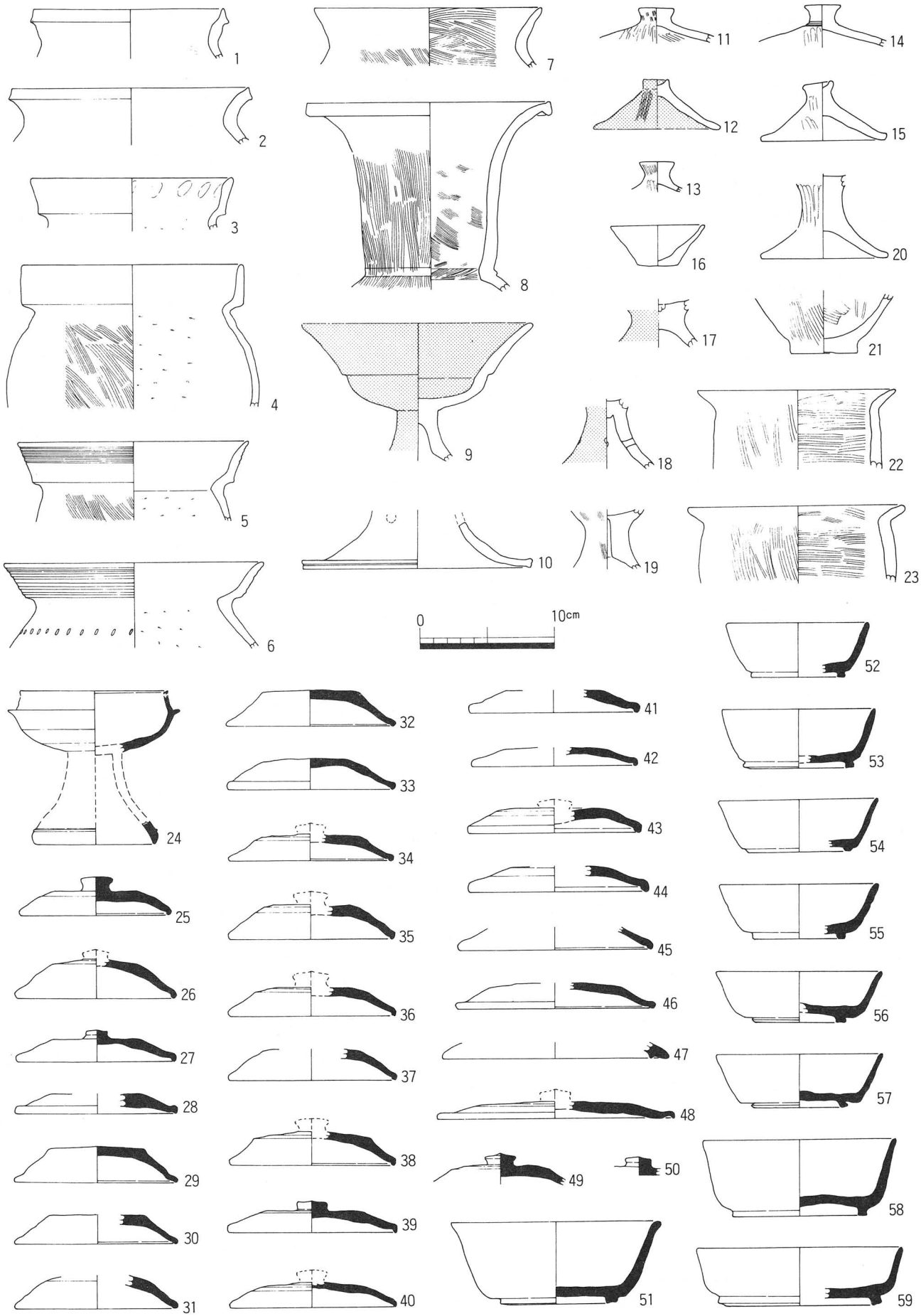
第19図　昭和61年度調査区出土遺物実測図　4・5・8・16.穴－05　9・10・27.穴－08　1～3・6・7・11～13・21～23・25.穴－09
14・17・26.溝－08　15・18～20・24.溝－09



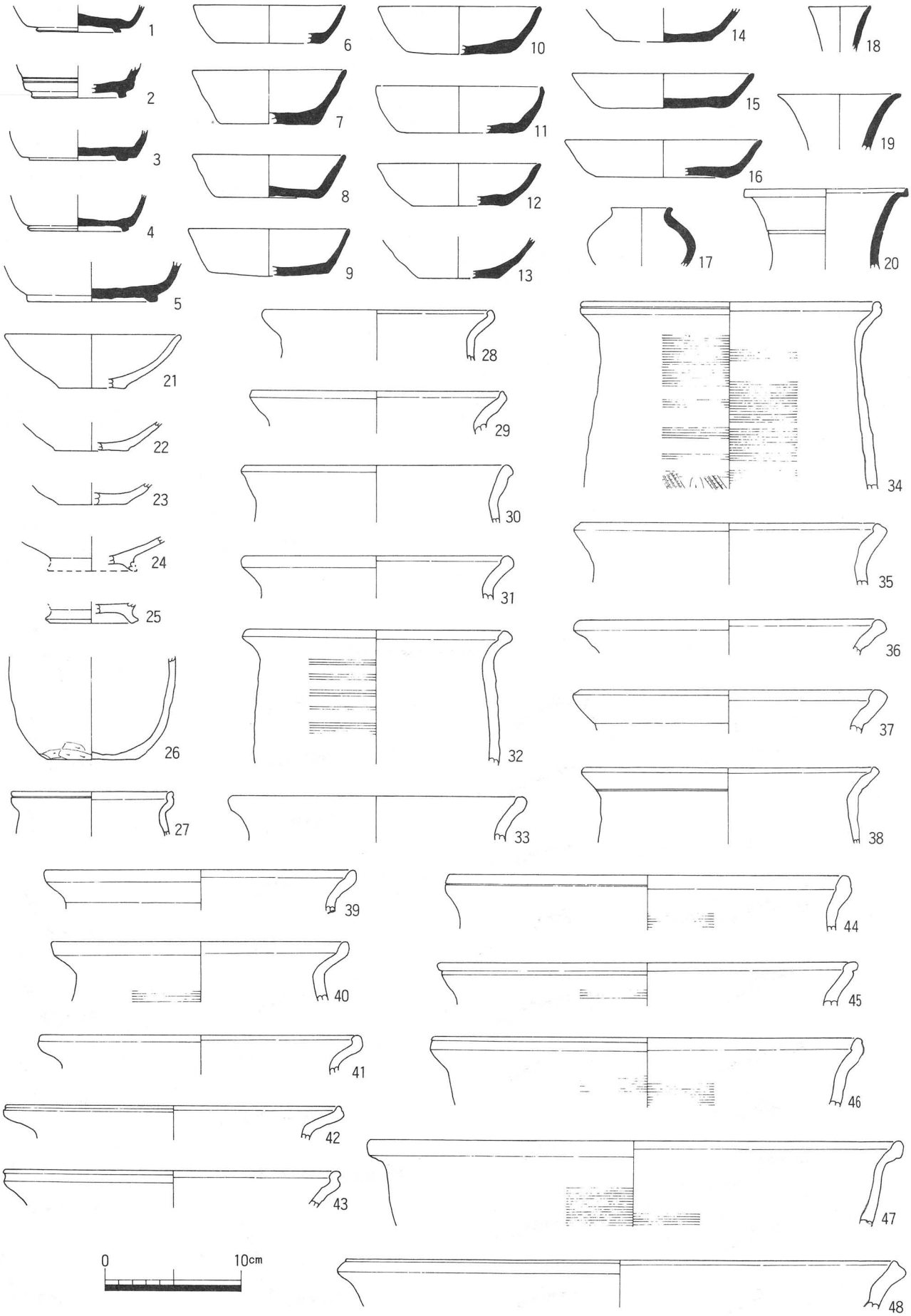
第20図　昭和61年度調査区出土遺物実測図　1～5.溝－10　その他.包含層



第21図　昭和61年度調査区遺物拓影・実測図　24・47・48.穴－05　22.穴－09　32.穴－15　4.溝－03
20・25・27・31・35・37・39・40・50.溝－05
8・41.溝－08　13・16・18・26.溝－09　その他.包含層



第22図　昭和61年度調査区出土遺物実測図　38.穴－20　54.穴－34　その他.包含層



第23図　昭和61年度調査区出土遺物実測図　6.建物－01・P5　18.建物－03・P8　26.溝－12　32.建物－01・P1　34.穴－その他.包含層

図番号	器種	出土位置	法量(cm)	口頸部(杯部)	体部(脚部)	砂粒	色調	焼成	残存度	備考
第17図 1	壷	D-3黒色	口径9.5	外：ヨコナデ 内：ハケメ		やや少	赤褐色	良好	約1/8	
2	甕	D-2黒色	口径18.0	外：弱い擬凹線5条 ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：ハケメ 内：ヘラケズリ	中	淡橙肌色	並	約1/4	
3	甕	穴-17	口径23.3	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ	外：ハケメ 内：ヘラケズリ	中	橙肌色	並	約1/4	スス付着
4	甕	D-2黒色	口径16.2	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ		中	淡灰茶色	並	約1/6	スス付着
5	甕	B-2黒色 C-2茶色	口径16.2	外：ハケメののちヨコナデ 内：不明		多	淡灰茶色	並	約1/6	スス付着
6	甕	C-1黒色	口径16.2	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ		中	淡橙肌色	良好	約1/8	スス付着
7	甕	D-2黒色	口径20.1	外：櫛歯列点・ほかは不明 内：不明		中	橙肌色	やや不良	約1/8	スス付着
8	甕	溝-22	口径19.8	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ	外上半：ハケメののちナデ 外下半：ハケメ 内：ナデ 内底付近：ハケメ	中	淡褐色	並	約3/4	スス付着
9	甕	穴-17	口径18.0	外：ハケメ 内：ハケメ		多	淡灰茶色	やや不良	約1/6	
10	甕	C-1黒色・茶褐色	口径16.3	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ？		中	淡橙肌色	良好	約1/6	
11	甕	D-2黒色	口径20.0	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ	外：ナデ 内：ナデ	多	橙肌色	良好	約1/4	スス付着
12	甕	A-2黒褐色	口径18.2	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメ ハケメののちヨコナデ		多	外：淡褐色 内：黒褐色	並	約1/12	
13	高杯	穴-17	口径22.8	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ		少	赤橙色	良好	ほぼ完全	内外面赤色顔料塗布　スス付着
14	蓋	C-1黒色	つまみ径5.2	頂部：ナデ 外：ハケメののちナデ 内：ハケメののちナデ		中	淡灰茶色	やや不良	ほぼ完全	
15	脚部	D-2黒色	脚端径6.2	内：ヘラミガキ	外：ヘラミガキ 内：ナデ・ハケメ	中	淡橙肌色	良好	完全	偏った位置に2孔
16	底部	D-2黒色	底径4.3		外：ハケメ 内：ナデ	多	外：黒色 内：肌色	やや不良	ほぼ完全	
17	底部	D-2黒色	底径1.3		外：ハケメ 内：ハケメ？	多	外：暗赤褐色	並	完全	スス付着
18	底部	D-3茶褐色	底径5.7		外：ハケメ 内：不明	多	外：黒褐色 内：淡橙肌色	やや不良	約1/4	
19	底部	D-2茶褐色	底径5.5		外：ナデ 内：ハケメ	多	外：茶褐色 内：黒色	並	完全	
20	脚部	溝-22			外：ナデ 内：ナデ	少	外：明紅色 内：淡橙肌色	やや不良	約1/2	外面赤色顔料塗布
21	脚部	D-1茶褐色-黒色			外：ハケメののちナデ 内：ナデ？	少	淡褐色	良好	約1/2	
第18図 1	壷	溝-05	口径11.8 器高21.9 底径 6.8	端部：刻み 外：ハケメ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメののちナデ	中	明茶褐色	並	ほぼ完全	
2	甕	溝-05	口径12.6	端部：櫛歯による刻み 外：ハケメ 内：ハケメののちヨコナデ		中	淡橙褐色	良好	約1/3	
3	鉢	溝-05	口径20.2	端部：櫛歯による刻み 外：櫛歯による羽状刺突文 内：ヘラミガキ	外：ハケメ 内：ヘラミガキ	中	外：淡茶褐色 内：黒褐色	並	約1/12	
4	鉢	溝-05	口径21.7 器高14.6 底径 7.3	貼り付け凸帯 端部：櫛歯による羽状刺突文 外：櫛歯による羽状刺突文	外：ハケメ 内：ナデ	多	黄褐色	並	約2/3	
5	甕	溝-05 X8-9Y4-5 3層	口径18.5	端部：刻み 外：ハケメ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	中	茶褐色	並	1/3	スス付着
6	壷	溝-05	口径24.0	端部：格子状に刻み 外：ハケメののちナデ・刻みを施す棒状浮文・口縁帯下端を刻んで波状に仕上げる・ハケメ 内：ハケメののちナデ 同ミガキ		中	淡橙褐色	並	約1/12	
7	甕	溝-05	口径23.3 器高30.5 底径 6.1	端部：沈線ののち小波状 外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ	外：ハケメ 内：ハケメののちヘラミガキ	中	淡茶褐色	並	ほぼ完全	スス付着
8	甕	溝-03 X7Y5 3層 X9Y4 3層	口径14.9	端部：小波状 外：ハケメ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	中	淡茶褐色	並	約1/3	スス付着
9	体部	溝-03 X7Y5 3層	底径7.2		外：ハケメ 内：ハケメ	中	外：茶褐色 内：黒褐色	並	約1/2	
10	体部	溝-05	底径8.2		外：ハケメののちナデ 内：ハケメ	中	淡茶褐色	良好	約1/2	
11	蓋	溝-05	つまみ径3.1	頂部：ナデ 外：ハケメ 内：ナデ		中	灰褐色	不良	ほぼ完全	
12	甕	溝-05	口径34.8 器高(42.9)	端部：刻み 外：ハケメ 内：ハケメののちヨコナデ	外：ハケメ 内：ハケメ	中	淡茶褐色	並	約2/3	スス付着
13	底部	溝-05	底径7.0		外：ハケメ 内：不明	多	灰褐色	並	約1/3	スス付着
14	底部	溝-05 X8-9Y3 3層	底径6.2		外：ハケメ 内：ナデ	多	外：灰茶褐色 内：黒褐色	並	ほぼ完全	スス付着
15	底部	溝-05	底径8.5		外：ハケメ 内：ハケメののちナデ	中	外：橙褐色 内：黒褐色	並	ほぼ完全	スス付着
16	底部	溝-05	底径7.4		外：ハケメ 内：ハケメののちナデ	中	淡茶褐色	良好	ほぼ完全	
第19図 1	壷	穴-09 X8Y5 3層	口径16.0	外：刻み・ヘラミガキ 内：櫛歯による羽状刺突文 ハケメののちナデ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	橙肌色	良好	約1/2	
2	甕	穴-09	口径13.0	端部：小波状 外：ヨコナデ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	淡橙褐色	並	約1/4	スス付着
3	壷	穴-09	口径18.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：ハケメ 内：ハケメ・ヨコナデ	多	橙褐色	並	約1/12	スス付着
4	甕	穴-05 穴-06 X8-9Y5 3層	口径18.0	端部：櫛歯による刻み 外：ハケメ 内：ヨコナデ・ハケメ		やや少	淡茶褐色	不良	約1/4	
5	甕	穴-05	口径20.5	端部：櫛歯による羽状刺突文 外：ハケメののちヨコナデ 内：櫛描文	外上半：櫛描文・ハケメ 外下半：ハケメ 内：櫛描文	やや少	濃灰褐色	並	約1/2	スス付着

第6表①　昭和62・61年度出土弥生土器・古式土師器観察表

図番号	器種	出土位置	法量(cm)	口頸部(杯部)	体部(脚部)	砂粒	色調	焼成	残存度	備考
6	甕	穴-09	口径17.0	端部：櫛歯による刻み 外：ヨコナデ・ハケメののちナデ・櫛描文 内：ハケメ	外：櫛描文 ハケメののちナデ 内：ハケメののちナデ	中	茶褐色	良好	約1/8	
7	甕	穴-09 X8Y6 3層	口径20.0	端部：刻み 外：ハケメ 内：ハケメ	外：櫛描文・ハケメ 内：ハケメ	中	茶褐色	並	約1/8	スス付着
8	鉢	穴-05	口径22.1	端部：沈線ののち小波状 外：ハケメののちナデ？ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	淡橙褐色	並	約1/3	
9	甕	穴-08 X8Y6 3層	口径23.0	端部：沈線ののち櫛歯による小波状 外：ハケメ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	やや少	外：淡茶褐色 内：灰褐色	やや不良	約1/4	スス付着
10	甕	穴-08 X8-9Y5 3層	口径17.2	外：ヨコナデ・櫛描文 内：ヨコナデ	外：櫛状具による綾杉状文様 内：ナデ	少	外：赤褐色 内：橙褐色	やや不良	約1/4	
11	甕	穴-09	口径17.1	端部：刻み 外：ハケメ 内：ハケメ		中	橙褐色	良好	約1/8	
12	甕	穴-09 X8Y6 3層	口径18.3	端部：小波状 外：ヨコナデ・ハケメ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	茶褐色	並	口頸部：約1/6 体部：約1/8	スス付着
13	甕	穴-09	口径19.1	端部：刻み 外：ハケメ 内：櫛描文・ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	外：淡茶褐色 内：黒褐色	並	約1/6	スス付着
14	壺	溝-08 溝-08付近	口径13.9	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	外：ヘラミガキ 内：ナデ	中	淡橙肌色	良好	約1/6	
15	甕	溝-09	口径16.1	外：ハケメののちヨコナデ 内：ヨコナデ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	茶褐色	やや不良	口頸部：完全 体部：約1/8	スス付着
16	甕	穴-05 穴-02 穴-09 X8Y5 3層	口径28.7	端部：小波状 外：ハケメ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	暗茶褐色	並	約1/3	スス付着
17	甕	溝-08	口径28.0	端部：刻み 外：ハケメ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	外：橙肌色 内：淡灰褐色	並	約1/12	
18	甕	溝-09	口径13.1 器高13.9	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ	外：ハケメ 内：ハケメ	中	暗茶褐色	やや不良	ほぼ完全	スス付着
19	壺	溝-09	口径16.0	外：凹線４条 ヨコナデ・ハケメ 内：ヨコナデ・ハケメ		中	淡茶肌色	良好	約1/3	
20	壺	溝-09	口径10.4		外：ヘラミガキ 内：ハケメ	少	灰茶褐色	良好	約1/3	スス付着
21	底部	穴-09	底径8.5		外：ハケメ	やや少	茶褐色	並	約1/2	
22	底部	穴-09	底径7.3		外：ハケメ 内：ハケメ・ナデ	多	黒褐色	やや不良	約1/3	
23	底部	穴-09 X8Y6 3層	底径6.7		外：ハケメ 内：ハケメののちナデ	多	黒褐色 内：淡茶褐色	やや不良	約1/2	
24	高杯	溝-09	脚端径9.3		外：ヘラミガキ 内：ハケメ	少	明茶褐色	良好	約3/4	
25	小型土器	穴-09	底径3.9		外：ナデ 内：ナデ	中	橙褐色	並	ほぼ完全	スス付着
26	底部	溝-08	底径4.2		外：ハケメののちヘラミガキ 内：丁寧なナデ・ヘラミガキ	少	淡橙肌色	並	約1/4	
27	底部	穴-08 X8Y6 1-2層	底径5.7		外：ハケメののちナデ 内：ナデ	多	外：淡赤褐色 内：黒褐色	やや不良	約1/2	
第20図1	甕	溝-10	口径28.0	端部：沈線ののち小波状 外：ヨコナデ・ハケメ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	淡茶褐色	良好	約1/8	
2	高杯	溝-10 穴-45 X3Y7 3層	口径17.0	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ		少	淡肌色	並	約1/3	内外面赤色顔料塗布
3	蓋	溝-10 溝-09	口径14.7	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ		少	橙肌色	良好	約1/4	外面赤色顔料塗布
4	鉢	溝-10 X2Y8 3層	口径11.6		外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	少	橙肌色	良好	約2/3	内外面赤色顔料塗布
5	底部	溝-10 溝-09	底径6.6		外：ハケメ 内：ナデ 接地面：ハケメ	多	外：淡灰褐色 内：茶褐色	良好	ほぼ完全	
6	甕	X7Y2 3層	口径16.0	端部：沈線ののち小波状 外：ハケメ 内：ハケメ		中	外：淡赤褐色 内：黒褐色	並	約1/6	
7	甕	X6Y9 3層	口径17.1	端部：沈線ののち小波状 外：ヨコナデ 内：ハケメののちナデ		中	外：茶褐色 内：淡赤褐色	並	約1/12	
8	甕	X6Y9 3層	口径18.1	端部：刻み 外：ハケメ 内：ハケメ		多	淡赤褐色	並	約1/2	
9	甕	X8Y6 3層	口径20.0	端部：刻み 外：ハケメ・ナデ 内：ナデ		中	淡茶褐色	良好	約1/8	
10	壺	X8-9Y5 3層	口径19.0	端部：櫛歯による刻み 外：羽状刺突文・刻みを施す棒状浮文(2本1組)・口縁帯下端に刻み・ハケメ 内：ハケメ		中	橙褐色	良好	約1/6	
11	甕	X6Y9 3層	口径22.8 器高(28.5)	端部：凹線状沈線１条 外：ヨコナデ 内：櫛歯による羽状刺突文 ナデ	外上部：櫛描文 外中下部：ハケメ 内：ナデ	中	乳褐色	やや不良	約1/3	スス付着
12	甕	X6Y7 3層	口径26.0	端部：沈線ののち小波状 外：ヨコナデ 内：不明		中	橙褐色	良好	約1/8	スス付着
13	甕	３層	口径26.0	端部：刻み 外：ハケメ 内：ハケメ	外：ハケメ・ナデ 内：ハケメ	中	外：黒褐色 内：淡茶褐色	並	約1/8	スス付着
14	甕	X6Y7 3層	口径23.1	端部：櫛歯による刻み 外：ヨコナデ・ハケメ 内：ヨコナデ・ハケメ		中	淡橙褐色	並	約1/3	
15	甕	X3Y7 3層	口径22.2	端部：沈線ののち小波状 外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメ		中	淡茶褐色	やや不良	約1/8	
16	甕	X8-9Y7 1-2層	口径20.0	端部：刻み 外：ハケメ 内：ハケメ・指押さえ		やや少	淡橙褐色	並	約1/6	スス付着
17	壺	X8-9Y5 1-2層	口径16.5	外：ヨコナデ・ハケメ 内：ナデ	外：ハケメ 内：ハケメ？	やや少	淡茶褐色	並	約1/6	スス付着
18	甕	X7Y4 3層	口径18.0	端部：沈線１条 外：ヨコナデ 内：櫛歯による刻み・ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ？	中	橙肌色	良好	約1/8	スス付着

第６表②　昭和61年度出土弥生土器・古式土師器観察表

図番号	器種	出土位置	法量(cm)	口頸部（杯部）	体部（脚部）	砂粒	色　調	焼成	残存度	備考
19	甕	X4Y7 3層	口径18.0	端部：沈線ののち小波状 外：ヨコナデ 内：不明		中	外：茶褐色 内：淡灰褐色	並	約1/4	
20	甕	X2Y8 3層 X3Y7 3層	口径17.0	端部：刻み 外：ヨコナデ・ハケメ 内：ハケメ		多	淡茶褐色	良好	約1/8	
21	甕	X6Y7 3層	口径20.0	端部：刻み 外：ハケメののちナデ 内：櫛描文・ハケメ	外：櫛描文 ハケメののちナデ 内：ハケメ・ナデ	多	茶褐色	良好	約1/6	
22	高杯	X4Y7 3層		外：2本1組の箆描沈線を2組 ナデ 内：ナデ		多	淡灰褐色	並	約2/3	
23	壺	X9Y4 3層	口径 6.1	外：ハケメ 内：ハケメ		中	淡茶褐色	不良	約1/8	
24	小型土器	X8-9Y5 3層	底径3.3		外：ハケメ 内：ナデ？ 接地面：ナデ	中	橙灰褐色	並	ほぼ完全	蓋の可能性あり
25	高杯	X8-9Y7 1-2層	脚端径9.2		外：ハケメ 内：ハケメ	中	外：橙褐色 内：灰褐色	やや不良	約1/2	
26	底部	X9Y3-4 3層	底径3.4		外：ハケメののちナデ 内：不明	中	外：淡橙肌色 内：不明	並	ほぼ完全	
27	有孔土器	X9Y7 3層	底径4.6		外：ハケメ 内：ナデ	多	暗茶褐色	並	ほぼ完全	
28	底部	X9Y3-4 3層	底径7.0		外：ナデ 内：ハケメ 接地面：ハケメ	やや少	暗茶褐色	良好	ほぼ完全	
29	底部	X8Y7 3層	底径7.1		外：ハケメ 内：ナデ	多	暗茶褐色	やや不良	約1/2	接地面の砂粒が動いている
30	底部	X7Y2 1-2層	底径7.0		外：ハケメ 内：ナデ 接地面：ハケメ	やや少	茶褐色	やや不良	約2/3	
31	底部	X6Y8 3層	底径5.9		外：ハケメ 内：ナデ	多	暗茶褐色	不良	ほぼ完全	
32	底部	X6Y7 3層	底径5.0		外：ハケメ 内：不明	中	橙褐色	並	ほぼ完全	
33	底部	X8-9Y3 1-2層	底径5.5		外：ハケメののちナデ 内：ハケメののちナデ	中	淡橙灰色	並	ほぼ完全	
34	底部	X8Y4 1-2層	底径5.0		外：ハケメ 内：ナデ	多	外：淡茶褐色 内：灰褐色	並	約1/3	
35	底部	X3Y7 3層	底径6.7		外：ハケメ 内：ハケメ	中	外：橙褐色 内：灰褐色	並	約1/3	
36	底部	X6Y7 3層	底径6.8		外：ハケメ 内：不明	中	暗茶褐色	やや不良	約2/3	
37	底部	X5Y9 3層	底径7.0		外：ハケメ 内：ハケメ	多	黒褐色	やや不良	約1/2	
38	底部	X3Y9 3層	底径4.0		外：ハケメ 内：ナデ	多	暗茶褐色	不良	約1/3	
39	底部	X5Y7 1-3層	底径6.0		外：不明 内：ナデ？ 接地面：ハケメ	多	淡橙肌色	やや不良	ほぼ完全	
40	底部	X6Y7 3層	底径5.8		外：ハケメ 内：ナデ	多	橙肌色	並	ほぼ完全	
41	底部	X6Y7 3層	底径7.3		外：ハケメ 内：不明	多	橙褐色	良好	約1/2	接地面に葉脈痕
42	底部	X8Y6 3層	底径9.2		外：ハケメ 内：ナデ	中	外：橙褐色 内：黒褐色	やや不良	約1/3	
第21図1	甕	X7Y2 3層	口径14.2	外：ハケメののちヨコナデ 内：ヨコナデ	外：ハケメののちナデ 内：ハケメ	中	淡橙肌色	良好	約1/8	スス付着
2	甕	Y8Y3 1-2層	口径17.5	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ	外：ハケメ 内：ハケメののちナデ	中	橙肌色	良好	約1/8	
3	甕	X8Y3 3層	口径15.0	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ 指押さえ	内：ヘラケズリ	中	橙褐色	並	約1/6	
4	甕	X4Y7 3層	口径16.4	外：擬凹線風にハケメ 内：ハケメののちヨコナデ	外：ハケメ 内：ヘラケズリ	中	淡茶褐色	良好	口頸部：約1/3 体部：約1/8	スス付着
5	甕	X9Y3-4	口径17.0	外：擬凹線5-6条・ヨコナデ 内：ハケメののちヨコナデ	外：ハケメ 内：ヘラケズリ	中	灰茶色	並	約1/6	スス付着
6	甕	X8-9Y3 1-2層	口径19.2	外：擬凹線6条 内：不明	外：肩部に列点文 内：ヘラケズリ	多	淡橙肌色	並	約1/8	
7	甕	X7Y4 3層 X7Y6 3層	口径16.7	外：ハケメののちヨコナデ 内：ハケメ	外：ハケメ 内：ハケメ	多	橙肌色	並	約1/4	
8	壺	X8-9Y2 1-2層	口径18.2	端部：ハケメののちヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケメ 内：ヨコナデ・ハケメ	外：ハケメ 内：ナデ？	やや少	淡橙肌色	不良	約1/3	接地面に葉脈痕
9	高杯	X2Y7 3層 X3Y7 1-3層	口径17.2	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	外：不明 内：ナデ	少	淡橙肌色	良好	杯部：約1/6 脚部：完全	杯部内外面・脚部外面赤色顔料塗布
10	脚部	X3Y9 3層 X4Y9 3層	脚端径17.1		外：ハケメのちナデ 内：ハケメののちナデ	中	淡橙褐色	良好	約1/2	透孔3個
11	蓋	X3Y7 3層	つまみ径2.7	頂部：ヘラミガキ つまみ側面：ハケメ 外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ		中	橙肌色	やや不良	約2/3	
12	蓋	X5Y9 3層	つまみ径1.9 口径9.4 器高3.8	頂部：ナデ 外：ヘラミガキ 内：ハケメののちナデ		中	明橙肌色	良好	約1/2	内外面赤色顔料塗布
13	蓋	X4Y7 3層	つまみ径2.5	頂部：ヘラミガキ つまみ側面：ハケメ 外：ヘラミガキ 内：ナデ		やや少	明茶褐色	良好	ほぼ完全	外面赤色顔料塗布
14	蓋	X4Y7 3層	つまみ径2.6	頂部：ナデ 外：ヘラミガキ 内：ナデ		少	淡橙肌色	良好	約1/6	
15	蓋	X4Y7 3層	つまみ径2.1 口径9.3 器高4.4	頂部：ナデ 外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ		中	淡橙褐色	良好	約1/3	
16	鉢	X5Y7 3層	口径7.0 器高3.0 底径6.0		外：丁寧なナデ 内：ナデ	少	淡茶褐色	並	約2/3	
17	高杯	X5Y9		外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	外：丁寧なナデ 内：ナデ	少	淡橙肌色 杯部内： 淡灰褐色	並	約2/3	外面赤色顔料塗布
18	高杯	X2Y8 3層			外：丁寧なナデ 内：ナデ	少	淡橙肌色	良好	ほぼ完全	外面赤色顔料塗布 透孔4個
19	高杯	X3Y9 3層		外：ハケメののちヘラミガキ 内：ヘラミガキ	外：ハケメののちヘラミガキ 内：ナデ	少	濃橙褐色	良好	ほぼ完全	
20	高杯	X4Y3-4 3層	脚端径9.5	内：ナデ	外：ヘラミガキ 内：ハケメのちナデ	少	淡橙褐色	やや不良	ほぼ完全	スス付着
21	底部	X2Y8 3層	底径5.0		外：ハケメ 内：ハケメ	中	外：淡茶褐色 内：黒褐色	並	ほぼ完全	

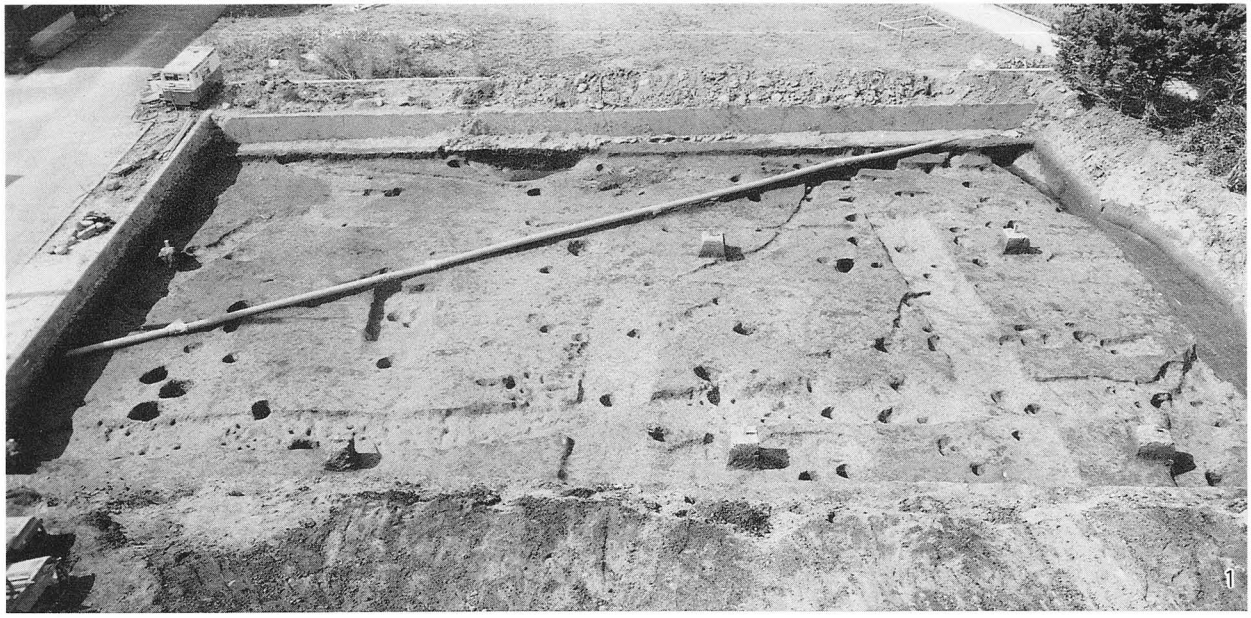
第6表③　昭和61年度出土弥生土器・古式土師器観察表

図版1

昭和38年撮影

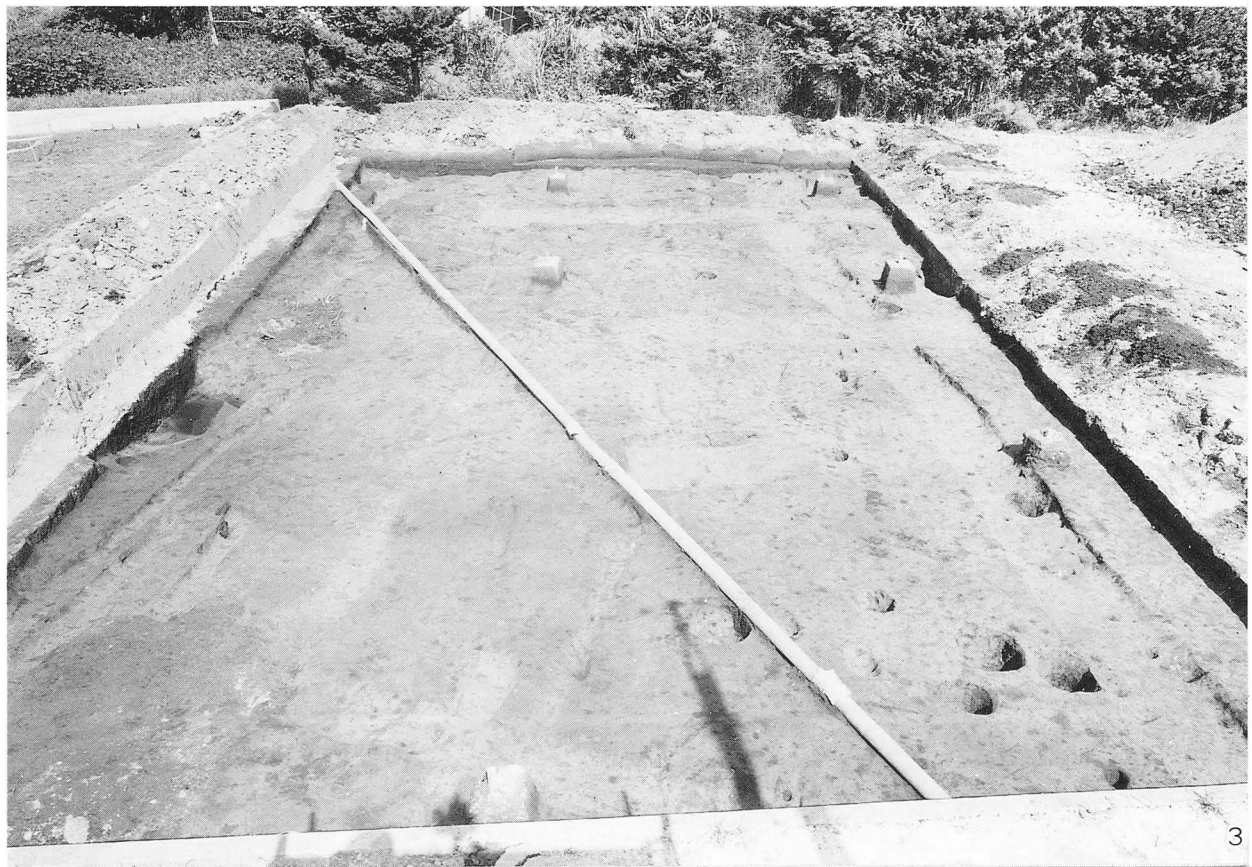
図版３

１．発掘区北側全景
（南から）



2.発掘区南側全景
（北から）

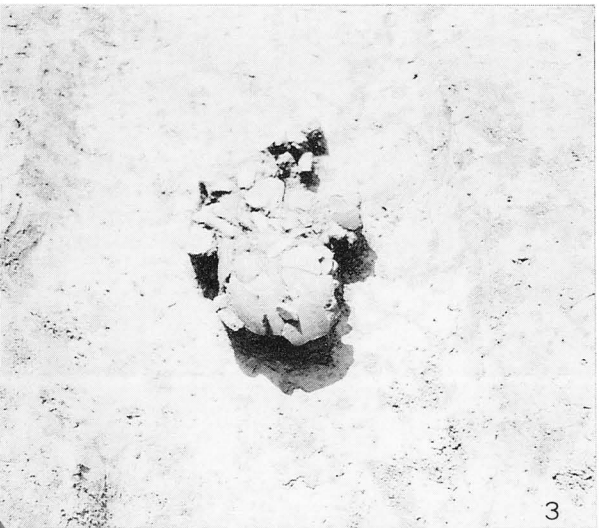
3.発掘区北側全景
（西から）



図版４

1.発掘区南側全景
（西から）

2.掘立柱建物の
桂六群（西から）



3.溝－22遺物出土状況

4.作業風景

図版5

1.溝－22

2.穴－17

3.穴－103

4～6.包含層

図版6

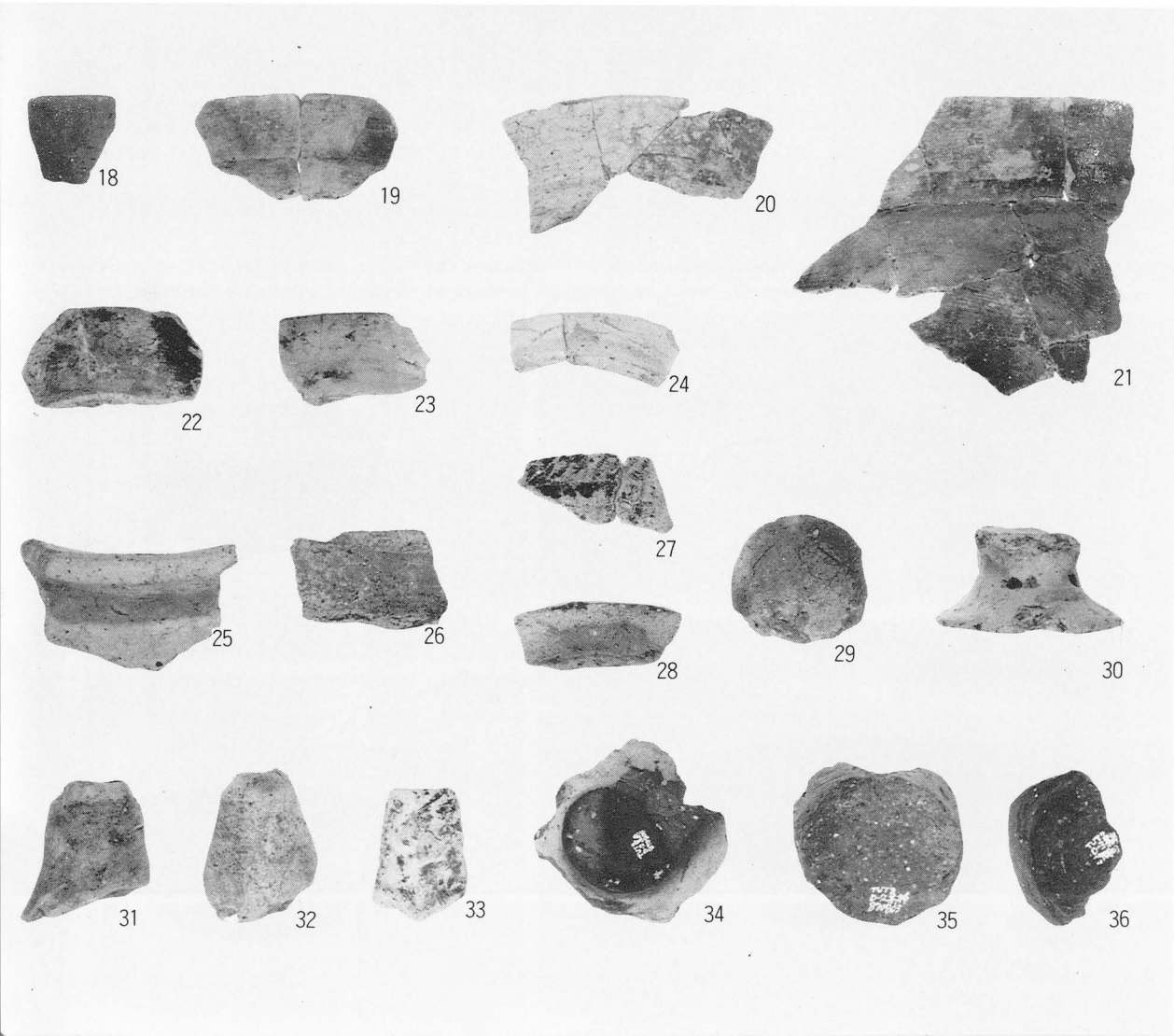
1・3～17.包含層

2.溝－22

18～20・22～32・34～36.包含層

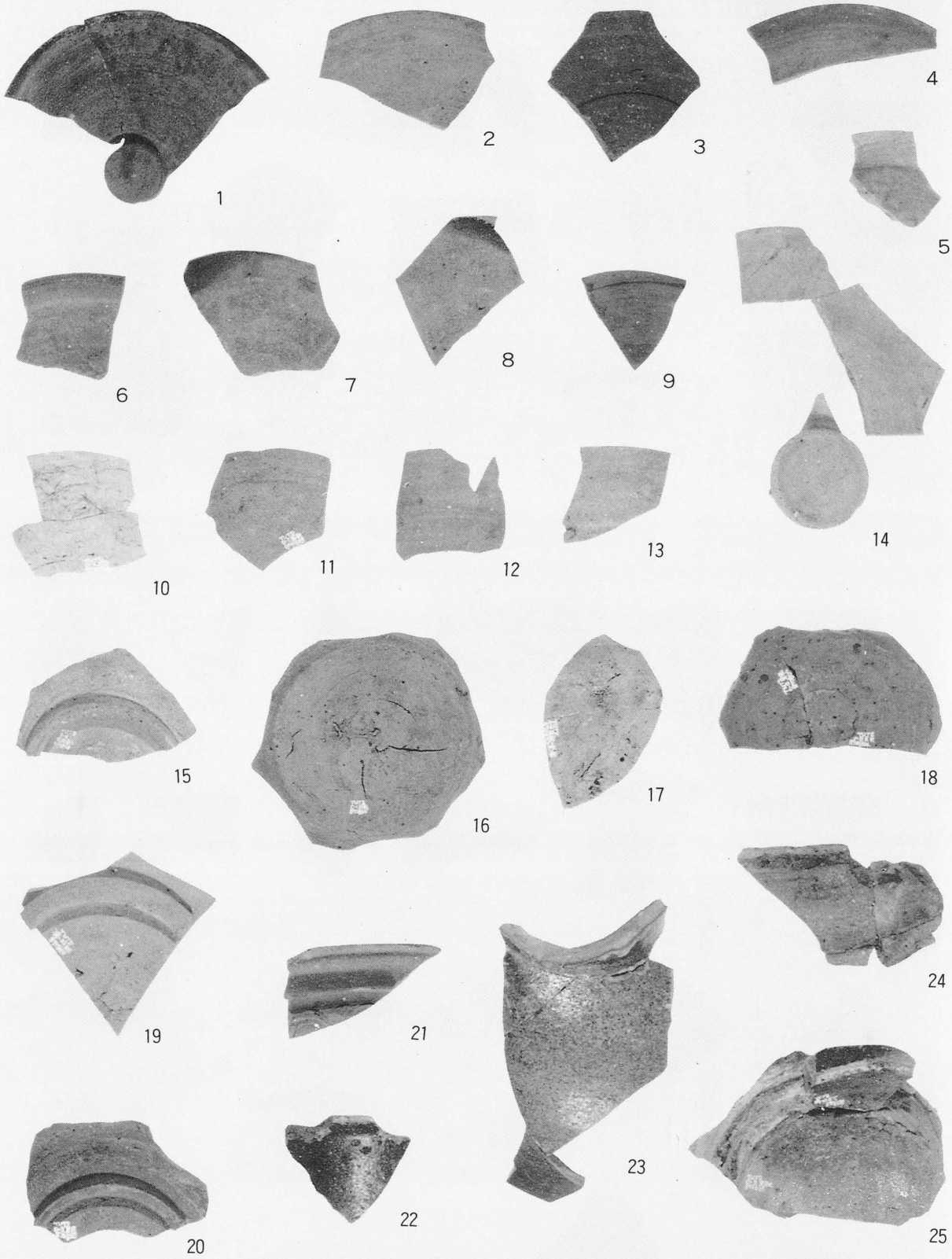
21.穴－17

33.溝－22



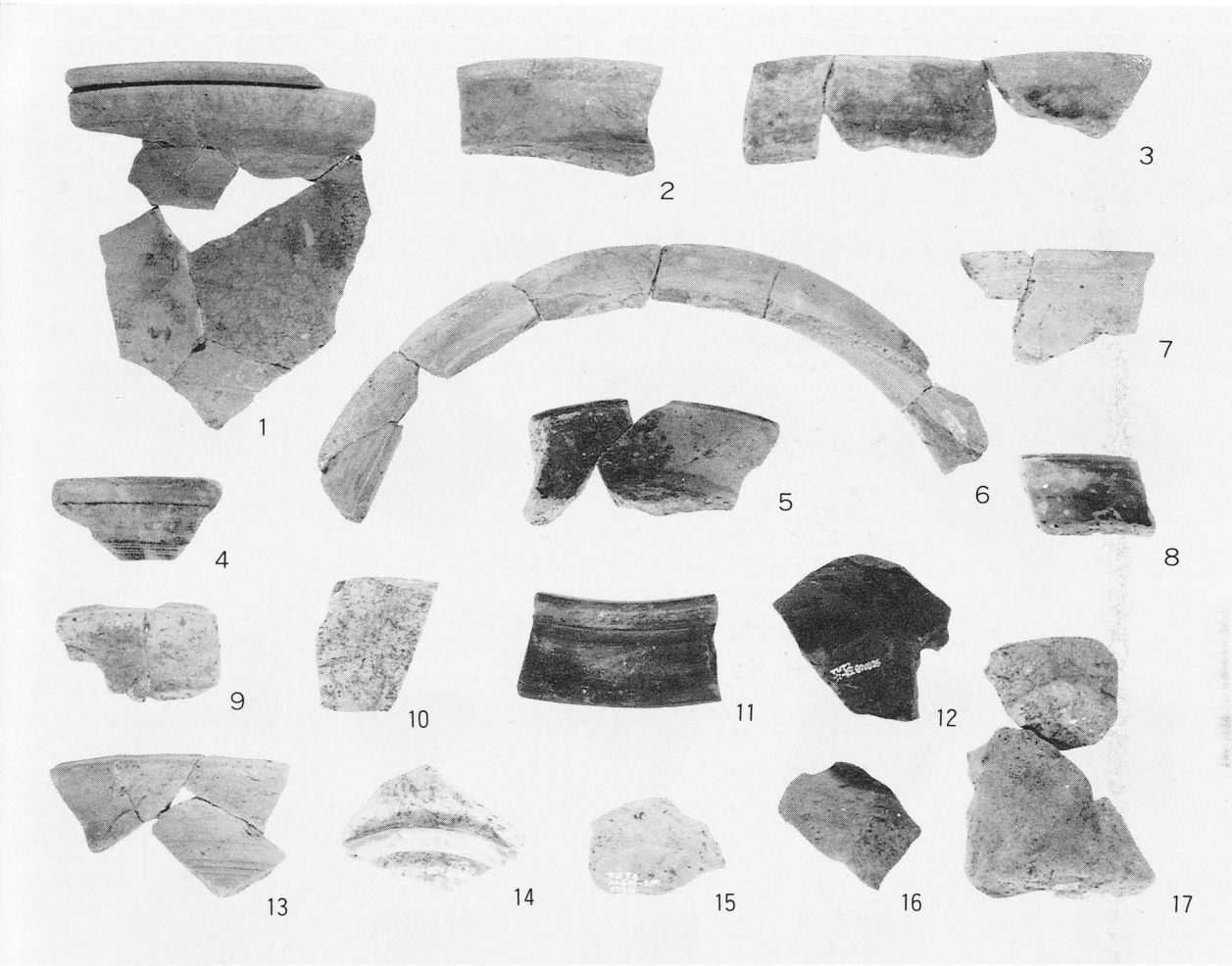
図版７

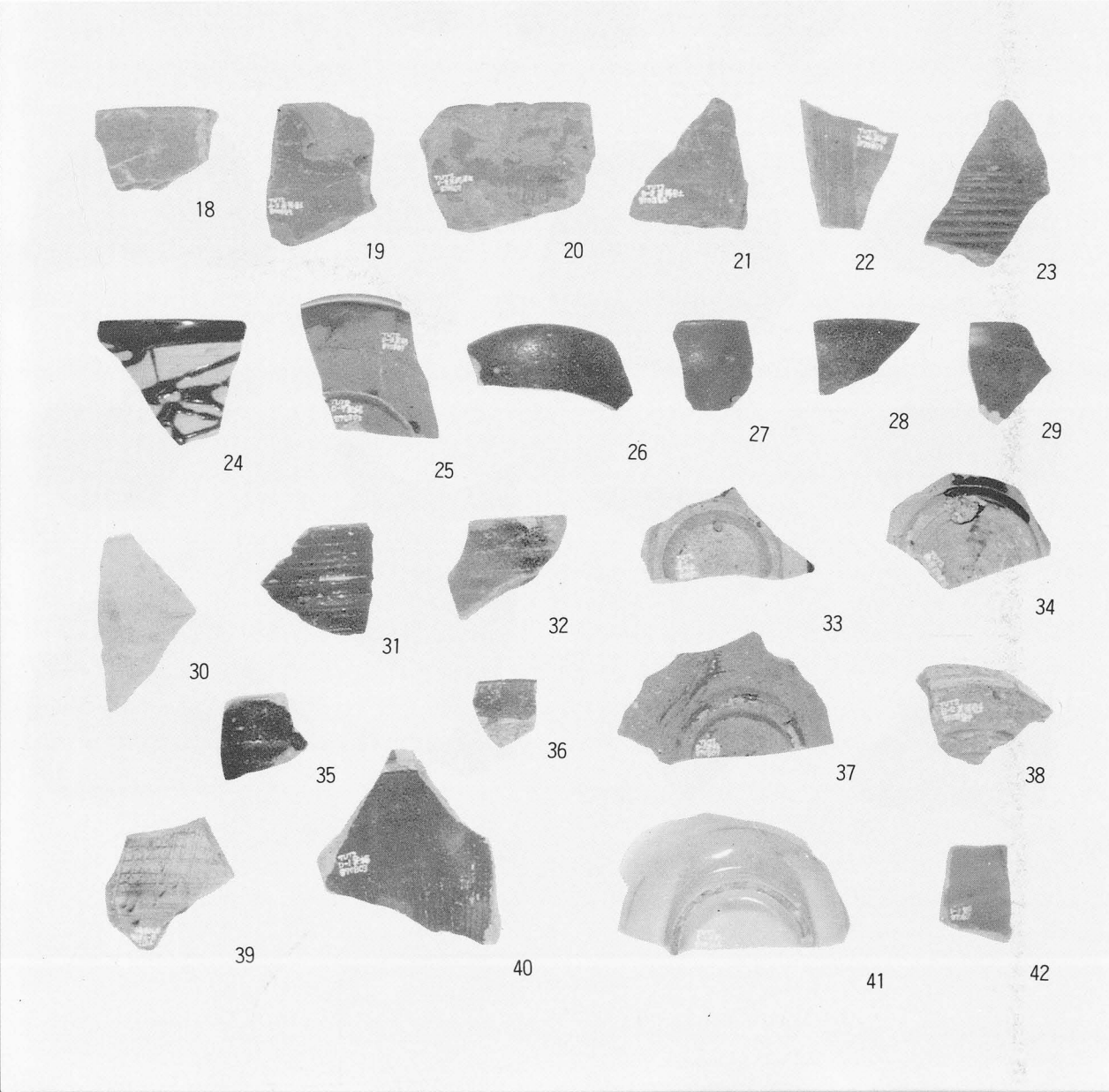
包含層



図版8

包含層


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17


18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

浦　田　遺　跡

―― 第２次発掘調査報告 ――

立山町文化財調査報告書第６冊

発行日　昭和63年３月31日

編　集　立山町教育委員会

発　行　立山町教育委員会

印　刷　日興印刷株式会社